

鹿児島県笠利町文化財調査報告書

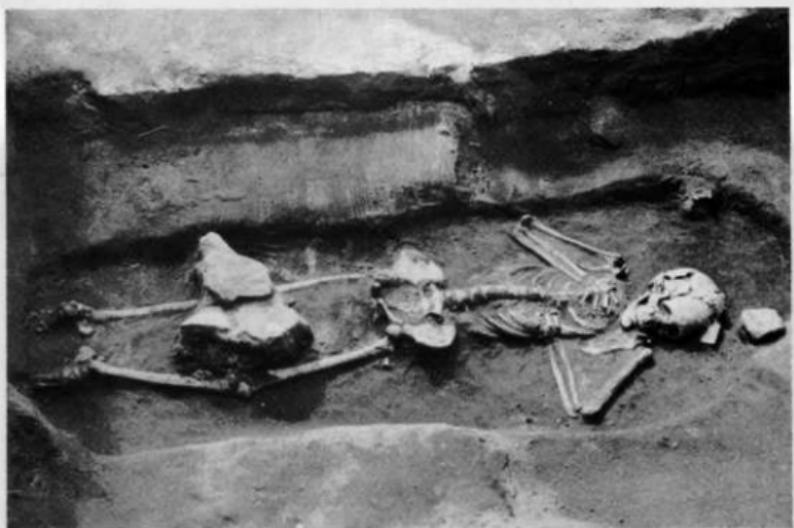
宇宿貝塚

昭和 54 年 3 月

鹿児島県笠利町教育委員会

正誤表

		誤	正
挿図目次	第30図	(融合型式)	(融合型式)
挿図目次	第32図	C地点出土	C出土
P 1	第1図	5. 宇宿漆	5. 宇宿漆
P 1	第1図	13. ヤーヤ	12. ヤーヤ
P 2	21行	砂岳内側	砂丘内側
P 5	第3図	宇宙貝塚周辺地形図	宇宙貝塚周辺図
P 22	第7図	6. 黒免色砂層	6. 黒褐色砂層
P 27	8行	円礫塊	円礫塊
P 41	7行	塊石	塊石
P 42	3行	礫塊	礫塊
P 42	12行	礫塊	礫塊
P 42	15行	礫塊	礫塊
P 51	29行	幅15cm	幅15cm
P 53	18行	左頸部	左頸部
P 53	20行	頸部右側	頸部右側
P 61	19行	…するにとどまる。	…するにとどまる。
P 65	第29図	面繩車洞式脚台	面繩東洞式脚台
P 66	第30図	面繩車輪式	面繩東洞式
P 78	18行	モチーフ	モチーフ
P 84	18行	第4表	第1.9表
P 101	10行	沖永良部島住居貝塚	沖永良部島住吉貝塚
P 240	第1図	5. 遺跡	5. 柴引遺跡
P 240	第1図	8. 東	8. 東敬寺址
P 241	12行	柴引遺跡	柴引遺跡



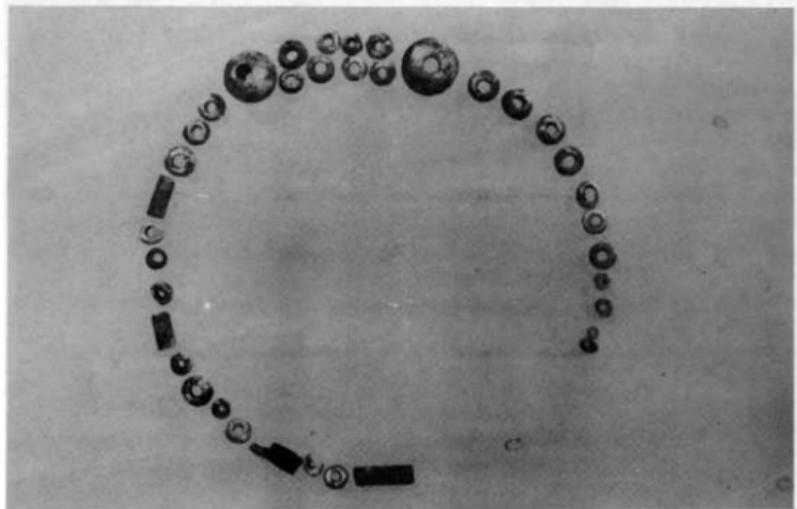
宇宿貝塚 G-7 区 出土人骨



同上跨間の嬰兒骨



宇宙貝塚G-7区人骨 小玉出土状況(頸に着く)



同上 人骨の頸に着装された玉類(着装の配列通り)

序 文

わが笠利町は海の幸、山の幸に恵まれたところであります。いにしえより、それを糧として、幾世代の人々が生活してきたであろうことは、町内に点在する多くの遺跡により、容易に想像できますが、これを解明する機会も少なく、このことは今後奄美の問題点の一つであります。

近年の産業経済の発展に伴い、諸開発事業等で遺跡が消滅され、特に本町では砂の採集等で遺跡の消滅が憂慮されます。

その折も折り、文化庁が宇宿貝塚の重要性から国の重要文化財に指定するため、其の性格及範囲の確認調査をのぞんでおられましたので、笠利町では有難い事だと思い、国及県の指導と援助をうけ発掘調査をする事にいたしました。

今回の調査は夏の暑さ厳しい時期でしたが、河口先生を始め、県当局及文化庁からは稻田調査官が来島、ご指導下され、又奄美考古学会員や大島北高校生、町当局、地主等のご理解と、ご協力で調査が完了出来感謝に堪えません。

出土品は笠利町郷土館で保存し、報告書とともに文化財思想の普及と青少年の教育の資料とともに学術研究の一助にしたいと思います。

昭和53年12月

笠利町教育委員会教育長 西 忠茂

例　　言

1. 本書は、昭和53年8月3日より23日まで21日間にわたり実施した大島郡笠利町宇宿に所在する宇宿貝塚の確認調査の報告書である。
2. 発掘調査は笠利町教育委員会が主体者となり、文化庁・鹿児島県教育委員会が協力した。
3. 本書は河口貞徳が編集し、執筆には、河口貞徳・出口浩・本田道輝があたり、報文の末尾にそれぞれ文責を記した。
4. 調査中の実測図の作成は出口浩・本田道輝・中山清美が行ない、地形の測量・製図には牧野哲郎があたった。
5. 遺跡・遺物の写真撮影は河口貞徳が行ない、遺物の整理・実測・製図のうち、土器・石器は出口、貝器・その他は本田が担当した。
6. 自然遺物については、人骨は長崎大学医学部内藤芳篤教授、獸骨は鹿児島大学農学部大塚闇一教授・西中川駿助教授、魚骨は鹿児島大学水産学部今井真彦教授・四宮明彦助手、貝類は鹿児島大学平田国雄名誉教授、石器は鹿児島大学石川秀雄教授に同定と所見をいただき、玉類については鹿児島大学地質富田克利助教授並びに東京芸術大学保存科学部富沢威助手に分析していくだいた。記して謝意を表する。

目 次

第1章 序 説	2
1. 遺跡の立地と環境	2
2. 調査の経過	6
第2章 発掘調査	11
1. 遺跡総説	11
2. 各地点の調査	21
(1) 第1地点の調査	21
① M線の調査	21
② G線の調査	28
③ 7線の調査	29
(2) 第2地点の調査	32
(3) 第3地点の調査	34
① Aトレンチの調査	34
② Cトレンチの調査	35
(4) その他の調査	38
第3章 遺構・遺物	40
1. 遺構	40
(1) 集石	40
(2) 石組住居址	41
(3) 壑状遺構	44
(4) 貯藏穴	45
(5) I-7区5層礫群	46
(6) I-7区・J-7区6層礫群及び掘り込み	46
(7) 埋葬址	49
2. 遺物	63
a. 人工遺物	63
(1) 土器	63
(2) 石器	84
(3) 貝器	92
(4) 装飾品	93
b. 自然遺物	95
(1) 獣骨	95
(2) 魚骨	97
(3) 貝類	99
第4章 総 説	101
◎ 宇宿貝塚出土の人骨	

挿 図 目 次

第 1 図 宇宿貝塚と周辺の遺跡	1
第 2 図 宇宿貝塚地形図	3
第 3 図 宇宿貝塚周辺図	5
第 4 図 第 1 地点 M 線・7 線地層断面図	10
第 5 図 遺物の層位別出土状況	16
第 6 図 宇宿貝塚造構分布図	19
第 7 図 第 1 地点 G・M 線トレンチ西壁断面図	22
第 8 図 M-5 区土器片疊出土状況(第 5 層)	24
第 9 図 M-10 区第 6 層疊出土状況平面図・見通し断面図	26
第 10 図 M-5 区東南壁面図(第 6 ~ 9 層)	28
第 11 図 7 線南西壁断面図	30
第 12 図 第 2 地点・土層断面図	33
第 13 図 第 3 地点 A トレンチ東壁・南壁断面図	35
第 14 図 C トレンチ 1・2 区第 2 層上層式土器出土状況	36
第 15 図 第 3 地点 C トレンチ 1 ~ 3 区第 2 層平面図	37
第 16 図 第 3 地点 C トレンチ平面・断面図	37
第 17 図 M-5 区第 7 層集石造構平面・断面図	40
第 18 図 石組住居址遺構実測図	42
第 19 図 第 1 地点 I-7 区第 5 層集石群平面図	46
第 20 図 第 1 地点 I-7 区第 6 層落ち込み造構	47
第 21 図 第 1 地点 J-7 区第 6 層造構・北壁断面図	48
第 22 図 第 1 地点 O・P 区 Pit 実測図	49
第 23 図 配石埋葬図	50
第 24 図 埋葬人骨図	52
第 25 図 玉頸着装状態図	53
第 26 図 人骨着装玉頸図	55
第 27 図 嬰児覆石に用いた石皿破片	59
第 28 図 磨製小形石器	60
第 29 図 面縄東周式脚台	65
第 30 図 面縄東周十市来式(融合型式)	66
第 31 図 布目痕土器	74
第 32 図 第 3 地点 C 地点出土の上層式底部	77
第 33 図 土器	109
第 34 図 土器	110

第3 5図 土器	111	第7 2図 土器	148
第3 6図 土器	112	第7 3図 土器	149
第3 7図 土器	113	第7 4図 土器	150
第3 8図 土器	114	第7 5図 土器	151
第3 9図 土器	115	第7 6図 土器	152
第4 0図 土器	116	第7 7図 土器	153
第4 1図 土器	117	第7 8図 土器	154
第4 2図 土器	118	第7 9図 土器	155
第4 3図 土器	119	第8 0図 土器	156
第4 4図 土器	120	第8 1図 石器	157
第4 5図 土器	121	第8 2図 石器	158
第4 6図 土器	122	第8 3図 石器	159
第4 7図 土器	123	第8 4図 石器	160
第4 8図 土器	124	第8 5図 石器	161
第4 9図 土器	125	第8 6図 石器	162
第5 0図 土器	126	第8 7図 石器	163
第5 1図 土器	127	第8 8図 石器	164
第5 2図 土器	128	第8 9図 石器	165
第5 3図 土器	129	第9 0図 石器	166
第5 4図 土器	130	第9 1図 貝器	167
第5 5図 土器	131	第9 2図 貝器	168
第5 6図 土器	132	第9 3図 貝器	169
第5 7図 土器	133	第9 4図 貝器・サンゴ加工品	170
第5 8図 土器	134	第9 5図 装飾品ほか	171
第5 9図 土器	135		
第6 0図 土器	136		
第6 1図 土器	137		
第6 2図 土器	138		
第6 3図 土器	139		
第6 4図 土器	140		
第6 5図 土器	141		
第6 6図 土器	142		
第6 7図 土器	143		
第6 8図 土器	144		
第6 9図 土器	145		
第7 0図 土器	146		
第7 1図 土器	147		

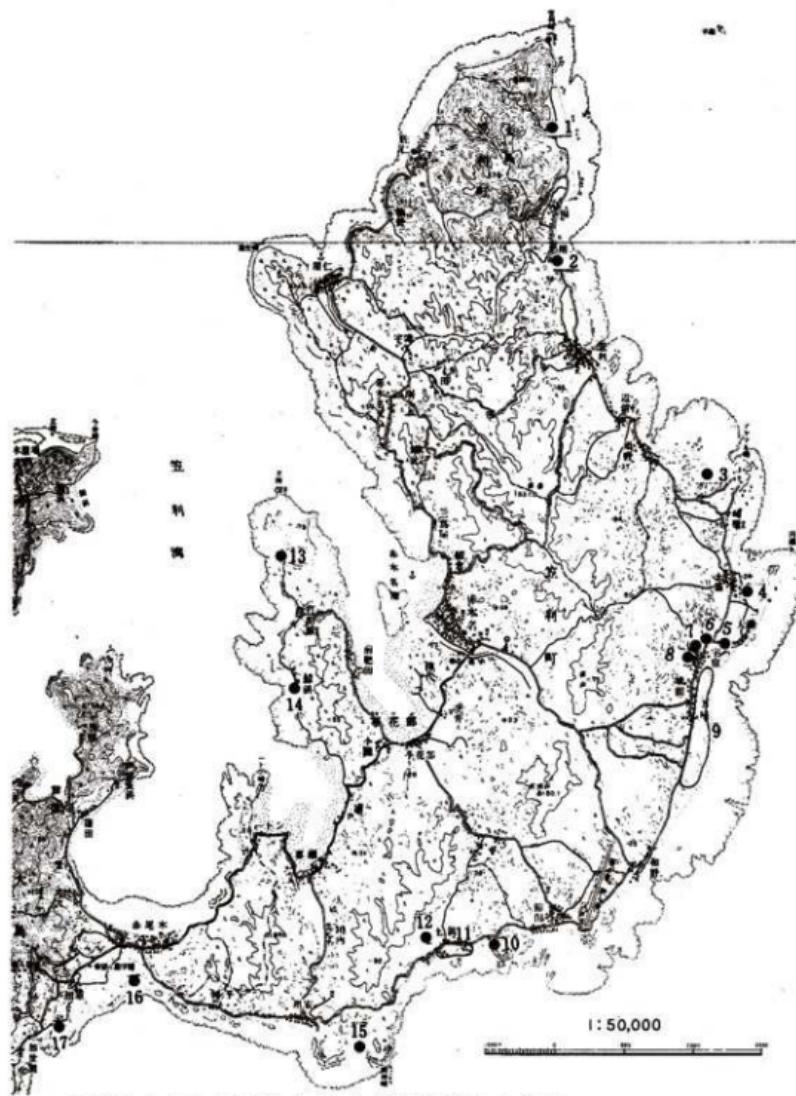
図 版 目 次

グラビア 宇宿貝塚G-7区出土人骨・同時間の嬰兒骨	
宇宿貝塚G-7区人骨小玉出土状況・人骨の頸に着装された玉類	
図版1上 宇宿貝塚全景)	172
図版1下 宇宿貝塚第1地点の調査	
図版2上 M-6・7区住居址を被覆する礫群)	173
図版2下 M-6・7区石組住居址	
図版3 第1地点出土状況	174
図版4上 第2貯蔵穴)	175
図版4下 第3貯蔵穴	
図版5 玉出土状況他	176
図版6上 M-5区集石遺構内土器出土状況)	177
図版6下 M-5区集石遺構内市来式土器出土状況	
図版7上 M-5区7層集石遺構)	178
図版7下 特殊遺物	
図版8上 人骨着装の青色ガラス小玉)	179
図版8下 M-10区出土の布目痕土器	
図版9上 M-5区集石遺構出土・市来式土器	
図版9下 M-5区集石遺構出土・面縄東洞十市来の土器)	180
図版10上 市来式・面縄東洞十市来)	181
図版10下 面縄東洞十市来	
図版11 市来式・面縄東洞式・喜念I式	182
図版12 面縄東洞式	183
図版13上 第3貯蔵穴出土土器)	184
図版13下 喜念I式他	
図版14 類市来・市来式・面縄東洞十市来・把手付	185
図版15上 嘉徳I式	
図版15下 草野式・台付皿形土器他)	186
図版16上 嘉徳I式A・全B)	187
図版16下 嘉徳I式A	
図版17上 嘉徳II式)	188
図版17下 嘉徳II式他	
図版18 面縄西洞式他	189
図版19 喜念I式	190
図版20上 Cトレンチの土器	191

図版20下 大瀬の土器	191	図版28下 青玄・白玄・染付	199
図版21上 M-5区8層の土器	192	図版29 石器類	200
図版21下 滑石入り土器)	図版30 重飾	201
図版22 条痕ある土器	193	図版31 貝輪その他	202
図版23 宇宿貝塚出土の縄文式土器	194	図版32 穿孔貝・貝輪	203
図版24 宇宿上層式・弥生式土器	195	図版33 貝斧・穿孔貝	204
図版25上 宇宿上層B式)	図版34 獣骨	205
図版25下 土器底部	196	図版35 獣骨	206
図版26上 宇宿上層式他)	図版36 魚骨	207
図版26下 土器底部)	図版37 魚骨	208
図版27 須恵器	198	図版38 魚骨	209
図版28上 須恵器・青玄	199		

表 目 次

第 1 表 第1地点土器層位別出土表	39
第 2 表 住居址内堆積層分類表	48
第 3 表 玉類計測表	56
第 4 表 石器出土一覧表	90
第 5 表 獣骨一覧表	96
第 6 表 獣骨・区・層別出土表	96
第 7 表 第1地点の層序別出土魚骨一覧表	97
第 8 表 地点・トレンチ・地層別魚骨出土個数(A)第1地点	98
第 9 表 地点・トレンチ・地層別魚骨出土個数(B)第1地点	98
第10表 地点・トレンチ・地層別魚骨出土個数(C)第2・3地点	98
第11表 宇宿遺跡出土貝類目録	99
第12表 捜図土器一覧表	103
第13表 捜図土器一覧表	104
第14表 捜図土器一覧表	105
第15表 捜図土器一覧表	106
第16表 捜図土器一覧表	107
第17表 捜図貝器・装飾品一覧表	107
第18表 図版・魚骨一覧表	107
第19表 捜図石器一覧表	108



1. 玉利崎 2. 田 3. アキマツ崎 4. 土塙 5. 宇宿港 6. 宇宿 7. 高又
8. 宇宿小 9. 万屋 10. 立神 11. 土浜 12. ヤーハ 13. サウチ 14. 鰐浜
15. 明神崎 16. 赤尾木 17. 手広

第1図 宇宿貝塚と周辺の遺跡

第1章 序 説

1 遺跡の立地と環境

宇宿貝塚は、鹿児島県大島郡笠利町宇宿大龍2298番地その他に所在する。奄美大島は奄美諸島のなかで、瀬之島と共に地形が高くけわしく、比較的に新しい地質時代に起った島の沈降によって海岸線の出入が多く複雑であり、湾奥にひらいた谷は平地が狭く孤立している。島の大半は300～400mの山陵をもつ山地からなり、浸蝕谷は若く、中流以下は急崖となり、谷底は狭く、川の流水量は少ない。海岸は山地がせまり急傾斜で山裾が直ちに海に没している。

しかしこのような地形的特徴をもつ奄美大島のなかで、本遺跡のある赤尾木本地帯部以北に位置する笠利半島は北部と対称的で、山地は低く丘陵性を呈し、半島最高の高岳でも183.6mにすぎず、南北に並列する山地は、谷によって分断され孤立している。半島の西岸は沈降して、溺れ谷の地貌を呈しているが、東岸は逆に隆起し、標高数拾mの海岸段丘が発達して、平坦地を形成している。

海岸線は、西岸は水平段階に富み、とくに笠利湾にのぞむ地域が顕著で、また海岸砂丘の発達も東岸に比べて弱く、小範囲にとどまっている。東岸は単調で出入りが少なく、砂丘がよく発達し、その背後に集落の形成がみられる。

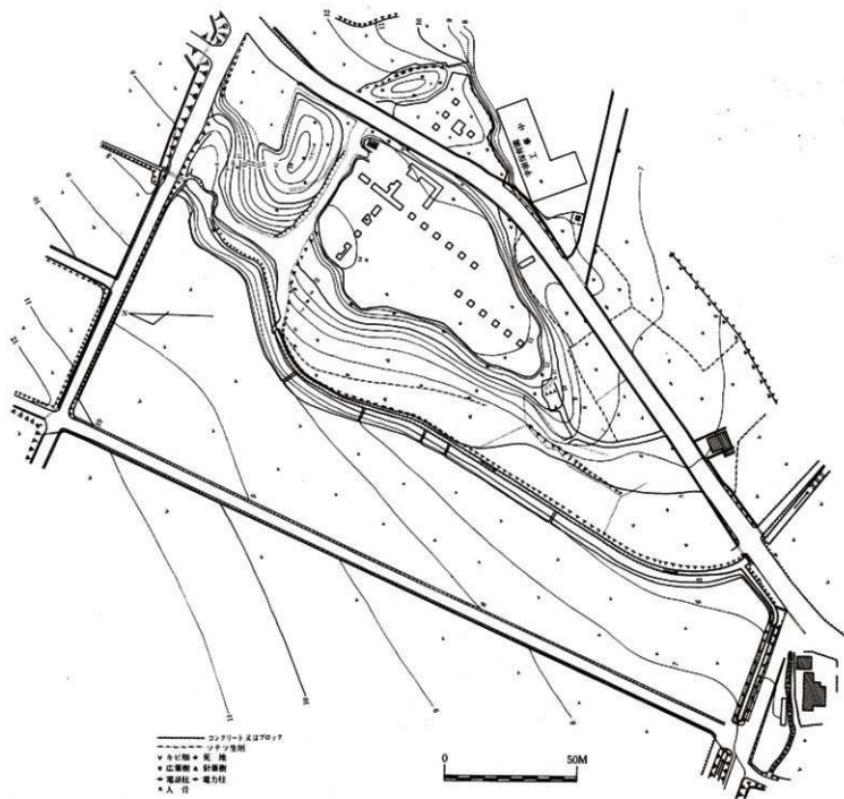
砂丘の形成は、沖積世における海面変動に対応することが脱かれているが、奄美諸島における変動については、三位秀夫・木越邦彦の研究がある。⁽¹⁾ それによると、喜界島における沖積世最大の海進は、 $6,630 \pm 150$ 年B.P.にみとめられ、その汀線は現海面上7mに発達する。この旧汀線は、喜界島以外の奄美諸島では、現海面上3.5m以下に発達しており、これは、沖積世最大海進後、喜界島のみが相対的に隆起した結果であるという。

笠利半島における海進の資料としては、サウチ遺跡の調査がある。⁽²⁾ 昭和52年8月に行なった同遺跡の調査の際に、砂丘内側(C-V区、D-V区)を試掘した結果、標高4mの高さに珊瑚クズ層を発見したが、これは旧汀線と考えられるものである。旧汀線に接して、内陸側には面糞西洞式(獨文式後～晩期該当)の包含層が、同じ水準で発見された。

面糰西洞式の遺跡は、旧汀線の時期以降に海退現象がおこり、その後に形成されたものと考えられる。

面糰西洞式の包含層は、砂丘表面より11層目に当るが、12層・13層は共に白色砂層で、色調等には差異がなく、たゞ12層は粒子が細かであるが、13層は粒子が荒く、grading現象が認められる。共に貝殻が若干含まれているが、土器などの遺物は全然出土しない。以上の状況より見て、12層以下は水成層とみられる。

サウチ砂丘の背後にある低湿地は、旧汀線時の潟湖であり、前記の12層以下は、潟湖前面に形成された沿岸洲である。サウチ砂丘はこの沿岸洲の海側に形成されたもので、旧汀線以後の海退によって砂丘の堆積がはじまった。1920±80年B.P.⁽³⁾には、砂丘は標高5.7mに達している。



第2図 宇宿貝塚地形図

砂丘の堆積と、サウチ遺跡との関連をみると、沖積世最大海進時に島嶼と沿岸洲が形成され、その後、沿岸洲が離水して離島となり、人間の生活適地になると、こゝに面鏡西洞式の人々が住むようになった。

一方、沿岸洲の前面には砂丘の堆積がはじまり、標高5mに達した時期には、弥生前期の文化を有した人々の生活が始まり、更に堆積が進んで標高5.7mに及ぶと、弥生後期文化に推移しているのである。

笠利半島の東海岸は、西海岸に比べて、砂丘がよく発達し、その大部分が遺跡地となっている。北よりあげると、半島の北端に近い笠利崎遺跡・用道跡・アヤマル崎遺跡・土盛遺跡・大瀬遺跡・宇宙表遺跡・宇宙貝塚・高又遺跡・宇宙小学校遺跡・万屋遺跡・立神遺跡・土浜遺跡・明神崎遺跡などをあげることができる。砂丘の内側には、珊瑚礁の風化した粘質の紅褐色土層の分布が見られるが、この地域ではほとんど遺跡を見ることができない。

ただ南端に近い土浜集落に近いヤーア遺跡⁽⁴⁾唯一の内陸部に立地する遺跡である。隆起珊瑚礁にできた洞穴遺跡で、奄美諸島では最も古い時期に属すと考えられている。

東海岸における砂丘の形成過程は、遺跡の立地状況との関連によって、かなりあとづけることができる。アヤマル崎から和野に至る海岸は、砂丘の発達が最も良い地域であるが、ここでは内陸側の砂丘に、宇宙貝塚・高又遺跡・宇宙小学校遺跡などの古い遺跡（縄文時代中期前後に該当）が分布し、海岸との中間に位置する砂丘には、弥生時代中期の大瀬遺跡が立地している。更に最も外側の直接海に面する砂丘では、弥生時代後期に該当する、兼久式土器を出土する、土盛・宇宙表・万屋などの遺跡が分布し、特に万屋遺跡は規模が大きく、延長は2kmを越す程である。

以上のように、内陸側に最も古い遺跡が立地し、海岸側に向かって漸次新しい遺跡が分布することは、砂丘の形成も、内陸部にはじまり、海岸側へ及んでいったことを示している。

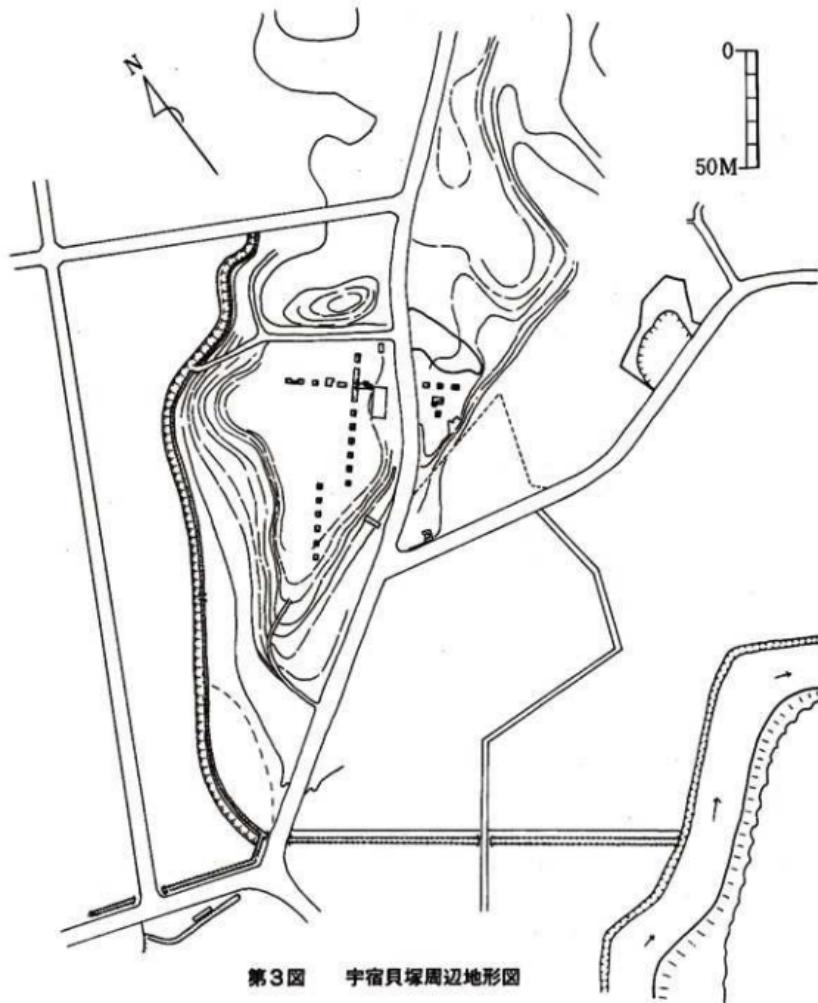
アヤマル崎以北および、和野以南の海岸砂丘についても、内陸側よりはじまり海岸側へ形成されていったと考えられるが、現在のところ海岸側の砂丘に、弥生時代後期該当と思われる兼久式の遺跡が発見されているだけである。

宇宙貝塚の立地する地域を例として、内陸側の砂丘の形成についてみよう。宇宙貝塚は笠利半島東岸のほぼ中央、砂丘の内縁に位置し、県道が大瀬へ分岐する地点に当たる。標高13~12mの小丘陵で、北東端は、標高18.9mの隆起珊瑚礁よりなる小山に接し、西南は、標高4mの低地を隔てて、宇宙小学校遺跡の立地する台地と対照している。

小丘陵の上面は略平坦で、北東~南西方向に細長く、長径100m、短径60m、周辺との比高は約6mの孤立丘陵で、基盤は隆起したビーチロックからなり、東南より北西方向へ、約3°の傾斜角をもって下っている。小丘陵の東南部には、その露頭が見られる。

砂丘は前記のビーチロック上に、南西に薄く、北東へ厚く堆積しており、最下層は黄白色の均質な砂からなり、遺物を含まない古い砂層である。沖積世最大海進以前の堆積と考えられる。

古い砂層の上には、褐色ないし黒褐色の砂層が8層に渡って堆積し、それぞれ先史時代以降の遺物を包含している。遺物の中で最も時代のさかのばるものは、縄文時代中期あるいは後期に該当す



第3図 宇宿貝塚周辺地形図

るものである。したがって、これらの砂丘の堆積が始まった時期は、沖積世最大海溢以後と考えられる。海退によって裸地を生じ、砂の供給が増加したことが、砂丘堆積の一因となつたであろう。

宇宿小学校遺跡の立地する台地も、宇宿貝塚のある小丘陵と同様の成因によるもので、隆起したビーチロッカ上に堆積した砂丘であることは、台地の西側の断崖が証明している。

高又遺跡は、宇宿貝塚の丘陵と、宇宿小学校遺跡の台地との中間に位置する低地に立地し、現在は標

高7mであるが、表面は圃場整備作業によって、1m余りの埋土によって被覆されている。本来の地表は埋土下の砂丘面であって、この砂丘中に遺跡が発見された。この砂丘は、沖積世の最大海進以後に形成されたものと考えられる。(河口)

2 調査の経過

宇宿貝塚は、昭和8年12月17日、三宅宗悦によって発見された。⁽⁵⁾『当時、県道の開削によって、貝塚の中央部が約3mの深さで切られ、貝層が露出していた。貝層は道の西側に特に著明であるが、貝量は割合に少く、この部では地表から約1.5mが砂層、以下1.8m迄は貝層が見られ、土器の包含量は中等、長さは県道の掘削で検すると、南北約50間(90m)に及び、相当大きな貝塚と思われる。12月20日改めて、この貝塚の一部(前記貝層露出の中央部の西方約2mの芋畑中)を試掘して見たが、この部では表土より60cmが砂層で、以下黒土層となり、7個の焼石が不規則に並んで発見された。貝量は少く、遺物の包含も乏しいが、獸骨、魚骨等が出た』⁽⁶⁾と記述されている。

県道の掘削部分の長さ、南北約50間とあるのは、貝塚の北東端に接する隆起珊瑚礁の部分も加えて計測したものと考えられる。また貝塚の中央部が約3mの深さで切られ、とあるが、現在は道路との比高は約2mである。南島先史時代の桜岡、第2図⁽⁷⁾に見られる貝塚の断面では、現在の断面と異なり、中央に高く、両端へ低くなっている状況が觀察され、当時は貝塚上面が、起伏のある丘陵状の地形であったことを示している。現在の平坦な台地面の地形は、昭和8年以降の削平によるところと考えられる。

三宅宗悦の調査以後20年余、その間太平洋戦争を経て、奄美大島が本土に復帰した直後、昭和29年5月、南日本新聞社と鹿児島大学の主催による奄美大島学術調査団に属し、河口貞徳・林田重幸が宇宿貝塚の調査を行なった。⁽⁸⁾県道面より約2m高い畠地を、県道に沿って、縦2m、横2m、深さ2.05mの試掘を行なった結果、地表より30cmには有機質を含む土層・次の40cmは純粋砂層・70cm以下20.5cmまでの13.5cmは黒土層であった。遺物の出土状況は、地表より70cmの、砂層と黒土層の境から須恵器・黒土層中、上部8.5cm(地表より70cm~15.5cm)から無文尖底土器(宇宿上層式)・黒土層中、下部5.0cm(地表より15.5cm~20.5cm)から有文土器(宇宿下層式)を主とし、無文尖底土器(宇宿上層式)も出土した。黒土層下部の地表下20.0cm以下からは獸骨を伴出し、土器も大片を出土している。

奄美大島学術調査団の調査に続いて、九学会連合奄美大島共同調査委員会による初年度の調査で、昭和30年7月20日より8月10日まで、国分直一、河口貞徳、曾野寿彦、野口義磨によって、宇宿貝塚の調査が行われた。⁽⁹⁾

発掘は県道に平行して、略南北方向に、幅2m、長さ15mの第1・第2トレンチを設け、このトレンチの南端を基点として西方向に、第1・第2トレンチと直角に、幅2m、長さ8mの第3ト

レンチを設け、更に第2トレンチ内に現われた石組（住居址）を追求するために、第2トレンチの一部（長さ5m）を、西方へ幅、略3m拡げて、総面積5.85m²の発掘調査を行なっている。

遺跡は、基底部に遺物を含まぬ純砂層があり、これは宇宿人の住む以前の古い砂丘であり、この砂丘は、西南部から東北部にかけて、大きく傾斜していたものと考えられ、宇宿人は、この古い砂丘の低い部分に生活していた。と推定している。

地層は、基底部まで浅い所では、表土から6層、深い所では12層が認められた。殆んどが砂質であるが、有機質を含有して全体に黒褐色乃至赤褐色を呈することを明かにした。

貝層は第1トレンチの南部に、地表より約2mの深さにみられ、最も厚い部分で50cmで、局部的なものであった。層位は第6層に当るが、包含層の厚い第2トレンチに至る全体の層位に対応させると、第7層と第8層の間に当っている。

第2トレンチにおいては、特に第6層、第7層において円礫、角礫を多く含み、礫層の感があり、急激な水流によってもたらされたものではないかと思われる程である。と述べている。

遺構としては、第2トレンチの第8層に、宇宿上層式の時期の石組住居址が発見されている。略方形で、内側は約2m、各辺は東西南北に向き、石組内に、中央から南よりに炉址があった。床面から西北隅石組の内外へかけて、多量の「しい」の実が出土した。

遺物の分布状況は、南西に行く程量が減少し、層も薄くなり、東北部はこれに反して遺物が多く層も厚い。

層位による遺物の出土状況は、上部は須恵器が主であり、表土に近い部分では磁器が混入する。第2層から第5層までは須恵、滑石製容器が出土、6層から8層は無文丸底の土器（宇宿上層式）が主体をなし、より下層位には有文の土器（宇宿下層式）が主体をなし、南九州に分布する鶴文後期の市来式土器および屋久島の一腰式土器が併出した。

宇宿下層式土器と市来式土器および一腰式土器が共存したことは、これによって奄美の先史時代の年代は、一応宇宿下層式の名称によって鶴文後期と対比させることができるようになった。しかし宇宿下層式に包括される土器類は複雑で、一時期のものでないと推定している。

遺跡の範囲については、遺物包含層の厚さが西南へ薄く、北東へ厚く、第2トレンチの中央部では地表下3.52mに及んでいるが、第3トレンチ西端では9.6cmにすぎない。一方第1トレンチ南端では、遺物包含層は地表下2mに達している。以上の状況によって、『以上の三つのトレンチによって判ったことは、遺跡の範囲が、最初に考えたように県道の西側には余り拡がらず、南北にのびていることがはっきりした。』としている。

九学会による宇宿貝塚調査によって、漠然としていた南島の先史時代の編年に一つの基準が与えられ、本土の先史時代との結びつきが明らかになり、以後の南島先史時代研究のステップとなつた。

昭和45年には、文化庁の委嘱によって、重要遺跡の緊急指定資料の調整を目的として、沖永良部島の住吉貝塚と共に、宇宿貝塚の調査が行なわれた。当時住吉貝塚は圃場整備事業によってすでに破壊されており、宇宿貝塚は、県道に接する部分に記念の石碑が建てられていたが、この部分から畠への通路が掘削され、遺物包含層が露呈し、土器片・貝類等が地表に散布している状態であつ

た。

その後宇宿部落出身の有志によって、遺跡地が購入されて部落有地となり、貝塚公園となつてゐる。

昭和53年に至つて、笠利町教育委員会は、国及び県の補助事業として宇宿貝塚の、国指定にともなう発掘調査を行なうこととなり、同年8月3日より同月23日まで21日間の調査を行なつた。

調査は遺跡の性格と範囲を明らかにすることを意図して、現在貝塚公園となつてゐる県道西側の丘陵と、丘陵の東側に県道をはさんで接する三角形状の地域(町有地)で、本来は前記丘陵の一部をなす地域、および丘陵の南西に接する低地で県道より西側の地域の3地域を調査対象として選び、県道西側の丘陵を第1地点、同丘陵東端の県道を隔てた三角形状地域を第2地点、丘陵の南西に接する低地を第3地点として、調査上の呼称とした。

第1地点の調査は、地形にあわせて北西—南東方向の線と、これに直交する北東—南西方向の線によって2mの方眼状に区画し、北西—南東方向の線を、北東端を起点として、南西方向へ1・2・3・…・4・5線とし、北東—南西方向の線を、西北部基準より東南方向へA・B・C・…・V線とし、基準点より北西3mにY線・5mにX線を設けた。

調査は前述の直交する線によって囲まれた2m四方の区域を単位として行ない、その区域の北西側と北東側を区画する線の記号を連結して、当該区域の呼称とした。たとえば、A-1区の如くである。

第1地点は台地面上の縱の長さ100m、横の長さ60m、面積は480.2平方mである。全域にわたって遺跡の状況を知るために、縦横に並列する単位区域を、それぞれ一列を選び4mの間隔を置いて調査することにした。

縦列ではM線とG線を選び、M線はM-1区よりM-28区まで10区、G線はG-29区よりG-44区まで6区の発掘を行ない、調査の状況によって、M-1区とM-2区、M-4区からM-10区までを連結して合計21区の調査を行なつた。この区域の担当者は出口浩である。

横列では7線を選び、X-7区よりP-7区まで7区の発掘を行ない、調査の状況によって、Y-7区の南側半分、G-6区の南側半分、H-6区の西隅の $\frac{1}{4}$ 、H-7区の北隅 $\frac{1}{8}$ 、I-7区、O-7区をそれぞれ追加して調査を行なつた。この区域の担当者は本田道輝である。

第1地点の発掘面積は縦列は84平方m、横列は44.5平方m、合計128.5平方mとなつた。

第2地点は縦の長さ48m、横の長さ24m、面積588平方mである。第1地点と同じ方位で同様の2m方眼の区画を行ない、横線(北西—南東)の呼称も第1地点に従つたが、縦線(北東—南西)は県道側(北西)を起点としてABC...L線とした。調査単位およびその呼称も第1地点の呼称に準じた。

調査は横列では6線を選び、C-6区、F-6区、I-6区、縦列はF線を選び、F-9区、F-10区の発掘を行なつた。調査状況に従つて、縦列のE-9区、E-10区、F-10区北半分の拡張調査を行なつた。調査面積は30平方mである。第2地点の担当者は本田道輝である。

第3地点は台地の周辺調査である。台地の南東部崖下の県道にはさまれた低地、台地の南西にのびる尾根の末端部、低地南西端の道路南平地にそれぞれ幅2m長さ6mのトレンチを設け、北東より順次Aトレンチ、Bトレンチ、Cトレンチと呼称した。Cトレンチは4mを拡張し、Bトレンチは調査明日の関係で発掘できなかった。調査面積は32平方mである。第3地点の担当者は中山清美である。

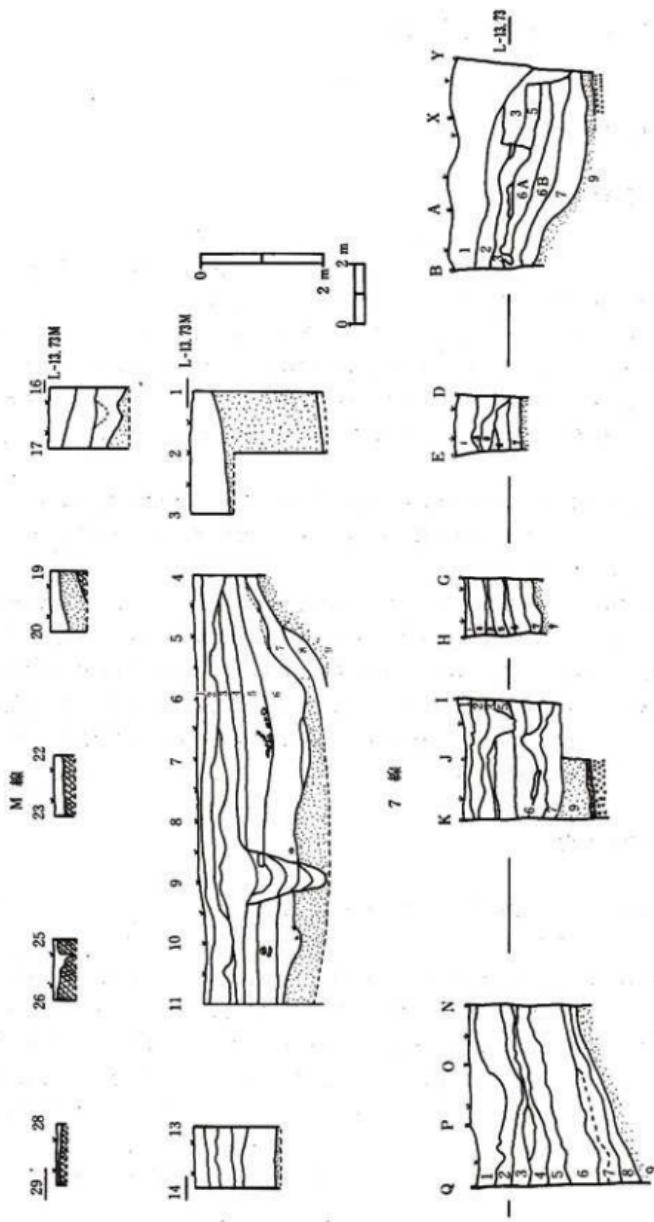
発掘調査と併行して遺跡周辺の地形測量を牧野哲郎の担当で行なった。

調査に関連して、調査期間中に遺跡に隣接する宇宿小学校旧農園跡地に、宇宿保育園建設基礎工事が開始され、第2地点との境に多量の土器片が出土したのでこれを採集し、出土地点の調査を行なった。また同じ基礎工事中に出土したという人骨（頭骨と管骨各一部）を採取し、出土地点をたしかめた。

前記の宇宿小学校旧農園の東、砂糖きび畑一枚を隔てた砂採掘地（大崩遺跡）より、弥生式土器片の散布が見られたので、これを採集した。以上の各地点の調査並に偶発的事項などの処置に翻訳のないように、調査の全般にわたって河口が統括した。（河口）

調査団の構成

調査団長	笠利町教育委員会教育長	西 忠茂
調査主任	鹿児島県文化財審議委員	河 口 貞 鶴
調査員	鹿児島県文化課研究員	出 口 浩
"	加世田女子高等学校教諭	本 田 道 輝
調査補助員	奄美考古学会員	中 山 清 美
"	奄美考古学会員	里 山 勇 広
"	測量技師	牧 野 哲 郎
調査事務長	笠利町教育委員会社会教育課長	三 井 齊 吉
総 労	中場徳義・川畠勝義・筑賀 東・山下繁郎	
委 員	富永幸男・南 隆光・別府良美・太平武徳・藤井悦郎	
作 業 員	京都大学学生	親 里 清 孝
"	大島北高等学校学生	
"	若林茂樹・福田隆文・伊東和郎・泉 光治・山田善一郎・川 和仁・吉田玄一郎・	
"	畠 輝文・村田謙保・与 政広・東 政樹・原永竜博・森 弘美・中山卓江・	
"	植田多喜子・勢田清子・前田美和子・前田雪子・盛 醍江・磯 千恵・磯 愛子	
"	鹿児島実業高等学校学生	渡 恵 雄



第4图 第1地点 M线 7线地层断面图 缩尺 纵1/50 横1/100

第2章 発掘調査

1 遺跡総説

宇宙貝塚の旧地形

宇宙貝塚の調査は、従来県道西側の丘陵地に限られていたが、今回は県道東側および周辺の低地についても調査した結果、いずれも一連の砂丘遺跡であることが判明した。

遺跡地は、県道によって分断される前は、略正三角形をなす小丘陵で、北東端に標高20~15mの隆起珊瑚礁よりなる小山を背負っていた。現在は丘陵上面は平坦であるが、昭和8年における三宅宗悦の調査時には起伏が見られた。発掘によって判明した砂丘の堆積状況を見ると、基盤を被覆する古砂丘は遺跡中央部に高く、北東・北西方向に傾斜しており、南西隅にはほとんど堆積が見られない。

古砂丘上に堆積する包含層をみると、北東・北西方向には厚いが、中央部は不自然に薄く且つ地層の数も少ない。これは削平された結果と考えられ、本来中央部は現在より高く堆積していたものと考えられる。（第4図参照）

奄美は7月はじめから9月なかばまで、海岸性熱帯気団の強い支配下に入り、とくに頻繁におとずれる台風によって大きな影響を受ける。¹⁰⁰ 東岸にある宇宙貝塚の立地する丘陵は、三角形の底辺に当る東南側が、直線状に延びて比高6m~3mの断崖を形成している。夏期の強い東南風は、この断崖の壁面にあたって失速し、運搬してきた砂を丘陵上に堆積したと考えられる。この場合丘陵の西南端は細長く伸びるために殆ど砂の堆積がみられず、奥行きの深い中央部に厚く堆積したものであろう。（第2図参照）

宇宙貝塚の基盤

第1章に述べた如く、丘陵の基盤は、第1地点にあっては隆起したビーチロックであり、丘陵南東辺の崖面にはその断面が見られる。台地上面では、南西部のG-29区以南はビーチロックの露頭があらわれ、殆ど砂の堆積をみない。北東部7線では、X-7区およびJ-7区において地表下2mにビーチロックの上面が現れる。更に北東のM-1区でも地表下2mにビーチロックの存在が明らかにされているが、この地区では東南方向へ急傾斜をもって下っていることも判明した。昭和30年における九学会の調査では、県道より2m余に設けた第2トレンチの南端においては、地表下3.75mまで掘り下げているがなお基盤に達していない。したがって第1地点の北東隅では、ビーチロックは著しく深い位置にもぐっているか、或いはこれを欠くかもしれない。

以上の状況からみて、第1地点の基盤をなすビーチロックは、丘陵の南西部では地表に露呈して

いるが、北東方向へ緩傾斜をもって下り、末端では水平となるが、北東部では県道側に向かって急傾斜をもって下っているものと考えられる。

第2地点は地表面では、ほとんど県道と同じ水準まで削平されている。したがって第1地点より1~2m低い。基盤は珊瑚礁の風化によってできた茶褐色または暗褐色の藤まじりの粘土層である。西から東へ傾斜し、所々に砂岩が見られた。

砂丘の形成

基盤上には風成による砂丘の堆積がみられる。最下位には基盤を被覆する黄白色の砂層が堆積し、この層には遺物を包含せず、貝殻などもみられない。前に古砂丘と称したものである。この黄白色砂層の上には、褐色または黒褐色などの砂層が堆積し、今回の調査では5~8層、昭和30年の調査では5~11層が検出された。これらの各砂層には先史時代より現代に至るまでの遺物が包含されている。

砂丘の形成については、本砂丘の堆積の状況と、他地域の堆積状況を対比して述べることにしたい。

日本における砂丘の形成については、遠藤邦彦の研究がある。⁽¹⁾その主旨を要約すると、『日本列島における砂丘の形成と固定は、全国的に一様に行なわれている。その主なる原因は海面変動と、気候変化である。

沖積世砂丘砂層中には埋没された鷺遺留砂層がある(川田三郎、1947)。これを「クロスナ層」と呼ぶ(豊島吉則・赤木三郎、1965)。

クロスナ層の成因は、海退により砂の供給が断たれることと、それまでの温暖乾燥の気候から寒冷湿润な気候に急変したことによるとした(阪口豊、藤井昭二、藤井・藤らの気候変化に関する研究を引用する)。

クロスナ層には旧期クロスナ層(HO)と、新期クロスナ層(HY)の二期があり、クロスナ層の形成によって砂丘の固形化が行なわれ、二期のクロスナ層によって、沖積世の砂丘形成は三期に分けられる。即ち旧期クロスナ層に覆われる旧砂丘(DO)、旧期クロスナ層と新期クロスナ層との間に挟まれる新砂丘Ⅰ(DYⅠ)、新期クロスナ層の上に乗り、或は海岸沿いに大規模に発達する新砂丘Ⅱ(DYⅡ)の三期である。

以上の五期にわたる層の時代については、クロスナ層、砂丘砂層、基盤に含まれる炭のC-14年代、層中に含まれる遺物によって、二期のクロスナ層、三期の砂丘の形成時代を決定し、全国的に対比を行なった。結果は全国的にかなり一致を見た。

クロスナ層と砂丘砂層の様相と形成の時期については、次のようにある。

1) 旧砂丘(DO)

かなり風化し、褐色を帯び固く締っている。多くの地域では、沖積世最大海進期(縄文前期中葉)および、その後の海退期に、砂洲や沖積段丘上に形成された。即ち縄文時代前期中葉にはじまり、

同中期中葉に終っている。しかし下北半島・房総半島などでは、旧砂丘形成の時期は縄文早期までさかのぼる。

2) 旧期クロスナ層 (HO)

厚さ30cm以上あり、黒色ないし暗褐色である。

旧期クロスナ層は、海退期に形成された（内灘砂丘・下北・秋田等各地例・藤井昭一1967-日本の海面変動など引用）。包含する遺物・炭のC-14年代よりみて、縄文時代中期より弥生時代に至る時期である。縄文後期および弥生の土器、特に前者は殆んどの地域で発見されており、縄文後期から弥生時代にかけては、砂丘が最も安定した時期で、C-14年代3000~3500年B.P.は旧期クロスナ層形成期の平均値を示す。

3) 新砂丘I (DY I)

新鮮でルーズな灰色の砂丘である。

弥生時代末期から古墳時代にかけて形成された。東日本では大規模に発達している。列状をなす砂丘地帯では、現海岸線に沿って分布する新砂丘IIの内陸側に位置する。

4) 新期クロスナ層 (HY)

2層あるいは数層にわかれことがある。厚さは5~10cm、暗褐色である。

古墳時代から奈良時代にかけて形成の可能性が強い。比較的短い不安定な固定期である。分解の早い西日本では保存されにくい。

5) 新砂丘II (DY II)

平安時代前後以降、現在に至るまでに形成された。各地で海岸線沿いに大規模に発達し、最近600~700年間に激しい砂の移動が行なわれているが、現在は固定作業によってほとんど固定している。』

以上が遺跡論文の概要であるが、同論文の第1表によれば、奄美諸島の露界島においても、上記の五期にわたる地層の形成が行なわれたことを記載している。

宇宿貝塚の立地する砂丘では、6層ないし12層の砂層が検出され、これらの砂層中には黒色または黒褐色を呈するものが、1層以上、地点によっては4層を数え、昭和30年の調査では黒色齊層と記載したものもある。この黒色または黒褐色砂層が、全国的規模で分布する「クロスナ層」に該当するか否かについて検討の必要がある。幸い宇宿の砂丘では最下位の黄白色砂層を除いては、各層のすべてに先史時代以降の遺物が、豊富に包含されている。これらの遺物を籠として、二期のクロスナ層と三期の砂丘砂層との対比を行なうことしたい。

宇宿砂丘の遺物包含状況には見逃すことのできない大きな特徴がある。それは各型式あるいは各時代の遺物が直に厚く包含されていることである。例えば宇宿下層式土器が、P-7区では第V層より第IX層まで5つの層にまたがり、1.5mの厚さに包含されている。この現象は多少の差はあるが、各型式・各時代の遺物に通じて見られるところである（第5図参照）。したがって一つの地層についてみると、先史時代の遺物より現代の陶磁器に至るまで殆どすべての種類の遺物を包含する地層も見られる。

上述した遺物包含状況のために、出土する遺物がどの地層に属するか、いかにえれば、或る地層の形成された時代が、どの遺物の時期に該当するかを判断することは甚だ困難である。

宇宿砂丘において、遺物が垂直に厚く各層にまたがって包含されているのは、後述するように風力によって垂直に移動した結果と考えられる。したがって地層の形成時期を知るには風力の影響を受けなかつたか、或いは受けたことの少なかった部分をさがすことが必要である。この条件を満たすものとして遺構があげられる。これらの遺構などを手がかりとして地層について考察する。

旧期クロスナ層（HO）に該当する地層

旧期クロスナ層は縄文中期中葉以後弥生時代に至る時期とされる。宇宿貝塚では縄文後期中葉の市来式土器が昭和30年の調査で初めて発見され、今回の調査でも各地点で検出された。特にM-5区のⅦ層下部の石組遺構からは市来式と面繩東洞式のみがセトで発見され、O-7区とP-7区の境に、Ⅷ層上部から掘り込まれた袋状貯蔵穴内では、下部では面繩東洞式が、上部からは嘉德Ⅱ式が出土した。これらの遺構は擾乱を受けなかつた確実な層である。したがって第Ⅸ層は下部は市来式および面繩東洞式。上部は嘉德Ⅱ式の時期に該当することが明らかである。

第Ⅸ層は遺跡の北東部及び北西部の地層の厚く堆積した部分によく発達し、中央部では消滅している。色は褐色または黒褐色乃至黒色で、堆積が厚いほど色調が黒くなっている。

宇宿上層式土器は本遺跡で最も大量に出土する土器型式で弥生後期頃の時期とみられるものである。この型式の土器の確実な出土層を求めるならば、M-6区～M-7区の第Ⅷ層下部に設けられた方形の石組住居址と、I-7区の第Ⅷ層に設けられた集石の下部の掘り込みであろう。前者からは若干の宇宿下層式土器をまじえてはいるが、出土土器の大部分は宇宿土層式土器であり、その出土状況から見ても宇宿上層式の時期に属するものであることがわかる。

後者からは喜念Ⅰ式土器と宇宿上層式も出土している。以上の状況より第Ⅷ層は喜念Ⅰ式より宇宿上層式に至る時期に該当するものと見られる。

第Ⅷ層は遺物包含層の存在する地域では全てに見られ、色調は黒褐色または黒色である。この層は堆積の浅い中央部（D-7区）では第Ⅸ層に該当し、堆積の厚い昭和30年の調査地点（第2トレンチE・F区）では第Ⅸ層に当たる。

遺跡の北東部と北西部では第Ⅸ層以下に更に旧い包含層が存在し、M-5区で確認された。M-5区第Ⅸ層下部の石組を除去したところ、その下位に淡褐色の第Ⅹ層が出現し、貝殻密度を有する土器片が発見された。同様の土器はP-7区の下層、G-7区第Ⅹ層（北西方向に傾斜す）においても発見された。この土器群は市来式土器・面繩東洞式土器より更に古い型式と考えられ、縄文時代後期初頭か、或いは中期にさかのばることも考えられる。

以上にあげた第Ⅹ層・第Ⅸ層・第Ⅷ層の三つの層は、縄文時代後期（或いは中期末）より弥生時代後期に至る時期に形成されたものと考えられ、「旧期クロスナ層（HO）」の時期に略一致する。堆積の厚さは約60～100cmで、色調は黒褐色ないし黒色を主体とし、遺跡中央部では第Ⅸ層、第Ⅹ層を欠く。旧期クロスナ層に該当するものと思われるが、地層の色は自然的原色のみによるものとは考えられない。尚遺構以外の地点では時代の異なる遺物が検出されることは前述したとおりである。

新期クロスナ層（HY）に該当する地層

新期クロスナ層は古墳時代から奈良時代にかけて形成の可能性が強いといわれている。

宇宿砂丘では東北側の地点で、M-4区よりM-11区に至る区域と、N-7区・O-7区・P-7区の区域で、第Ⅳ層に厚さ10~30cmの黒褐色沙層が検出されている。この地層の時期を判定する遺物としては宇宿下層式土器・宇宿上層式土器・須恵器などが出土しているが、少量ではあるが青瓷片および陶磁器片も含み、確実な時期判断の資料とはなりにくい。第Ⅳ層には遺構も残されていないのでこの面からの判定もできないが、M-8区からM-9区にかけて、第Ⅲ層から、第Ⅴ・第Ⅵ・第Ⅶ層を切って、黄白砂層まで掘り込まれたV字溝があり、この溝の最下部から須恵器が発見された。この事実から第Ⅲ層は須恵器の時期と考えられる。須恵器は平安時代のものとみられるから、第Ⅳ層は平安時代以前の時期ということになる。およそ新期クロスナ層(HY)の時期と考えてよいものと思われる。昭和30年の調査で黒色腐植土層とされたものも第Ⅳ層であり、今回の発掘による第Ⅳ層に該当する。

遺跡の北西部にはこの地層が発見されていない。地層の堆積状況を見ると、第Ⅲ層、第Ⅳ層には不整合がみられ、強風による浸蝕によって地層の消滅が考えられる。

旧砂丘(DO)に該当する砂丘

旧砂丘は沖積世最大海進期(縄文前期中葉)より縄文時代中期中葉までの間に形成されたとされる。

宇宿砂丘においては、第Ⅳ層以下の遺物包含層によって被覆された黄白砂層がそれである。織まさじりの黄褐色粘土層または、隆起したビーチロッカの直上に堆積している。沖積世最大海進期の汀線を、現海面より4mの高度とした場合、宇宿砂丘の基底部は海面より数mの高度を有していたことになる。したがって風成層とみられ、縄文時代前期以前に堆積がはじまり、縄文時代中期中葉または後期までに形成されたものと見られる。この地層には遺物・遺構の発見はない。

新砂丘I(DY I)に該当する砂丘

新砂丘Iは弥生時代末期から古墳時代にかけて形成されたとされる。

宇宿砂丘では第Ⅴ層に当る。宇宿上層式の時期にあたるものと考えられるが、強風による浸蝕を受け、この地層が消滅した地点もみられる。また地層内の遺物の混交がみられる。

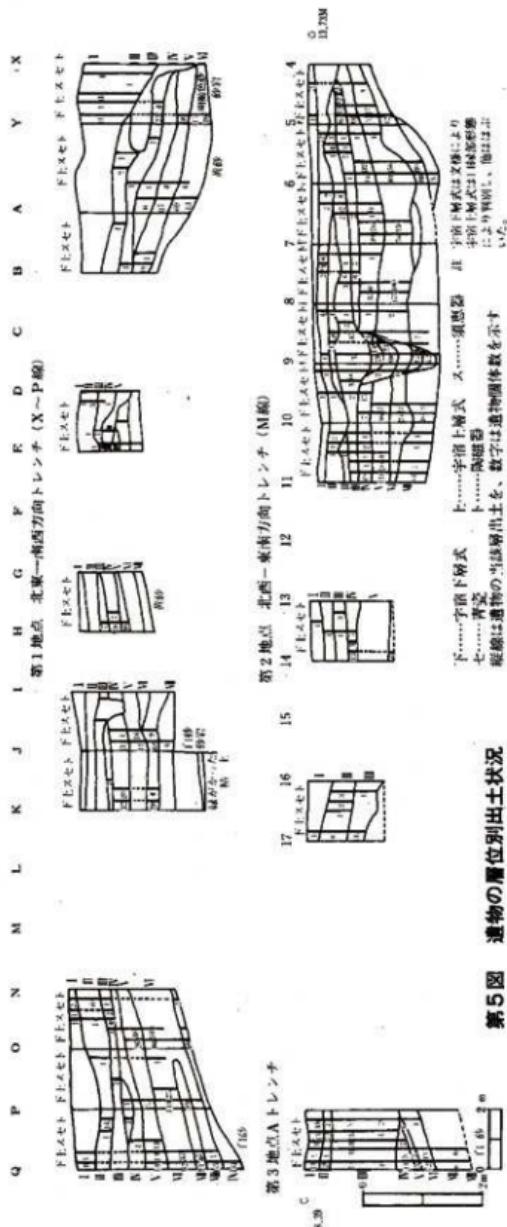
新砂丘II(DY II)に該当する砂丘

新砂丘IIは平安時代前後以降、現在に至る時期の堆積とされる。

宇宿砂丘では第Ⅰ層・第Ⅱ層・第Ⅲ層に該当する。第Ⅰ層・第Ⅱ層は固定化されて全面的に分布が見られ、安定した堆積状況を示しているが、第Ⅲ層は第Ⅳ層と共に、ところどころに断絶が見られ、この層は強風によって浸蝕され消滅した部分があることを示している。即ち第Ⅲ層第Ⅳ層と第Ⅱ層とは不整合に接しているのである。

以上によって宇宿砂丘の形成について、一応五期にわたる堆積があとづけられたのであるが、第5図に見られるように各地層間に、遺物の垂直移動が行なわれているために、各地層がそれに属する遺構などによって形成の時期が推定できても、地層によってそれに包含される遺物の時期の判定は困難である。

砂丘の地層と遺物



第5図 遺物の層位別出土状況

下線は遺物の当該層出土を、数字は遺物個体数を示す
↓……下限下限式 ス……須恵器 ト……陶器
セ……青銅器 フ……骨器

宇宿砂丘においては、層序による遺物の把握が甚だ困難で、縦年の流れはとられても、一つ一つの型式の対比が容易でない。その理由は、遺物が各層にまたがって垂直に厚く分布するためである。このような現象は砂丘遺跡においてはよく見られるところで、瀬戸内町墓地遺跡にも同様な現象が見られた。³³⁾ この現象は、遺物が所属する本来の地層から離脱して他の地層に垂直移動した結果と考えられる。現象は広範囲に見られるところから自然的条件に基づくものと考えられ、風力がその原因で、deflation によるものと思われる。deflation は塵埃や砂しか移動できず、粗大な岩塊や礫はそのまま残る。土器の場合も同様である。しかしの場合遺物は沈下するが浮上することは殆どない。宇宿砂丘では本来の層より上位に移動したと思われるものもある。この場合は別の原因によるもので、風力によることは同様であるが、deflation より遙に速い風速によって遺物が運搬され再堆積したものと考えられる。

deflationによる遺物の沈下現象について実験を行なったので、結果を記録し、地層と遺物の関連についての考察

の手がかりとしたい。

実験は鹿児島県加世田市新川浜(吹上砂丘に属す)において、昭和15年1月20日より開始し、現在継続中であるが、とりあえず54年1月21日までの結果を記載する。

実験地点は万籾川河口左岸より南方100m、汀線より35mの、松林前面の草地で、裸地を選んで行なった。土器100片を2ブロックに分け、汀線と平行に50cm間隔に10箇所を砂丘表面に置き、1.25mの距離で内陸へ向かって5列に配置した。2つのブロックの距離は14.35mである。

現地は東支那海に面し冬の季節風が卓越する所で、今冬はとくに雨の多い暖冬であった。

砂丘表面に置かれた100箇の土器片が、季節風によってdeflation現象を受け如何に変化するかを知るために、昭和15年1月21日に第1回目、同月27日に第2回目、54年1月21日に第3回目の観察を行なった。

第1回目の観察の結果は、砂丘表面では標高に変化は見られなかつたが、土器片9箇が1cmの深さに埋没し、2箇が欠失、5箇が半ば砂に被われ、2箇が反転していた。したがつて89箇は砂丘表面に残存していたのである。

第2回目の観察の結果は、砂丘表面は前回に比べ標高が約5~10cm低下していたが、土器片は埋没したものが11箇に増え、深さも最高-3cmに達した。半ば埋没7箇、欠失は2箇で変化なく、反転は3箇で1箇の増加を見た。砂丘表面に残存するもの87箇である。

第3回目の観察の結果は、砂丘表面は第1ブロックでは標高が最初の状態に復した所と-6cmの所が見られ、第2ブロックでは-2.8~-+4cm(最初の標高と比較)となっている。土器片は埋没54箇54%、欠失6箇、半埋没7箇、反転3箇(前回に同じ)、残り40箇となり、一般に深く埋没し最高-11cmに達した。この他に4.0~5.0cm移動したものが3箇あった。

地表の地形は1回目の観察では変化が見られず、2回目の観察ではやや低下し、3回目には低下と堆積が見られ全体的には最初の地形に復した状態となつた。

土器片の移動は水平移動3%と欠失6%以外は元位置に留るか、垂直に下降し埋没数は54%に達している。垂直移動の分布を1cm単位で示すと、0cm(地表残留):40箇40%, -1cm: 12箇12%, -2cm: 10箇10%, -3cm: 9箇9%, -4cm: 3箇3%, -5cm: 6箇6%, -6cm: 5箇5%, -7cm: 2箇2%, -8cm: 4箇4%, -9cm: 1箇1%, -10cm: 1箇1%, -11cm: 1箇1%となっており、元位置に残留するものが最も多く40%を示し、-4cmと-7cmに急な減少が見られるが、全体的には沈下が深くなる程減少し、最下位では1%となり、実験開始後63日を経て垂直移動幅は11cmに達した。

この他に注意される現象としては、現在の気候条件では、砂丘は地表下3~4cm以下では湿気を充分にふくんでいること、実験地城内において局部的に植物(葉)が埋没して層を形成しつつあることなどが見られた。

以上の実験結果によつて、現在の気候で、吹上砂丘における冬の季節風程度の風によって、砂丘裸地においては、deflationによって土器片が沈下埋没することが明らかとなった。

実験の結果deflationによって沈下埋没した土器片は、元の地層(本来その土器が位置した地層)に最も多く残存し、下降するにしたがつて数量が減少する傾向のあることが判明したので、同様の

条件によって形成されたと思われる砂丘遺跡に当てはめれば、土器本来の所属する地層を把握することができる。

更に遺跡における土器を型式分類し、各型式毎に層位の頻度を明らかにすれば、各型式の所属地層を把握することができ、地層の比較によって型式編年が可能となる。

但し土器の沈降状態には地域的なたよりが見られるのでなるべく広い地域を単位として実施することが必要であり、土器の採取は地層にしたがって行なうことが必要で、地層を無視した整理では好結果は得られない。また型式分類が正確でなければ平均化された結果を得ることになる。

宇宿砂丘は deflation 以外の影響も受けているために、上記の方法をそのまま適用することには多少問題があるが、第5図の資料によって処理した結果、陶磁器の元の地層は第Ⅱ層（DYⅡ該当）、須恵器・青瓷の元の地層は第Ⅲ層と第Ⅳ層の中間層（DYⅢ該当）、宇宿上層式の元の地層は第Ⅳ層（HO該当）、宇宿下層式の元の地層は第Ⅵ層（HO該当）であることが判明した。宇宿上層式と宇宿下層式は同層位となっているが、宇宿下層式を型式別に処理すれば更に精密な結果が得られるものと考えられる。

宇宿砂丘を地層断面によって觀察すると、2回にわたって激しい風蝕運搬作用を受けたものと考えられる。第1回目は第Ⅳ層（新期クロスナ層該当）が堆積した直後である。遺跡の西側では第Ⅳ層（新期クロスナ層該当）は完全に消滅し、D-7区では第Ⅴ層（新砂丘Ⅰ該当）全部と第Ⅵ層（旧期クロスナ層該当）西側を欠き、A-7区、Y-7区では第Ⅶ層を消失している。

上にあげた消滅した地層の後には、第Ⅴ層、第Ⅵ層あるいは第Ⅶ層の上に、直接に第Ⅲ層または、第Ⅱ層と第Ⅳ層に挟まれた中間層が堆積している。したがってこの妙の移動が行なわれたのは、須恵器・青瓷の時期にあたる中間層より以前である。この時期は新期クロスナ層が堆積した後で、寒冷湿润な気候^⑩が終った頃にあたっている。

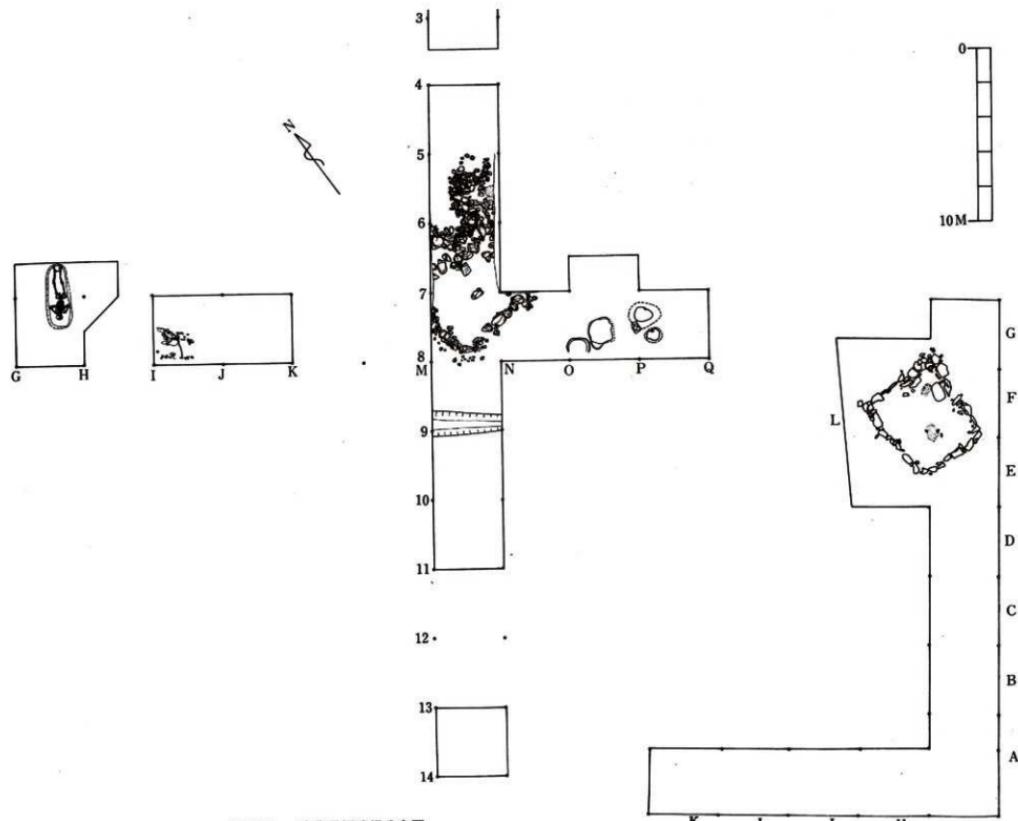
第2回目は、厳密には前後2回にわたって風蝕を受けている。はじめは第Ⅲ層と第Ⅳ層に挟まれた中間層が堆積した後で、中間層は風蝕運搬によって切れぎれになって、部分的に残存している。この時の影響は遺跡の全域に残された。

次は第Ⅲ層が堆積した後である。前ほどではないが全城で所々に第Ⅲ層が欠失した部分が見られる。

2回にわたって風蝕作用は、地層と共に包含する遺物も運搬し去ったであろうが、再堆積も行なわて、下層の遺物が浮上する現象も起ったと思われる。

長期にわたって比較的安定していた宇宿砂丘が、新砂丘Ⅱの堆積がはじまった時代になって部分的な砂丘の移動が起った原因としては、寒冷湿润な気候の終息が考えられるが、遺跡が太平洋岸に立地し、台風の影響を受け易い条件にあったこともあげられるであろう。とくに風台風と呼ばれる殆ど降雨を伴わない台風の襲来とか、乾燥した気象の継続とか、被覆する植物の欠如というような条件が重なって起った現象であろう。

西海岸に立地するサウチ遺跡においては、遺物の垂直移動は殆ど見られないが、東海岸の嘉瀬遺跡や宇宿貝塚では顕著であることは、これらの地域が、特に夏期の海洋性熱帯気団の影響を強く受けることを示すものであろう。（向口）



第6図 宇宿貝塚遺構分布図

註

1. 三位秀夫・木越邦彦，“奄美群島 喜界島の旧汀線堆積物と海岸砂丘との 14°C 年代”，“日本の第四紀層の $14^{\circ}\text{C} \times 10$ ” 1966年1月
 2. 河口貞徳・出口浩・本田道輝，“サウチ遺跡”“鹿児島考古12号” 1978年3月
 3. サウチ砂丘の第7層は遺物包含層（弥生後期該当）で標高5.7mに位置し、同包含層出土の貝による $\text{C}-14$ 年代は、1920±80年B.P.である。
 4. 永井昌文・三島格，“奄美大島土浜ヤーヤ洞窟遺跡調査概報”“考古学雑誌 50卷2号” 昭和39年11月
 5. 三宅宗悦“南島の先史時代”“人類学先史学講座16”昭和16年，雄山閣
 6. 全 (5)
 7. 全 (5)
 8. 河口貞徳“南島先史時代”“南方産業科学研究所報告 第一巻第二号”昭和31年2月
 9. 國分直一・河口貞徳・曾野寿彦・野口義磨，“奄美大島笠利村宇宿貝塚発掘報告”“奄美自然と文化”九学会連合奄美大島共同調査委員会編 1959年
 10. 矢沢大二“奄美諸島の概観—自然概要”“奄美 自然と文化”九学会連合奄美大島共同調査委員会編 1959年
 11. 遠藤邦彦“日本における沖積世の砂丘形成について”“地理学会シンポジウム「海岸砂丘」地理学評論 42卷3号 1969年
 12. 昭和30年の調査によって発見された石組住居址は第9層に属し時期は宇宿上層式に当たる。今回発見された石組住居址も宇宿上層式の時期であるが、地層は第10層に属するところから両地層が同一時期であることが推定される。
 13. 河口貞徳“奄美における土器文化の編年について”“鹿児島考古 第9号”1974
河口貞徳他“嘉德遺跡”“鹿児島考古 第10号”1974
 14. 板口豊(1961)：北日本の完新世の気候変化，地理評，34，259～268
藤井昭二(1965)：黒部川崩壊地の形成と富山湾周辺の埋没林について，地球科学，78，11～20
- Fujii, Fuji : Postglacial Sea Level in the Japanese Islands, Journal Geoscience, Osaka City Univ. 10, 43~51.

2 各地点の調査

(1) 第1地点の調査

① M線の調査

M線には、当初M-1区からM-28区まで4m間隔に2m四方の区角を10区設定し掘り下げを行なった。その結果M-4区、M-7区、M-10区において良好な包含層を確認したので、8月12日から上記の3区を連結するためM-5、M-6、M-8、M-9も掘り下げを開始した。

層位はピーチロックを基盤として、その上に9層を数えたが、M-13区からM-28区にかけては包含層が消滅し、M-28区では地表下20cmでピーチロックに達した。以下層位を細述する。

第1層 白色砂層、20~30cmで地表面を形成する。やや白っぽくザラザラした感触を呈する。部分的に固結し、ブロック状をなして混入している。表面にはヘリグラスをはじめ種々の雑草が繁茂していた。

第2層 灰褐色砂層 やや黒味を帯びた色調を呈し、サラサラした手触りである。20~30cmで広がっているが、M-1区、M-2区とM-19区以南においては見られない。またM-5区でうすく、M-7区からM-10区にかけては下位に中間層を含み、起伏に激しい。なおM-1区、M-2区、M-19区においては表土下無遺物層の9層黄白砂層に達し包含層は見られない。さらにM-22区からM-28区にかけては、表土下直ちにピーチロックに至る。

第3層 明褐色砂層 やや茶褐色を呈する部分もある。15cmから30cmの厚さで堆積し、下位は安定しているが、上部は起伏が激しい。北西方向ではM-5区で薄くなり消滅し、南西方向M-16区では既に見られない。

第4層 黒褐色砂層 約20cmの厚さで、安定した層をなしている。6層の黒色層と共に明確に残存している。3層と同じくM-4区で薄くなり消滅し、M-16区では見られない。

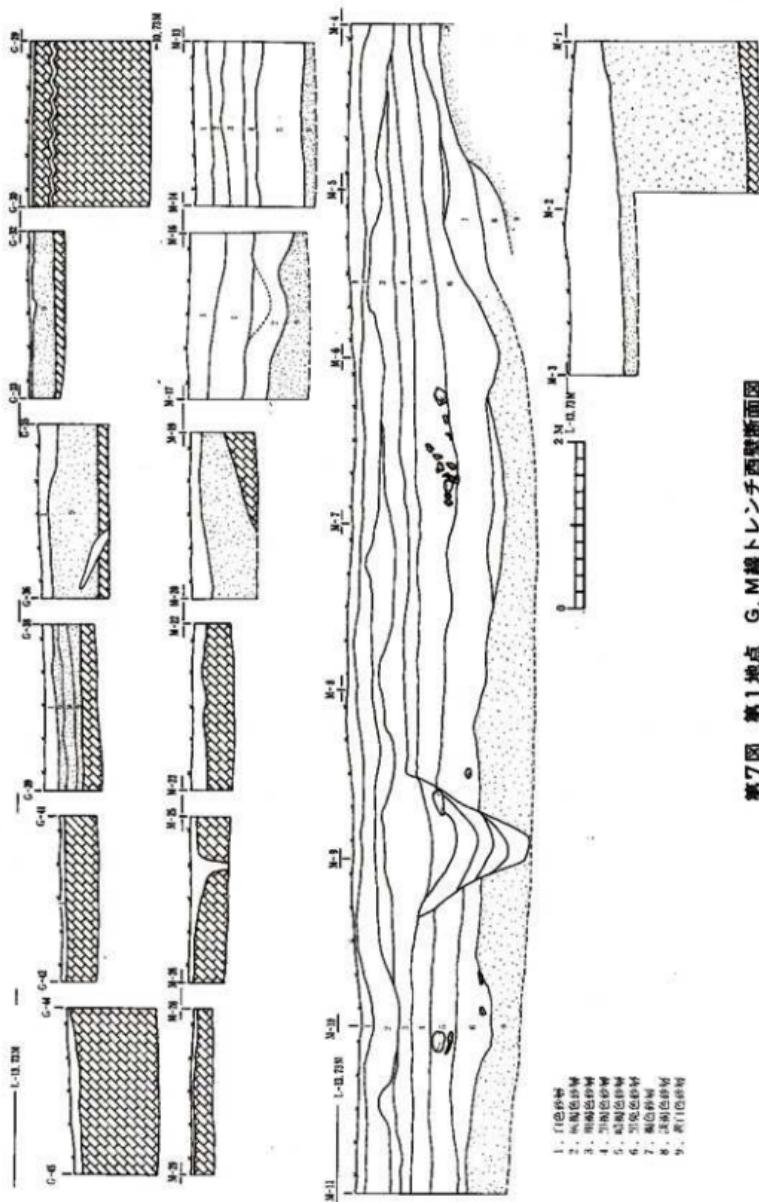
第5層 暗褐色砂層 やや茶色っぽい色調を呈している。25cm~50cmでM-4区からM-13区にみられ、M-5区からM-7区にかけて最も厚く堆積している。

第6層 黒色砂層 4層と共に明確な色調で上下と区別できる。M-6区とM-7区で約50cmと厚く堆積し、M-4区へかけて薄くなって上り、M-10区で厚さ10cmと薄くなり、M-13区では見られない。砂質土であるが、粒子が細かく、また水分を含んでおり砂土にしては、粘質な感触である。下位の7層との境は、凹凸が激しい。下位においては茶褐色を呈する所もみられる。

第7層 褐色砂層 粗粒でやや黄褐色をなす部分がある。M-4区からM-6区にかけて20~30cmの厚さで見られ、M-6区方向へ傾斜をなして続くが、9層との境目は明瞭でない。M-6区から7区にかけて、レンズ状に部分的に7層が見られる。

第8層 淡褐色砂層 M-5区からM-6区へかけて一部残存しており、M線には他に見られない。東南方向へ厚く堆積している。

第9層 黄白砂層 細砂で混合物がなく、純粋である。サラサラとした手触りで、歎らかく、白



第7図 第1地点 G.M線トレンチ西壁断面図

色を呈する部分も見られる。M-1区からM-19区にわたっている。M-1区では厚さ1.6mで、ビーチロックに達する。M-19区では厚さ3.0mでビーチロックと接するが、南西方向へかけては、急に深くなっている。M-7区からM-10区にかけては、7層が明確に残存していない。

基盤層 ビーチロック、M-19区からM-28区にかけて地表下4.0mから2.0mの深さに上面を検出した。M-22区からM-28区では、当台地を近年削平したため露出していたものと思われる。ビーチロック下の層位を確かめるため、板状をなす岩をつるはしで一枚ずつ剥ぎ下げたが、時間と費す労力のアンバランスで、下層の確認は不可能であった。ビーチロックの傾斜は北東方向へ緩傾斜し、東方向へ急な傾斜をなしている。M-1区では最上部が地表下2mにあり、東隅へ急傾斜して、その深部では2.8mに達した。M-2区からM-17区にかけては、7層および9層までしか剥り下がることが出来ず基盤層の確認はできなかった。

次に層ごとに遺物の出土の状況や、遺構との関係などについて述べることにする。

1層は、現代の陶磁器片を含み、小量の土器片を出土した。M-6区、M-8区に合わせて2.0片ほどの上層式と思われる土器片がみられたほかは、M-4区、M-8区、M-9区、M-10区、M-13区、M-25区、M-28区に数点の須恵器、青瓷、白瓷、染付、陶磁器片などがみられた。青瓷はM-16区から南西のトレンチに比較的多いことが注目された。

またM-16区には滑石製の石鏡の破片や夜光貝製の匙を出土した。なおこの区においては深さ5.0mから8.0mにわたって、土層の擾乱状況がみられた。

M-19区の南東隅において、地表下1.5mから3.0mで黄白砂層内に、直径5.0cmのピットを設け、獸骨片をまとめてあったが、後日の鑑定で新しい牛骨と判定された。

2層は、M-1区にわずかに残存し、M-4区からM-16区にかけて安定して、M-19区から南西には残存していない。1層に比べて遺物の出土量が多い。M-6区からM-8区にかけて須恵器片や、青瓷、染付の破片が多くみられる。また雑器の出土もみられる。M-16区においては下層式の破片も少數出土した。全体にわたって青瓷等の占める比率が大きい。

M-4区においてはマガキ等の貝殻を多く出土した。M-16区においては、下層式をはじめ青瓷、染付など混交して出土し、層の擾乱も激しい。

3層は、M-5区からM-13区にかけてみられる。遺物の出土は2層に比べて量、質ともにあまり変化は認められない。M-5区は数片の青瓷片と近世陶磁器片、無文土器片を少量含み、貝殻の出土もみられた。M-6区においても同様である。M-7区～M-9区においては、他に比較して須恵器の出土量が多く、M-9区においては染付も少量出土している。全体に陶磁器片も多い。他の土器片も見られるが、少量で小さい破片が多い。なおM-10区、M-13区にはガラス片が出て層の乱れを示していた。3層は須恵器の占める割合が多い。なおM-6区で外耳土器が2片出土した。

4層は、M-13区にわずかに残存するほかはM線においては、M-4区からM-10区に見られるのみである。土器の量は1～3層までに比べて急に増加した。M-4区では上層式口縁が12片のほか上層式と思われる無文土器片が185片、須恵器、青瓷片を少量出土した。ほかに小骨片とスイジガイなどの貝殻類が多量に出土した。土器片はM-5区～M-7区にかけて減少するが、

M-8区、M-9区にかけて量が多くみられた。特にM-8区を中心にして須恵器の破片が多くみられる。無文の土器片も多い。青瓷、白瓷、陶磁器片も混入している。

5層は、4層と6層の2つの黒色砂層にはさまれた安定した層で、M-4区方向へかけて高く傾斜をなしている。土器の出土量は大巾に増加し、獸魚骨、貝殻等も多い。土器片はM-7区が最も多く806片を数える。以下6区、5区と続き4区で激減する。南西方向は10区に425片となる。以下区ごとに詳述する。

M-4区、無文土器が多いが65片の出土である。龜甲片など獸骨片を検出した。

M-5区、500片以上の出土をみたが、明確な下層式破片は14片のみで、他はすべて上層式と思われる。20cm～40cmの範囲に、断面でみるとやや落ちこんで小貝殻の集中的な出土がみられた。上層式のまとまった破片や礫も出土し始めた。(第8図参照)

M-6区、683片の土器片を出土したが、上層式が最も多い。須恵器と白瓷の破片も1片ずつ混入している。拳大の小礫が下位になるにしたがい多く、また礫の大きさも大きくなる傾向がある。破碎されたような礫が多く、中に混って敲石や磨石等の石器がみられた。土器片も礫間にまざって出土する。

M-7区、806片の土器を出土した。ほとんどが上層式片と思われるが、明確な下層式も31片みられた。上層式は丸底が多い。縄文晩期の土器や弥生式土器、須恵器、陶器などを小量伴出した。6区と同じく小礫が多量に見られた。当初全面に広がっていたが、下位になるにしたがい北東半に集中し、西南半分には少なくなってきた。

M-8区、300片と減少している。やはり須恵器や陶器類を数点出土する。北西壁近く、地表から1mの深さで、中に魚骨製の垂飾品の入った夜光貝が出土した。5層の最下にあたる。また中央部附近に赤褐色に焼けた土の分布と数個の礫塊を検出した。地表下9.5cmで5層中位にあたる。3.5×3.0cm、4.0×3.5cm、2.0×1.0cmの3つのブロックにわかれ深さは5～10cmである。礫塊の頂部は5層であるが、主体部は6層に位置している。

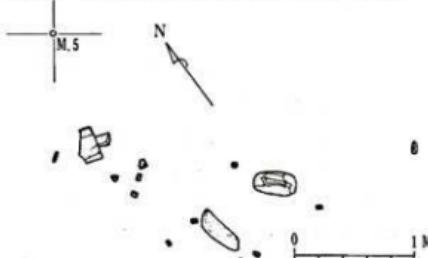
M-9区、174片の出土。明確な下層式が36片みられる。

M-10区、425片の土器出土、ここでは下層式も多く111片を数える。須恵器が4点出土した。

全体を通してみると、次のようなことがいえよう。
 ① 4層に比較して土器の量が急に増加する。
 上層式土器の破片が圧倒的に多くまた少片である。
 ② 下層式土器の破片も見られる。M-10区
 に多いことが特徴的である。
 ③ 獣魚骨片
 や貝殻の量が次第に多くみられる。
 ④ 矽
 の出土が多くなり、下位になるほど多い。
 特に6区と7区に集中的にみられる。

⑤ 縄文晩期や弥生式土器などの特徴ある
 破片が混じっていると共に、須恵器、青瓷、
 陶器などの破片が末だ出土している。

6層は、M-4区からM-10区に黒色



第8図 M-5区 土器片、礫出土状況
第5層 (標高12.70m面)

層となって明確に見られた。M-6区からM-8区にかけて厚く堆積し、また深い。両側へ薄く、浅くなっている。M-1区とM-13区においては残存していない。

この層が、本遺跡における主な包含層であり、最も多くの遺物を出土した。土器、石器、獸骨等、他の層に比較して、その出土量は最も多い。それらに伴う、礫群の発見も多くみられ、石組による住居址1を検出した。この住居址の説明は別項で述べる。以下区ごとに説明したい。

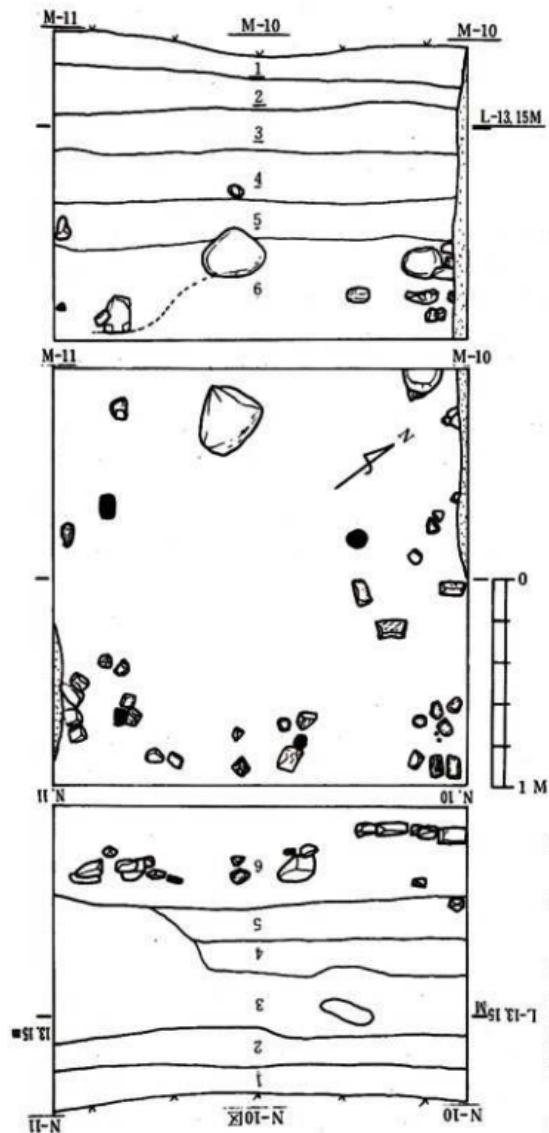
M-4区、土器の出土量104片である。明確な下層式は5片しかない。亀甲片を含めて、獸骨や貝殻の出土が目立つ。南壁に完形の小形手捏土器（第70図62）を発見したが、土器包含層中では下位にあたる。他の貝輪もみられた。なお層の下面においては、西側に貝殻や礫を有するレベルにおいて、東側では7層が見られ、層が東方および北東方向へ傾斜していることが予想された。

M-5区、土器の量は大巾に増加し、1295片を数える。無文土器が1015片、明確な下層式84片、上層式口縁56片と増し、市来式土器片も若干出土した。以下出土状況について述べる。北側に地表下90cmで、わりにまとまった土器片と、周辺に礫塊が検出された。土器片は6層上面にへばりつき、礫は6層中に入りこんでいるが頭部は5層内にあり、全体に立石状である。さらに3日後、区の中央部からやや北東に6個の礫塊がほぼ1mの範囲内に見られた。20~30cmの巾を持ち、円錐1個以外はすべて角錐で、うち3個は焼けた痕跡を觀察した。礫の表面は6層上面に出ており、標高13.64m~13.65mに位置している。

礫を除きさらには掘り下げる、地表下1.10m~1.20mにかけて、北東半分を中心に礫片、貝殻片、獸骨片が散乱していた。貝は夜光貝やサラサバティが注目され、骨片も大きいものや小片が散らばっており、また木炭片も見られた。獸骨片が多い。土器片も大きな破片が比較的まとまっていた。東北隅には亀甲片がまとまって出土したほか、獸骨片、巻貝片などが見られた。メンコ玉状の骨製品が地表下1.30mの6層下部から出土している（第95図11）磨石、鐵石等の出土も注目された。

M-6区、M-7区は礫群の集積部分である。5層下位よりほぼ全域に見られていたが、掘り下げるに従い、M-6区の南西からM-7区の北東半分に範囲が縮小されてきた。8月17日にはM-7区北東部からM-6区南西部に至る範囲にしばられ、中に点々と大礫の上面が見え始めた。大きい礫を残し小礫だけを除いた結果、8月19日には弧を描く礫の配置が確認され、住居址と判断された。それ以後の住居址内部の礫および住居址を形成する配石の数は全て当り分類した。遺構の項で記述したい。

この両区においては礫の量が膨大で、あたかも礫層をなしているかのようであった。5層から出はじめ、6層中に最も多量にみられた。大きさは小児の頭大のものが少量であるとはすべて拳大以下の円錐・角錐である。土器片はそれらの間に混入して出土し、小片が多く、まとまった土器は少ない。土器の量は6区で3275片、7区で3994片を数え両区で7000片以上に達している。明確に下層式と判定できるものは、6区に78片、7区に177片である。また上層式の口縁部は6区に183片、7区に218片で他はほとんど無文土器である。無文土器片の大半は上層式と思われる。なお6区には鶴文晚期土器片、7区には市来式土器片、黒色研磨土器片、三重永田式土器片などがみられた。他区に比べ注目されること、この層に須恵器や青瓷および陶磁器類をみないことである。砂丘における土器の沈下現象から考えると、礫群の集中によって、沈下が妨げられたといえる。



第9図 M-10区 6層 磨出土状況・平面図見通し断面図

なお縄群の中には駿石、磨石、石棒(第88図2)、石斧等の石器も混入していた。

M-8区からM-10区にかけては、縄群の集中や散布が点々と見られ、土器も大きい破片やまとまとったものが出土した。駿魚骨片や、石器も混って検出された。M-8区からM-9区にかけて北西-南東に流れるV字伏の溝を検出したが、別項で述べたい。以下区ごとに説明をしたい。

M-8区 土器の出土量は878片で7区に比べて、ひじょうに少量である。うち下層式を68片含んでいる。須恵器3片があるが溝中である。縄が北から南へ散布し、中央部に木炭の集中をみた。明確な遺構としてはとらえられなかった。南隅には、6層下位で小児の頭大の縄の集中がみられた。

東隅6層下位でも、地表下1.2mで縄および一括土器の集中があった。

石器はノミ形石斧をはじめ骨石等がみられた。

M-9区、土器量519片、明確な下層式が74片あり、全体に対して下層式のしめる割合が多い。市来式土器を少量出土している。地表下1.2mで6層下位にあたり、西隅から東隅に縄の集まっている部分があった。西隅は50

cmの範囲に焼けている跡および破碎された跡が12個みられ、礫底は9層上面に接していた。N-10区付近も、6層下に小頭大の角獣が10個集中しており、礫底は9層に接する。これらの礫は焼けた痕跡がみられ、また周辺に骨片のあることから、この面が生活面と判断される。なお東側の礫の下から夜光貝と獸骨片が出土した。東隅地表下-1mでは1mの範囲に一括土器が散布していた。N-8区付近では礫間にまとまつた土器がみられた。

M-10区では土器の量が162片と少なくなり下層式が45片と占める割合が多いことが注目される。上層式の口縁部はみられない。なお市来式土器の破片が数点みられた。

北西隅に30cm~40cmの円礫をはじめ多くの礫が出土した。(第9図)いずれも6層内に位置し、底面は9層に接している。ほとんど破碎礫が多いようである。蔽石や磨石をはじめ赤褐色に焼けた痕跡のある礫、獸骨、貝殻等みられた。いずれもまとまりはみられない。

以上6層について述べてきたが、全体を通してまとめると次のようになる。

① M-7区からM-6区方向へ広がる石組の住居址をはさんで両側には、10数個内外の小兒の頭大の礫をひとつの単位とする集石が、ところどころに見られ、また散逸して広がっている。

② これらは6層を主とし、底面は6層下おびて9層上面に当る。4~5区では7層上面となる。

③ 級は破碎されたものが多く、またまとまって、あるいは点々と貝殻、獸骨片、木炭片、粒、それに土器片がみられる。

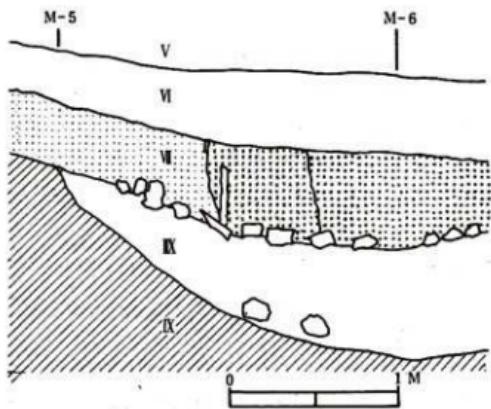
④ 土器片は6・7区に圧倒的に集中しており、その主体は上層式と考えられる。集中度は礫群も同様であるので、住居址が不用となったあと、住居址内に、またその上に礫片や、土器片を遺棄したものと推定できる。

⑤ 下層式は7区に多くの出土を見るが、全体に占める割合からいえば9・10区に多い。上層式における集中度の違いと明瞭に区別できる。

7層は、M-4区からM-5区へかけて低く傾斜しながら20~30cmの厚さでみられた。M-5区において、まとまつた集石群を含む層である。集石については別項で総述する。M-6区からM-7区へかけて部分的にみられるほかには、層としてなく、M-5区とM-6区の一部にある8層を除いて、9層の黄白砂層となっている。7層は集石群の中に、一個体分の復元可能な東隅式(第30図)と市来式(第33図1)を出土している。またシャコ貝等の大きい貝殻や獸骨片など出土量が多い。土器は下層式が多くなり、M-5区では下層式38片、貝殻条痕、癬痕などの網部片110片、上層式口縁部13片、無文184片、市来式および市来系土器7片、繩文晚期土器3片、となっている。男根状石製加工器が1点出土している。(出口)

M-5区8層

M-5区7層の最下部に構築された石組造構の下は、無遺物層と考えられ、黄白色の砂層で、いわゆる旧砂丘と考えられていた。M-5区7層の石組造構は、造構のうちの東北側一部を調査しただけで、トレンチの西壁内に残りの部分が存在していた。この部分の様相を少しでも明らかにするために、石組を解き、西壁面を第8層まで削る作業を行なった。その結果、第8層も淡褐色の砂層で、貝殻条痕を有する土器片、平底の一部、口唇部に刺突文を有する口縁破片とともに、円礫も出土し、本遺跡で最も古い時期の遺物包含層であることが判明した。この層に該当する古い層は、G-6区、



第10図 M-5区 東南壁面図 (VI~X層)

まじり黒色砂層の北側に接して、幅5.5cmの灰褐色層が、斜めに入り込んでおり、この部分は貝などを多く含み貯藏穴の様相を示していた。上面は第6層に連しているが、第6層の面で切れているのであって、落ち込みではない。O-7区、P-7区に発見された貯藏穴も同様の状況であった。

尚この断面は実測直前に崩壊して、写真並びに実測の作成ができなかった。図はスケッチによるものである。(第10図) (M-5区8層の項 河口)

9層は、M-4区・5区および6区・7区の一部を除いてほぼ全域にわたって6層の下にみられた。本来無遺物層と思われるが、上部に若干遺物が混入していた。M-9区では58片、うち明確な下層式10片を占める。M-10区では50片うち下層式10片を占め、他市来式土器片と青瓷や染付の破片も各1点ずつ出土した。なお貝殻の出土も多くみられた。M-13区では下層式のみ12片、M-16区では下層式など10点とわりに単一の出土状況を示している。M-16区は、石斧や磨石のほか、夜光貝のふたをはじめ貝殻の出土がみられた。また混乱状況も激しく青瓷の底部もみられる。なおM-8区においては、下層式の12片、須恵器の6片を含め51片の土器の出土を見たが、溝底がこの層まで掘りこまれているための落込んだものと考えられる。(出口)

② G線の調査

台地の西南部にG-29区から44区まで4m間隔に6つのトレーニングを設定し掘り下げた。G-29区、G-41区、G-44区は地表面から、あるいは10~20cmで基盤のビーチロック層が露出する。G-32区、G-35区、G-38区では地表下10~20cmで第9層に達し、さらにそれぞれ2.5cm、5.0cm、3.0cmで基盤層に達する。なおG-29区ではビーチロックの下を確認するため3m掘り下がったが、層の変化を認めることはできなかった。包含層は元来なかったか、あるいは削平によって消滅したと思われる。遺物は近世の陶磁器片を少量採集したのみであった。

H-6区においても発見された。

M-5区7層の石組遺構は、西壁面においては、中心部へ緩かな傾斜をもって下り、中央部は壅み、その径は1mに近い。裏面はもちろん、その上に乗った砂層中にも多くの木炭粉を含み、砂層は黒色を呈していた。

産地の上部の、木炭

(出口)

③ 7線の調査

第1地点の画面に従い、各調査区に4mの間隔をおいてA・D・G・J・P-7区を調査区域とした。さらにA線北西に一区画調査区域を延長設定することが可能であったため、基準縦線をA線より5m延長してX線、3m延長してY線とし、X-7区・Y-7区を設定した。そのためY-7区は2m×3mの長方形となった。延長区では、X-7区全域・A-7区との地層関係を知るためY-7区南半分を調査した。この延長区は、第1地点丘陵北端部にあたるため、丘陵末端部での地層堆積状況を知る上に好都合である。調査の状況に従いG-6区南半分、H-6区西隅 $\frac{1}{4}$ 、H-7区の北隅 $\frac{1}{8}$ 、I-7区、O-7区も追加調査することとなった。

層位(第11図)

M-7区の層位を基準として述べることにする。

第1層 きめの荒い白砂層である。調査区全域にみられるが、堆積には差違が認められ7線中央部(G・I・J・N-7区)では堆積薄く、G-7区北壁付近では完全に消失している。反面丘陵末端部へ近づく程に堆積厚く、O・P区では40~50cm、X-7区西壁付近では130cmの厚さが認められる。遺物は土器片や陶器片等が少量出土している。

第2層 灰褐色砂層である。ほぼ調査区全域に認められ平坦であるが、X・Y・A-7区では、A-7区からX-7区へかけてゆるやかな傾斜で下降し、X-7区では消失てしまっている。陶器・雑器・染付・上層式・下層式土器等が少量出土する。

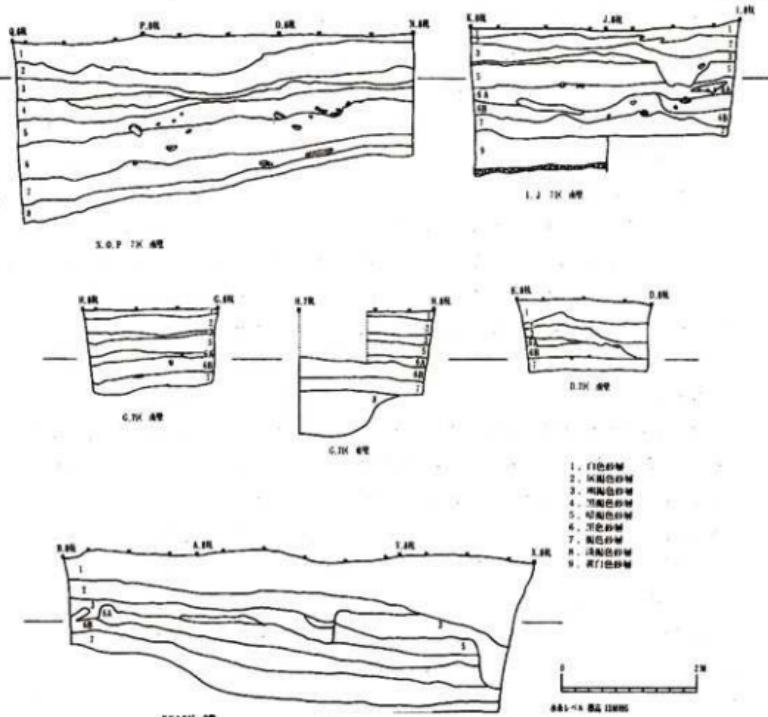
中間層 M線では跡切れ跡切れにあるため中間層という名称になっているが、7線ではX-7区・Y-7区の一帯に検出されないだけで、他の調査区域にはすべて認められる。概略平坦で起伏はげしくない。遺物の出土状況は第1層・第2層と同様で、各時期のものが少量ずつ出土するという状況を示す。

第3層 褐色砂層である。ブロック状に検出される。X-7区及びY-7区には厚く堆積し30cmを測るが、特にX-7区西壁付近では深く落込み70cm程の厚さがあり、直接第7層に接している。Y-7区途中で一端消失し、A-7区の一部、J-7区の一部及びI-7区、O-7区・P-7区の一部にブロック状に薄く見られる。遺物はほとんど出土しない。

第4層 N・O・P-7区に見られるだけで、他の調査区には認められない。黒褐色砂層である。N-7区よりP-7区の方向へ厚くなる傾向にある。遺物は少量土器片や須恵器片が見られるだけである。P-7区において石斧片が出土している。

第5層 暗褐色砂層である。G線より東南部、即ちG・I・J・N・O・P-7区に連続して認められる。I・J区が特に厚く30cmを測る。G・I・J区では平坦であるが、N-7区からP-7区へゆるやかに下降する。本層より土器出土量は急激に増加する。上層式と下層式が混じっているが、数量的には下層式の方が多い。G-I-7区は特にその傾向が強い。J-7区ではサンゴ礁貝加工品が出土し、G-6・7区では玉類着装の埋葬人骨が発見された。Y-7区の一部・X-7区にも一部分この層の堆積が認められた。

第6層 調査区全域に認められる。黒色砂層である。丘陵中央部D・G・I・J-7区では平坦で、



第11図 7線南西壁断面図

I・J-7区では50cmをはかるが、G・D-7区ではしだいに薄くなり、D-7区では25cm程度である。X・Y・A-7区では40~60cmと再び厚くなり、X-7区方向へ深く傾斜する。N・O・P-7区では50cm程度でP-7区方向へと深く傾斜する。遺物はこの層に最も集中して出土し、各調査区とも多量の遺物が検出された。I・J-7区では礫群を伴う細り込み、N-7区ではM線に検出された住居址の続きが見られ、遺物・遺構共に最も多い層である。

第7層 褐色砂層で調査区全域に認められる。X・Y・A-7区及びN・O・P-7区に厚く、D・G・I・J-7区は比較的薄い。傾斜状態も第6層と同様である。X・Y・A・D-7区では無遺物層の状況を示し遺物は見られないが、G・I・J・N・O・P-7区では下層式を主体に上層式がきわめて少量混じる状態で遺物の出土が見られる。G-7区南壁面における大形磨製石斧が2本密着して出土したこと、O・P-7区でこの第7層に掘り込まれた袋状ピット群が出現したこと等が注目される。

第8層 淡褐色砂層である。N・O・P-7区に第6・7層と同様傾斜で認められ、又G-7区で北東側へ落込んだような状況で検出された。他調査区には認められない。下層式よりもやや時期的に古いと思われる土器が少量出土している。

第9層 黄白色層で無遺物層である。調査区全域に認められる。D・G・J・I-7区では平坦であるが、A・X・Y-7区では北西方向へ、N・O・P-7区では南東方向へ深く傾斜している。第5層以下の堆積は、この第9層の堆積状況に影響されているものである。X-7区・J-7区を深掘りし、J-7区では9層最下部にピーチロックが検出されそれを破ると粘土層であった。地表面より-220cmを測る。X-7区ではピーチロックが検出されず、直ちに粘土層に達した。地表面より-220cmを測る。

以上の結果より考察すれば、丘陵はその基盤に粘土層があり、その上に各砂層がのっているものと考えられる。第9層は中央部に高く、丘陵北西方向および南東方向へ低く傾斜して堆積しており、それ以後の堆積に影響を与えている。その影響は若干ながら第2層にまでおよんでいることを考えあわせれば、現地表面の平坦化は7段においては第1層の堆積程度によるものであることがわかる。

発掘状況

遺物の取り上げは、調査中の層序に従っておこない採集・記録した。調査後層序確認の結果、消失した層の存在が明らかになり、全ての層序が存在したM-7区の層序を基準として各区の層序を見直した。以後調査中の層序と基準層を対比させながら、各区の調査状況を述べる。

A・X・Y-7区 粘土層まで含めて10層を確認した。このうち第4層までは遺物が少量出土し、各時期のものが混じていてるので省略する。第5層（基準第5層）はX-7区に認められ小量ながら宇宙下層式及び市来式土器を出土する。第6・7層（基準層第6層）は、A・Y区では4・5層として遺物をとりあげている。最も遺物の多い層で、宇宙下層式を主体に上層式が散点出土し、又市来式土器も点々と認められた。石斧・石皿・線刻あるタカラガイ等も出土しているが、遺構等は検出できなかった。以下の層は無遺物層である。丘陵末端部に位置するため、X-7区では特に層序が複雑である。黄白色砂層を掘りあげ粘土層まで確認できたのは权僅であった。

D-7区 黄白色砂層を含めて7層を確認した。遺物は第3層（基準層中間層）から増加しはじめ、第4層・第5層（基準層第6層）と数量を増す。基準層の第3・4・5層はこの区には存在しない。いずれの層も下層式土器が主体となるが、上層式・須恵器も各数点ずつ出土している。遺構等は検出されなかった。第6・7層（基準層第7・9層）は無遺物層である。

G-7及び人骨発見に伴う拡張区

黄白色砂層を含めて9層を確認した。遺物は第4層（基準層第5層で、第3・4層欠失）から増加する。第4層は宇宙下層式を主体に、上層式を少量含む。上面を礫群で被覆した袋状土塗墓に伸展葬の女性人骨を埋葬した遺構が発見されたが、この第4層形成時期のものである。土塗墓の形状・両脚間に嬰兒を埋葬するという特殊例・着装していたガラス玉、いずれもきわめて注目されるものである。第5層・第6層（基準層第6層）は下層式のみを包含するが数量的には少ない。第7層（基準層第7層）は南壁面最上部に2本の大形磨製石斧が密着して出土した。少量下層式を出土する層である。第8層（基準層第8層）はG-7区北東部のみに存在する。少量の貝殻条痕文土器とともに石皿・すり石が出土している。従来の下層式よりも時期的に古いものようである。

I・J-7区 粘土層を含めて10層を数えることができる。このうち明確な包含層は第5層（基準層第5層）・第6層（基準層第6層）・第7層（基準層第7層）で以下は無遺物層である。J-7区を深掘りし、黄白色砂層の下にビーチロック層・粘土層が堆積していることが判明した。第5・6層はいずれも下層式を主体に少量の上層式土器を伴出する。それぞれに焼石を伴う礫群構造が検出され、第6層では掘り込みも一部検出された。生活遺構と考えられるが小範囲の調査のため判断がつかかねる。第6層では礫群よりやや離れて完形の石皿も出土している。第7層は下層式のみを少量出土している。

N・O・P-7区 黄白色砂層を含め9層を数えることができる。このうち明確な包含層は第4層・5層・6層・7層・8層（いずれも基準層に同じ）である。宇宙上層式土器は第6層に多く、数量を減じながらも第8層まで認められる。下層式土器は第7層を主体に、第5層から第8層まで認められるが、数量的に上層式よりも少ないので第5層のみである。須恵器片も少量ではあるが第5層に認められる。N-7区6層にはM線で検出された住居址の続きが発見された。又O・P-7区7層上面では野籠穴と思われる4カ所のピットが検出され、2号ピットには貝輪、3号ピットには凹縁文土器大片が発見された。第8層には下層式に混じって、やや古い時期の土器片が出土し注目された。（本田）

(2) 第2地点の調査

第2地点は、第1地点の東側に県道をはさんで隣接する三角形状の地域である。第1地点と同じ方位で同様の2m方眼の区画を行ない、横線（北西-南東）の呼称は第1地点に従った。縦線（北東-南西）の呼称は、第1地点M線より26mの線を起点とし、南東へABC……L線とした。調査は、C-6区・F-6区・I-6区及びF-9区・F-12区を選び、発掘を行なったが、調査の進展に伴って、E-9区、E-10区、F-10区北側半分を拡張調査した。

層位（第12図）

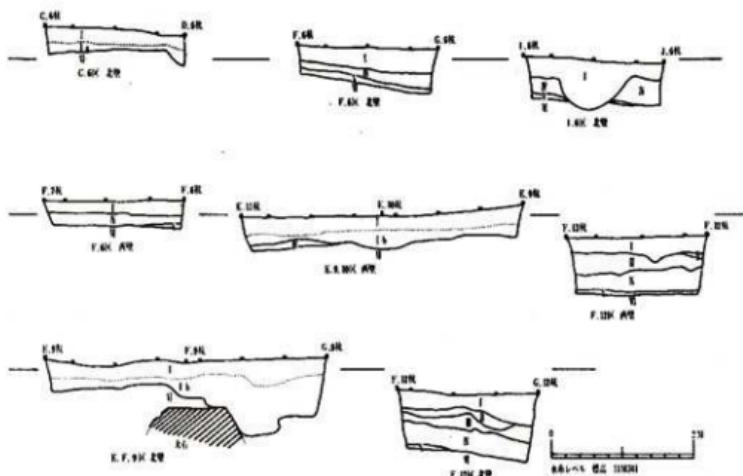
本地点は、本来第1地点と同標高で、丘陵の東端にあたるものと思われるが、現在では県道面まで削平されて第1地点とは約2mの比高差が生じている。地形は北西より南東方向へ、北東より南西方向へ緩傾斜をなしている。地層は、F-12区を基準とした。

第1層 褐色ないし暗褐色の砂層である。20~40cmの厚さで、調査区全域に認められる。一般にA線からL線方向に厚くなる傾向にある。ビニール片やコールタール片が見られ攪乱されている。

第1a層 C-6区に認められる。礫まじりの茶褐色粘土を主体に、暗黄色や黒褐色の砂がブロッケ状に認められ、自然の堆積とは考えられない。

第1b層 F-9区及びその拡張区に認められる。黄色砂と黒褐色砂がブロッケ状に混交し、点々と粘土塊が検出される。自然の堆積とは考えられない。

第2層 F-12区に認められる。黄褐色砂層で無遺物層である。比較的薄く、南側では存在し



第12図 第2地点 土層断面図

ない。

第3層 黒褐色砂層で、F-12区に認められる。10~30cmの厚さをなし、第2層との境は不整合である。第2地点唯一の遺物包含層である。

第4層 暗褐色砂層で無遺物層である。かっては第2地点全域に存在したと思われるが、C-6区、F-9区及びその拡張区では、消失するか部分的に薄く残るのみである。10~30cmの厚さをなし、F-12区では最下部にピーチロックが検出される。

第5層 円礫まじりの暗褐色粘土層で無遺物層である。5cm程の厚さしかなく、第2地点南西方に向へ堆積が薄くなり消失するようで、I-6区・F-12区でその傾向を認めることが出来る。

第6層 黄褐色粘土層で無遺物層である。第2地点の基盤をなすもので、調査区全域に認められる。現地表面よりやや急傾斜で南西方向へ傾き、第4、第5層もその影響を受けている。

第2地点における第4層以下の層位は、第1地点第9層以下の層位と同様であり、粘土層直上にピーチロックが認められることも、同様である。第4層は第1地点第9層に、第5・6層は第1地点第10層に該当するものと思われる。第3層は、F-12区だけでの調査であり、第1地点の何層に該当するか判断するのは困難である。

調査状況

第2地点の調査は、遺跡の広がりを確認するために行なったものである。6線の調査では、C・F・I区を発掘したが第1層において少量の土器小片及び貝壳1点が出土したにとどまり、遺物包

含層は存在しないことが判明した。F線の調査では、F-9区において礫群が第1b層に出現し、E-9区、E-10区、F-10区北半分にまで調査区域を拡張した。この礫群内からは、少量の土器小片及び石製垂飾品半欠が出土したが、第1b層の堆積状況が不自然であること、当初礫群と思われたものは、数個の大石が強い圧力で割れた状況を示していること、昭和39年第2地点をブルトーザーで平坦にした際大石を低い地点に埋めしたこと等より判断して擾乱層とした。第12図E、F-9区北壁の大石基部は動かされていないが、第6層中にある。C-6区にみられる第1a層も同様理由で擾乱された層と考える。F-12区では、第3層に比較的多くの土器片及び貝類を検出した。土器は、上層式、下層式が混じっており、白瓷片・須恵器片も1点ずつ出土している。このような出土状況は第1地点も同様であり、砂丘遺跡の特殊性を考えた場合、単に擾乱層としては片づけられないものである。調査区域が狭いため、第3層の性格はよくわからないが、一応遺物包含層と考えたい。保育園建設地において、第2地点から流失した土器の再堆積がみられたが、この第3層との関係が深いものと思われる。第3層は第2地点南西部に残存するが、C-6区及びF-9区とその拡張区に痕跡（第1a・第1b層にプロック的に認める）があり、以前はもっと北東部まで広がっていたものと考えられる。第2地点は、削平・平坦化された森遺物包含層に相当の影響があり、それは第2地点中央部より北東部へかけて特に強かったものと思われる。（本田）

(3) 第3地点の調査

① Aトレント

Aトレントは宇宿貝塚の立地する台地の東南部砂岩壁（隆起したビーチロッカが壁状となっている）崖下で、盛土した県道との間に窓状に入り込んだ低地に、幅2m、長さ6mで、NW 32°の方向に設定した。縦横2mの方形区を単位として3区分し、西より1・2・3区として調査した。

調査地点の標高は8m～8.1mで、道路側溝より約70cm、台地面より5m余り低い。全区を地表下1mまで掘り下げた後、3区を選んで地表下2.8mまで掘り下げたところ湧水し、発掘を停止した。

地層の堆積状況は第1地点の層序とほぼ一致し、M-7区の層序を基準として比較すると、第3層と第4層に挟まれた中間層を欠くのみで、第1層より第8層の遺物を包含しない黄白砂層まで、すべての層が認められた。ここでも第4層と第6層は黒褐色を呈し、それぞれ新期クロスナ層と、旧期クロスナ層に該当するものと思われる。

第1地点に見られた風蝕運搬作用による地層の欠失現象は、ここでも第3区南壁面の地層にあらわれ、中間層の欠失と共に第4層と第5層とは西端で消失している（第11図）。

第4層以下の地層はいずれも東方向（海岸の方向）へ傾斜をもって下っているが、前述の風蝕によって上面を削られた後に堆積した第3、第2、第1層は水平に重なり、第4・第5・第6層との間に明瞭な不整合が観察される。

遺物の出土状況を第5図によってみると、陶磁器・青瓷・須恵の層位別出土の重点がすべて第1

層に集中しており、第1地点と異なる結果となっている。おそらく人為的擾乱によるものであろう。第1区において、地表下9.5cmの深さ（第3層）に、幅1mの帶状に集積した礫群が、トレントを横断しているか所が発見された。この礫群は貝殻・骨・須恵器・青瓷などの外に陶磁器をふくみ、礫群を覆っていた黄褐色の粘土覆り層は、礫群に接して、西側へ広がっていることが判明した。このほかにも、第1区では地表下7.0cmで黄褐色の粘土塊が発見されている。これらの事実は人為的に粘土がもち込まれたことを示すものである。

宇宙上層式土器と宇宙下層式土器の層位別出土の重点はいずれも第6層にあって、第1地点の結果と一致し、第4層以下の層序が安定していることも符合している（第5図）。

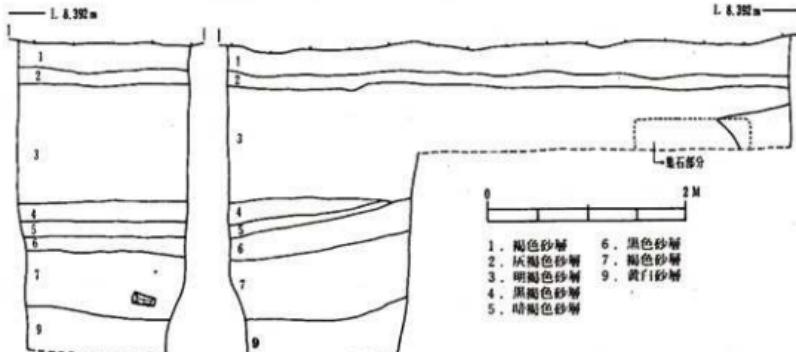
第8層の黄白砂層には若干の土塊片（宇宙上層式）の落ち込みが見られたが、このような現象は第1地点でも見られるもので、deflationによるものと考えられる。また第8層面には、第3区の南側壁面に入り込む形で半円形の落ち込みが発見された。壁面での径は5.9cm、円弧から壁面までの高さは2.5cm、深さ1.0cmであるが、造構としてのきめ手は発見できなかった。

第8層は旧砂丘に該当するもので、上面の標高は第3区東端では、5.281m、西端では、5.492mあって海岸へ向かって緩かな傾斜を示す。沖積世の最大海進時の宇宙における汀線を、サウチの結果から推定して標高4mとすれば、第8層の表面は最大海進の時点でも陸上にあって1m以上の高さを保っていたことになる。

Aトレント地点に遺跡が成立したのは、沖積世の最大海進時以後ある程度の海退が行なわれた時点で、第1地点の第8層に相当する包含層が見られないから、第1地点の遺跡成立より一時遅れて、面縄東綴式の時期（繩文後期中葉に該当）であったと考えられる。

② Cトレント

宇宙貝塚の立地する台地南西端より、南西方向約160mに、県道より分岐する農道に沿って、南側に底辺4.5m、高さ1.1m、面積約3.5m²の略台形の空地がある。南に接する民家とは高さ1mに近い土塁で境され、西は畦道をへだてて、一段低くなった畠地に面している。資材置場で西隅



第13図 第3地点 Aトレント 東壁・南壁断面図

には砂利の堆積がみられた。

空地の中央よりやや東よりに、土壌に沿って幅2m、長さ6mのCトレンチをNW 88°の方向に設定した。着手直後に東側4mは地表すれすれに岩盤が出現したので、西方向に4m延長して長さ10mのトレンチとした。2m毎に区画して西より1・2……5区と呼称して調査した。

昭和52年8月熊本大学が高又遺跡として調査を行なったのは、この地域である。2箇のトレンチを設定して調査が行なわれているが、内1箇はこの空地内中央に道路と直交する方向に設定して南区第1トレンチと名づけられ、他の1箇は農道をへだてて北側に、用水路に沿って設定し北区第1トレンチと名づけられたとい⁽¹⁾。

Cトレンチを調査した結果、地表下約10cm(第1層)は赤土まじりの砂利層で、車輛の出入るために敷きつめられたものであった。表土を剥ぎ終ると第4区、第5区は直ちに基盤の砂岩(ピーチロック)が露呈し、第1・第2・第3区の北側も同様に基盤の砂岩が現われ、南側にわずかに褐色砂層(第2層)が見られた。

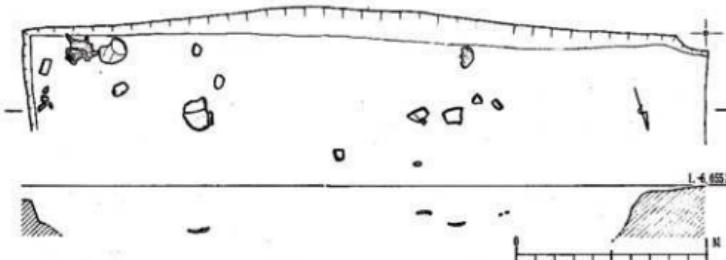
第2層の褐色砂層の下部は、第3区では直ちに砂岩となり、第1区・第2区では黄白色砂層(第3層)と薄い褐色砂層(第4層)をへて基盤の砂岩となっている(第16図)。

基盤の砂岩層は、Cトレンチでは第1・第2・第3区では北側に、第4・第5区では全面に、地表下10~20cmに出現しており、第1・第2・第3区南側では南へ急傾斜をもって下っており、第1区西側断面では1mで74cm降下している。

熊本大学の調査した南区第1トレンチは、Cトレンチと直交に近い略南北方向に設けられ、地点はCトレンチより西に当たる。このトレンチでは基盤の砂岩層は東より西へ急傾斜をもって下っているとい⁽²⁾。この二つのトレンチに現れた基盤の様相から推して、Cトレンチを設定した資材置場は、中央より東側は全面に砂岩の露頭となっており、中央付近を境として西および南方に急斜面をもって下降しているものと考えられる。西隣に段落ちの低地が接していることはこの考を助けるもので、旧地形の残存したものであろう。

地圖についてみると、第1層は厚さ5~20cmで、東側に薄く西側に厚くなる傾向がある。

原地形を削平した後、赤土と砂利を混入して被覆してかためたもので、人為的な層である。



第14図 第3地点Cトレンチ 1.2区
第2層 宇宿上層式土器出土状況

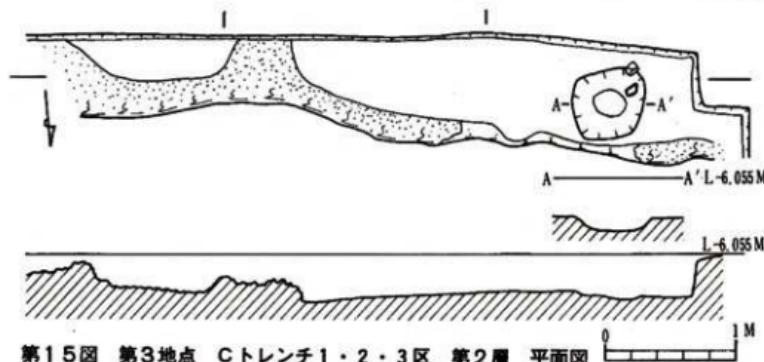
第2層は第1区～第3区の南側だけに分布し、厚さ20～30cmの褐色または暗褐色を呈する砂層である。唯一の遺物包含層で主として宇宙上層式土器を出土し、貝斧・獸魚骨を伴なう。第1地点の層序に対比すれば第6層に当たる、旧期クロスナ層に該当するものと思われる。

第3層は第1区および第2区の一部に分布する。厚さは最高60cmあり、黄白色を呈する砂層で遺物を包含しない。

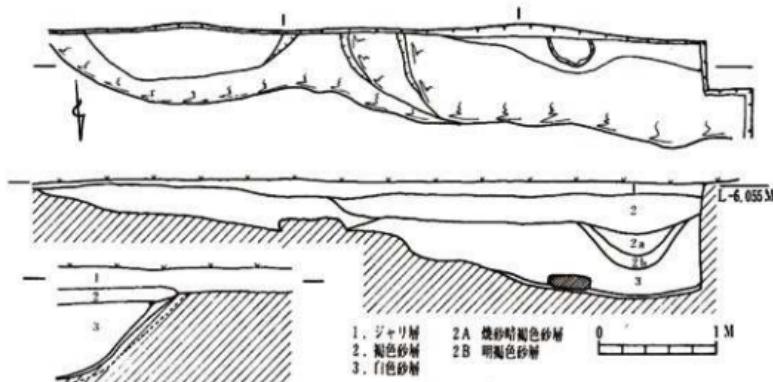
第4層は第1区にみられる薄い褐色砂層で、厚さは3cm以下である。基盤の砂岩の上部を薄く覆っており、遺物を包含しない。

造構としては第1区に炉跡がある。第2層から第3層へ掘り込まれたもので、東西53cm、南北56cm、深さ10cmの溝まる方形である。内部より土器片・貝殻・獸魚骨・木炭片が出土し、炉内にあった2箇の窓は内部の砂と共に火熱を受けて焼けた状態であった(第15図)。

第3区では、第2層の下は直ちに基盤の砂岩層となっているが、この基盤面はほとんど火熱を受



第15図 第3地点 Cトレンチ1・2・3区 第2層 平面図
pit は焼砂 (炉跡)



第16図 第3地点 Cトレンチ平面・断面図

けて焼けており、土器片・貝なども焼けて固着したような状態を呈し、遺構の一部かと思われた。

遺物の出土状況で注意されるのは、宇宿上層式土器と三角凸帯を有する弥生式土器とが共伴出土し、また第1区、第2区の第2層から比較的大片の土器が出土する面で、小形平底で焼成良好な脛部以下を有する土器と、断面三角形に肥厚した口縁部が出土したことである（第14図・第15図）。

Cトレンチをふくむ遺跡の形成についてみると、熊本大学調査の北区第1トレンチ地点では客土が約1mあり、遺物包含層最下部は更に1m余り下部と見られるから標高4.7m前後となる。同じく南区第1トレンチでは、遺物包含層の最下部は現地表下1.4～1.8mであるから、標高になおすと4.7～4.3mである。⁽³⁾ Cトレンチの遺物包含層最下部はやゝ高く標高5.8mとなっている。

沖積世最大海進時の汀線を標高4mとすると、前記の北区第1トレンチ、南区第1トレンチ遺跡では海拔7.0m前後の高さとなるので、おそらく最大海進の後に海退がはじまり、ある期間を経過した後に、遺跡が形成されはじめたものと考えられる。南区第1トレンチ出土の土器は、⁽⁴⁾ 乳房状尖底の砲弾形で、貝殻縁によって器面調整を施すものである。文様は器体上半部に縦位または横位の羽状沈刻線を施している。

Cトレンチの地点では前二者より遅れて喜念式～宇宿上層式の時期にいたって生活の場となったものと言える。

(4) その他の調査

発掘期間中に、第2地点の東南に隣接する旧宇宿小学農場跡地に、保育園建設の基礎工事が行なわれた。建築予定地は第2地点との境界の西よりに、崖に沿った地点が選ばれ、掘削が行なわれたが、崖下の一ヵ所より土器が出土した。調査したところ、第2地点の崖が水蝕によって一部崩壊して、崖下に堆積した際に、第2地点より遺物も流出して混入したものであることが判明した。

基礎工事による掘削地全域で遺物が出土したのは前記の一ヵ所のみであったが、他に西南部分より人骨の一部が掘り出され、仮り埋葬されたことも判明した。この人骨も採取したが、重機による掘削作業であったため、頭骨の一部と管骨の部分一箇のみであった。出土地点を調査したが遺構を発見することはできなかった。

この他に、第2地点より東方約60mの地点に、大瀬に通ずる道路に沿って大瀬遺跡がある。畠地であるが、現況では大半が砂の採掘によって約1m掘り下げられている。恐らくこの掘削が遺跡発見の端緒となつものであろう。地表に遺物の散布が見られた。保育園予定地より出土した遺物とともに採集して、調査の資料に加えた。（河口）

第1表 第1地点土器層位別出土表

層位 型式	V	VI	VII	VIII	N	III	II	I
市 来	4	2	4					
頬 市 来	1	8	5	1				
面 繩 東 洞	6	8	13	1				
面 繩 東 洞 + 市 来	13	34	26	3	1			
嘉 德 I A		5	12	6				
嘉 德 I B		1	1	1	1			
凹 線 文		9	9			1		
嘉 德 II	2	9	14	4				
線 刻 文	4	7	4					
面 繩 西 脊	10	11	1					
面 繩 前 庭		5	4					
条 痕		4						
貝 縁 条 痕	5	7		1				
喜 念 I		3	26	5				
宇 宿 上 肥 厚		5	40	2				
" 三 角		8	80					
" 精 鋒		2	43	4	1			
" 舌 状		3	23	2	1			
" 直 口			6					
" 外 反			3					
" く 字			5	2				
平 底	6	13	21	7	1			
張 出し 平 底		2	2	2				
上 げ 底	1	5	7	2				
丸 平 底		3	32	8				
丸 底	1	3	18	7				
貼 付 丸 底					1			
滑 石 入 り		2	4	2	8			
甕 文 晩 期			2	1				
苏 生		1	9					

M-4区～M-7区・M-9区・M-10区、N-7区・O-7区・

P-7区出土の土器を使用す。

註

1. 宇宿発掘日誌（中山記載）による。
2. 註1に同じ。
3. 註1に同じ。
4. 世界陶磁全集1 日本原始 昭和54年2月 図版224・図版225 小学館

第3章 遺構・遺物

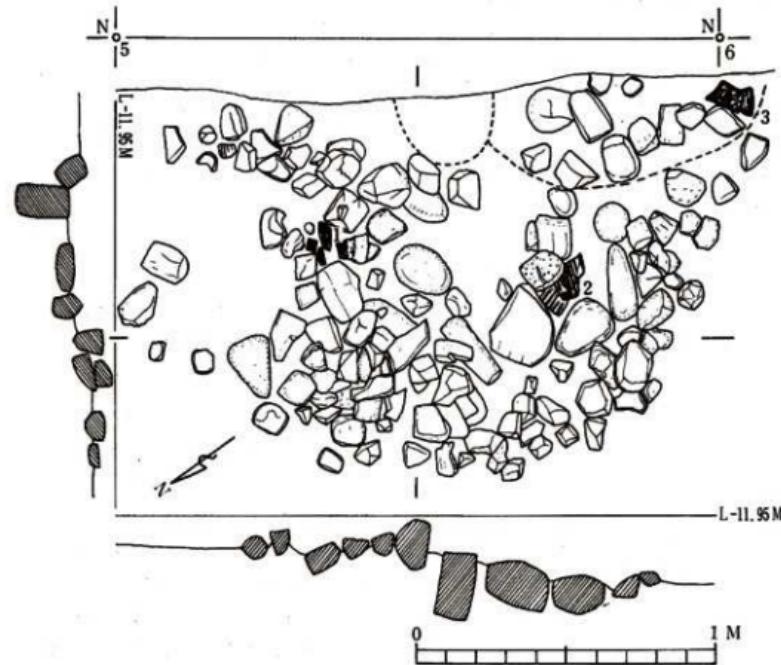
1 遺構

(1) 集石 (第17図)

8月21日住居址の列石を除去後さらに下層の掘り下げをはじめた。M-5区では地表下1.8mまでに7層に達し、男根状の石製加工品や面縄束縫式、市来式等の土器の破片を出土した。さらに掘りすすめると集石の上面が検出され、翌22日にはほぼ全貌を表すことができた。N-5区西北端を中心西北方向へ1.5m、ほぼ半円形を呈した中におさまり、礫の散乱がみられず、きわめて整っている。内部と北東隅がやや粗であるが、他は密集している。しかしつみかさなりはみられず、ほぼ一時期の構築であろう。N-5区へどのように広がっているかは不明である。

N線の断面でみれば礫は7層最下面、8層の最上面に配置されている。

礫の形状は拳大から小頭大のものがもっとも多く、住居址の列石よりは小さいものが多い。また



第17図 M-5区 7層 集石遺構平面 断面図

住居址は立位のものが多く、焼石もみられたが、ここでは平においてあるものが多く、焼石も少ない。

断面はほぼ平坦であるが、中央部分が周辺部よりややくぼむ形状を示している。

全体に南へやや低く、住居址を形成する礫群の下へもぐり込むような状態であった。

遺物は礫間に出土する。1は面縄東洞式の完形土器（第30図）で、礫間に到立し、密着した形で出土した。2はやはり面縄東洞式の口縁部で（第34図3）塊状のピーチロックと小頭大の礫の間にあった。2の面縄東洞式をかこむように位置する礫石は、この集石中では最大のもので、南から北側へ並列して4個みられ、北端の石は立位に22cmの深さであった。土器の上面にはピーチロック製の礫がかぶさるように位置していた。南隅の壁ぎわで集石の縁辺にあたるところに市来式の口縁部破片（第33図1）が裏がえしの状態で出土している。このように集石に伴って、面縄東洞式と市来式が共存していることが確認されたことは重要である。なお貝甌、貝斧、殻石なども、集石周囲および内部から発見された。

中央部付近のN-6区との境寄りは礫がまばらである。一面に木炭片、木炭粒が分布し、土の色も暗黒色および漆黒色を呈しており、有機物を含んでいる。断面では巾70cm、深さ30cmの舟底状の落ち込みをなしていることが判明した。

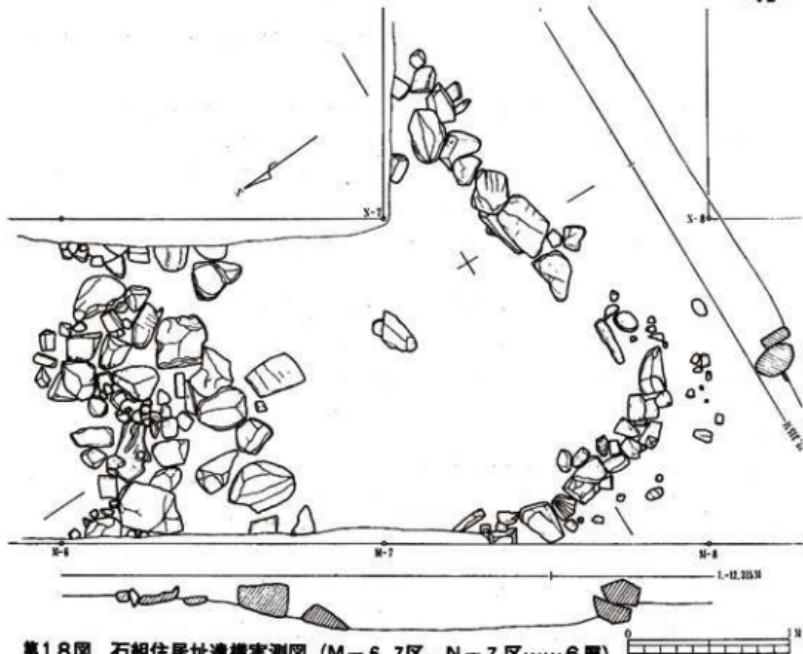
集石遺構の意味について簡単に触れたい。

集石の平面の形状から推察すれば、N-5区に広がって略、円形状をなすのではないかと思われる。中央部附近は礫の集中がなく、あってもまばらで、ほぼ空間を示している。この面の土は暗黒色土を呈し木炭片もひじょうに多いので、火熱を受けていることは明確である。これらの結果から、集石遺構の中央部では火を使い調理を行ったのではないかと予想され、まわりの集石群も、それらの用途と深い関係にあるものであろうと思われる。

(2) 石組住居址（第18図）

M-7区では5層下から6層にかけて礫の出土が目立っていたが、8月9日の段階でそれらの礫群の分布が北東半に限られていることが注目された。これらの礫や礫間に出土する主に上層式の土器片を採集しながら掘り進み8月18日M-7区南隅に赤褐色に焼けた立石の上面と周辺の焼土を検出したため、以後小礫のみを取り上げ、他は残して全体を見ることとした。翌19日午後礫塊はM-7区へ方形形状にめぐることが確認されたので石組の住居址と断定し、内部の礫はすべてについてこれを検討した。なお、下位に掘り下げるため方形形状の石列も最終的にはそれに加えた。

石組はN-7区の北隅から略西方へ2m70cm出直線でのび、さらにやゝ曲がりカーブし北へのびL-7区へ入る。（L-7区は未発掘）M-6区西隅から東へ伸びN-6区に入る。（N-6区未発掘）M-6区を西から東へ並ぶ石列内部はほぼ直線的に結ばれるが、北方へは大きい礫が密集しM-7区北半全面にわたっている。東側石列はN-6区北側附近から南へ続くと思われるが、N-6区未発掘のため不明である。石列内部部分は北、南側とも、ほぼ直線的に配列されている。西側は礫がやや小さいが、地形が西へやや高くなっていることによるものであろう。内部断面はほぼ平坦で、



第18図 石組住居址遺構実測図 (M-6.7区, N-7区……6層)

石列上面部より約30cmの深さである。床面は砂層のため特に固いという特徴も認められなかった。

石列を形成する礫および砾塊は、6層中にあるが、底面は9層上面に位置している。住居址内外の礫のほとんどは6層内に包含されている。

石列を形成する礫群は、赤褐色に変色し、熱を受けたものがみられる。南側石列西よりの部分は礫および周辺の土が赤く、焼けた形跡を示している。外側周辺には土器片が散らばっていた。ここでは礫の上面に薄手研磨の縄文晩期土器片が1点認められた。

この箇所の内部との区切りには、扁平なサンゴ礁を立石状に建てて、使用している。なおサンゴ礁は西側石列に1、北側にも1みられる。特に北側のは大きくまとまった壺形土器を囲む他の2つの砾塊と共に使用されている。

他の焼石は北側石列につながって広がる集石群の中にある。ほぼ完形の壺形土器の口縁部を囲むように数個の砾塊がみられ、土器に面する部分が赤褐色を呈していた。西方はサンゴ礁で区切られているが、サンゴ礁には焼けた形跡はみられなかった。また内部北側の部分にも焼砾焼土が部分的に認められた。

住居址内面は、堆積?している多量の砾塊や少量の砾塊を取り除きながら掘り下げていったが、これらの砾塊にまざって遺物も出土した。土器は破片が多く、1045片を数えた。明確な下層式が38片、貝殻条痕などの条痕を有する脣部片が55片、薄手無文が5片、研磨土器8片、

宇宙上層式口縁部片 51 片、丸底 12 片、平底 3 片、それに宇宙上層式と思われる無文土器片 873 片である。須恵器、青瓷等全く混入していない。

また全面に木炭の小片や粒子が觀察され、獸骨、魚骨片や粉、そして貝殻等も点在していた。埋土は褐色ないし、黒褐色等配合がみられ、砂にしてはやや粘り気のある感触を呈していた。

なお列石を除去したあと、さらに 9 層を掘り下がったが、下位は下層式土器片が多くみられた。

住居址と判明したあと、内部に堆積していた礫群を全部あたってみた結果は次の通りである。総計 3158 個であるが、それ以前の 5 層下部から 6 層に堆積していたものや、住居址周辺のものを合せると極大なものになる。

礫はそのほとんどが、割れおり拳大以下のものが圧倒的に多かった。火熱を受けて赤褐色を呈したもろい礫が目につき、硬質の礫は少なかった。大礫のほとんどは住居址の石列に利用していたものが多く、内部に落ちこんでいたものは 10 数個であった。大人が 1 人でやっとかえられるほどの重量のものが多い。

第 2 表 住居址内堆積礫分類表

礫の種類	焼けていない礫	焼けている礫	計	%
小 級	2395	303	2698	85.44
中 級	177	55	232	7.35
大 級	56	16	72	2.28
円 級	107	4	111	3.51
輕 石	7	0	7	0.22
さんご	大	3	0	0.09
	小	19	0	0.60
石 器	16	0	16	0.51
計	2780	378	3158	100%
%	88.03	11.97	100%	△

(備考)

- 1 9 日住居址と判明したあとでの採集の礫のみで、それまでの礫は入っていない。
- 2 住居址を形成する列石は含まれる。
- 3 焼石は肉眼による表面の観察によった。
- 4 分類は簡単に拳大以下を小礫、小兒の頭大を中礫それ以上を大礫とした。

また北東隅にもやはり礫が多くみられ、中には焼石があり、礫間に上層式の土器が出土したことは 1 号の東北隅の状態と類似している。

長軸、短軸の向きが東西南北を示していることも同様である。

1 号においては、石圈内に瓢箪形に土が焼け木炭が多量に発見されており、炉址と考えられるものがみられたが、2 号においては特にまとまってみられなかった。むしろ東北隅の焼石や南西隅の石組の周辺に多くみられた。石圈の中は全面にまばらに木炭片が出土していた。

次に前回の調査で発見された石組住居址との関係をみてみよう。

記述の関係から以前に調査された住居址を 1 号とし、今回のものを 2 号と仮称する。1 号は「第 2 トレーンチ E 区、F 区および拡張区の J 区に…」と記録されており、図面を複合して考えると、2 号の東南 13m の地点に位置する。さらに要約すると「内側は約 2m、外側の各辺約 2.3m で、北方へ餘々に開きかけんの方形を呈する。東北隅に礫が厚くあり、これに埋まれた部分では木炭が多量にみられる」とある。2 号は 1 号と逆に長軸を東西間にとり、東西約 3m 南北約 2m を測り、方形を呈するものと思われる。

その他、石組の石は9層に切りこんでいること。住居址を覆っている層に礫が多いこと。土器の主体は宇宙上層式であること。石組にサンゴ礫を使用していること等、全く同じ様相を呈している。

2号住居址の立地は、南西・西・北・北東の三方に高く、東方に低い限られた砂丘の凹地の緩傾斜面にある1号は、「…西南部から東北部にかけて、基底部の純砂層は大きく傾斜している」と述べ、住居は「古い砂丘の低い部分に生活が営まれた」とあるが、いずれも低い部分に位置していたものと思われる。当時は2号がやや高いところに、1号が低いところに立地していたようである。こころみに地表面からの深さは1号2.5mで2号は1.5~1.8mと2mの深さに達していない。

次に住居址内部を中心に多量に堆積している礫群について述べる。

前回の調査においても多量の礫が出土したことが記録されている。

「…特に6、7層において円礫、角礫を多く含み、礫層の感があった。」

「…ある時期に遺跡の大部分を覆うように、堆積したことを物語っている。そしてこれらの層中にある土器の磨滅の著しい事実は、この礫の堆積が円礫とともに多量の角礫を含み、急激な水流によってもたらされたものではないかと思わせる程である。」

躍大な礫が検出されたことを読みとることができる。今回の調査においても同様に多量にみられた。第1地点においてもM-6、7区の5層下から特に6層に集中している。前述したように振り下げるにしたがい、範囲がせばまり、結局住居址内部へ限られてしまった感がある。もちろん、M-4・5・7~10区にもまばらにまた部分的に集中してみられたが、それらはいっしょに散乱する貝殻骨片や、貝殻の残片などとともに、人間の生活の痕跡と理解できる。

住居址内に堆積した礫についてはさきに分類表で示したが、焼けた石と判断されるものが、約12%も占めていること、石器が16個出土していること、軽石やサンゴがみられること等から自然現象でなくやはり人為的な行為の結果と判断されるのである。

その上、大礫の72個は住居址内部の10数個と、残りは列石を形成する粗石だけであって、住居址外においては、これらの大きい重量のある石はみられなかった。

土器の磨滅のことについては、宇宙上層式土器自体、土師質で胎土の精密なわりに焼きが甘くもあり特徴を有していること、砂丘遺跡という特殊な自然環境によるものではないかと思われる。

住居址内とその周辺に堆積した礫群との関係については、1号住居址においても同様の結果がみられ、密接つながりがあることに、予想されるが、どのようなものであるか詳細なことは不明である。

(出口)

(註) 国分直一・河口貞徳・曾野寿彦・野口義廣・原口正三 「奄美大島の先史時代」(『奄美-自然と文化-』)九学会連合奄美大島共同調査委員会編

(3) 溝状遺構 (第7図)

M-8区南側に、M-9区に一部分かかって、北西-南東方向に走る溝状遺構を発見した。上部

巾 1.6m, 下底巾 3.0m, 深さ 1.3m の略 V 字溝である。溝底は 9 層まで達している。南東方向へやや低く、また細まっている。北西断面で観察すれば、5 つの層の堆積状況がうかがわれる。

遺構検出の状況は次のとおりである。

8月 13 日 M-8 区、M-9 区はすでに 5 層の掘り下げを行っていたが、トレーナーを横断するやや褐色の帯が 5 層茶褐色内に現われた。壁面で観察すると、4 層黒褐色の部分がその部分だけやや茶色っぽい色調を呈しておらず、5 層になってはじめて明確に区別出来る状態であった。したがって溝は 3 層からの落ち込みであると考えられる。

溝中の遺物としては須恵器片が目立つ。もともと M-8 区においては須恵器の出土が目立ち 4 層だけでも 3.2 片を探集している。8 月 13 日に溝と断定した段階でも、ヘラ描波文、(第 74 図 26) 口縁部 (第 74 図 1)などを発見している。さらに 8 月 20 日、溝底に近いところで、8 月 21 日、溝底からそれぞれ須恵器を発見した。他に下層式や上層式の破片も多く見られた。以上の溝の掘り込みや遺物の出土状態から須恵器の時期との関連が密接であることがうかがわれる。

溝の目的等については、わずか 2m 巾のトレーナーで確認しただけであるので、なんともいえず、事実だけを記録することにした。

(出口)

(4) 貯蔵穴 (第 22 図)

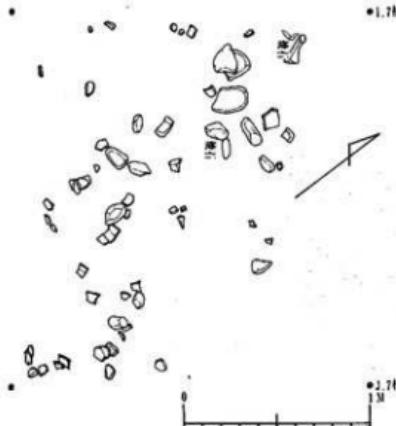
第 1 地点 O-7 区、P-7 区において 4 カ所のビットが検出された。いずれも第 7 層土に掘り込まれたものであるが、内部に堆積する土は色調・性質ともに第 6 層とは異なるもので、灰色味をおびたカカフカした層である。獸骨や貝類も包含されている。第 7 層上面を生活面とする時期に掘り込んで作ったものであるが、第 6 層堆積時期にはすでに埋まっていたものと考えられる。O-7 区北西部より P-7 区へかけてそれぞれ 1・2・3・4 号ビットとした。

1 号ビット 一部 N-7 区にかかるが主体は O-7 区にある。長径 6.5cm, 短径 5.0cm, 深さ 1.5cm の浅いビットである。形状は梢円形をなす。

2 号ビット O-7 区中央部に位置する。ビット上縁部は長径 9.5cm, 短径 6.5cm で不整であるが、下底部は径 7.5cm の梢円形をなし深さ 3.0cm である。下底部東側および西側はふくらんで上縁部よりも大きくなり、断面はラスコ底部状をなす。いわゆる袋状ビットの形態をなすものである。サラサバティ製貝輪が 1 部内部より出土して注目される。

3 号ビット O-7 区、P-7 区にまたがり、4 個のビット中最大のものである。上縁部長径 5.5cm, 短径 4.0cm で梢円形をなし、下底部は大きくふくらんで長径 9.0cm, 短径 7.5cm の梢円形をなす。深さ 6.0cm で断面ラスコ形ないし壺形の見事な袋状ビットである。ビット上部を 9~2.0cm の厚さで黒色土がおおい、以下は灰色味をおびたカカフカした層で、獸骨・魚骨・貝類・しいのみの炭化物等多量に含んでいた。土器片も比較的多く下層式のみであるが、下層式のなかの凹線文土器大片が検出され、ビット製作時期はこの凹線文土器使用時期であることが判明した。

4 号ビット 3 号ビットに隣接して P-7 区北西隅に位置する。最も小さく上縁部長径 4.0cm, 短径 3.3cm の梢円形で、下底部は 2・3 号ビット同様ふくらんで長径 5.0cm, 短径 4.0cm の梢円形



第19図 第1地点 I-7区 集石群平面図
(第5層)

にできなかつた。土器は宇宙上層式と下層式が混じつてゐる。

となる。深さ40cm、断面フラスコ形の袋状ビットである。

以上4カ所のビットは、同時期に同目的で製作されたものと考えられる。3号ビット内部堆積土の状況より判断して貯蔵穴の役割をなしたものであろう。時期は、同じく3号ビット内出土土器より、凹線文土器使用時期であることがわかる。密集度・断面形状はいずれも注目されるものである。

(5) I-7区5層疊群(第19図)

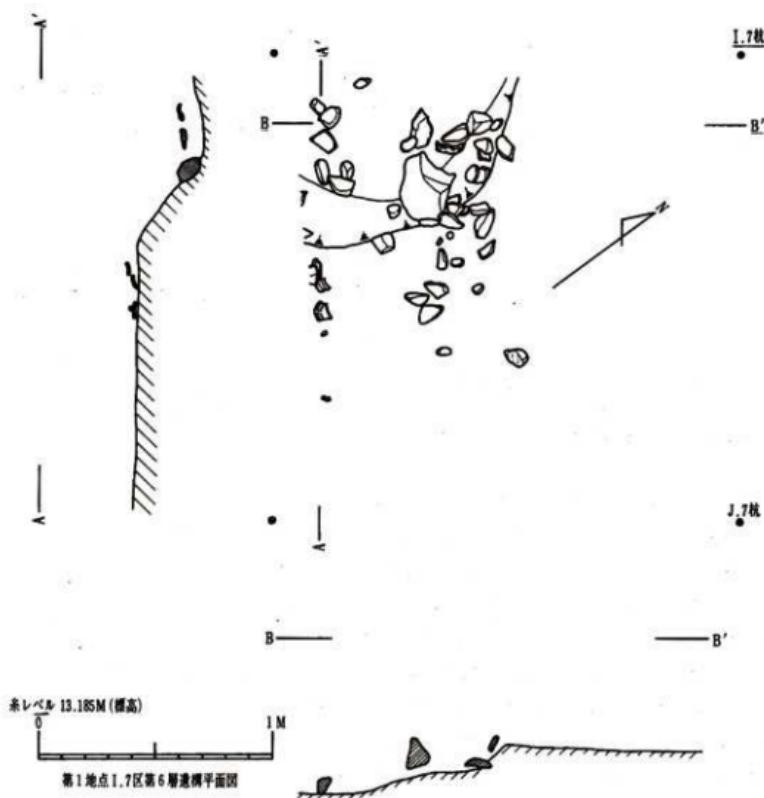
第1地点 I-7区5層下部において土器片を伴う疊群が検出された。北東隅には焼石が多く見られるが、小範囲の調査で性格は明確

(6) I-7区・J-7区6層疊群及び掘り込み(第20図・第21図)

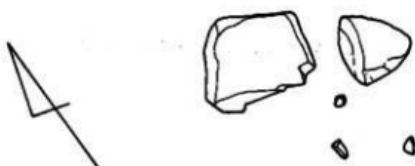
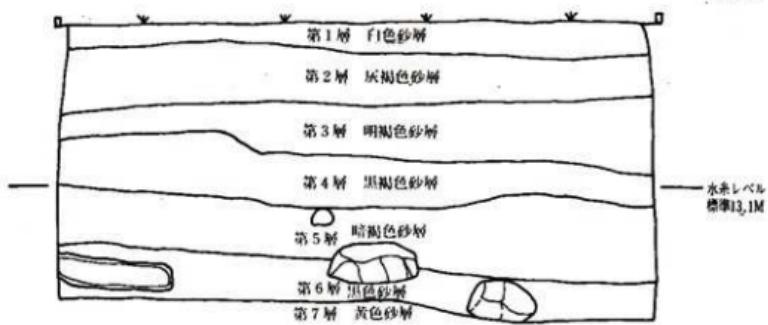
第1地点 I-7区・J-7区6層において再び疊群が検出され、I-7区北西隅には掘り込みの一部分と思われるものが出現した。この疊群及び掘り込みも小範囲の調査で性格を明らかにできないが、掘り込みは上縁部よりI-7区壁まで最大90cmを測る略円形のもので、上縁部の広がりから考えれば比較的大きなものようである。疊群はこの掘り込み周辺に集中しており、掘り込みと何らかの関係を有するものであろう。第5層疊群同様焼石も点々と認められ、木炭の付着したものもあった。焼土も一部検出されている。J-7区には、この掘り込みから1~2m離れて大きな疊が3点あり、このうちI-7区・J-7区境のものは完形の石皿である。J-7区のこれら大きな疊の周辺にも、焼石が数点認められる。土器は掘り込みに隣接して、宇宙上層式口縁部と喜念式口縁部が出土している。喜念式は横状の把手を有するものである。

以上I-7区・J-7区5層・6層疊群及び掘り込みは、その性格が明確でないが、何らかの生活遺構であることにはまちがいない。(本田)

第20図



第20図 第1地点 I・7区 第6層 落ち込み実測図



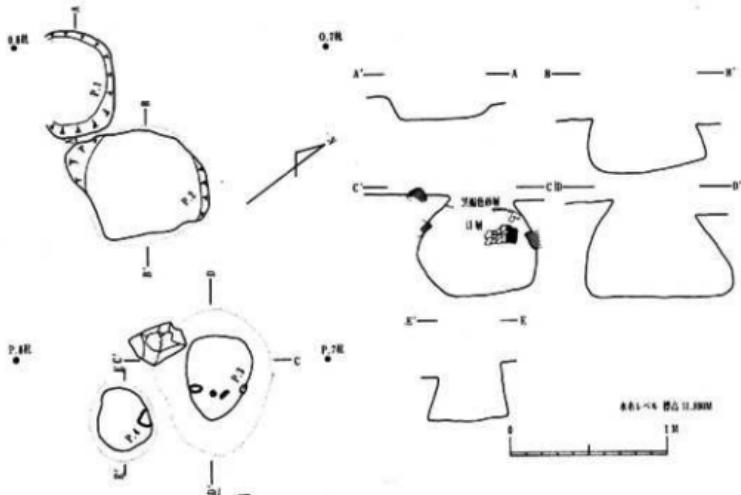
焼石



焼石



第21図 第1地点 J・7区第6層造構北壁断面図



第22図 第1地点 O・P区 pit 実測図

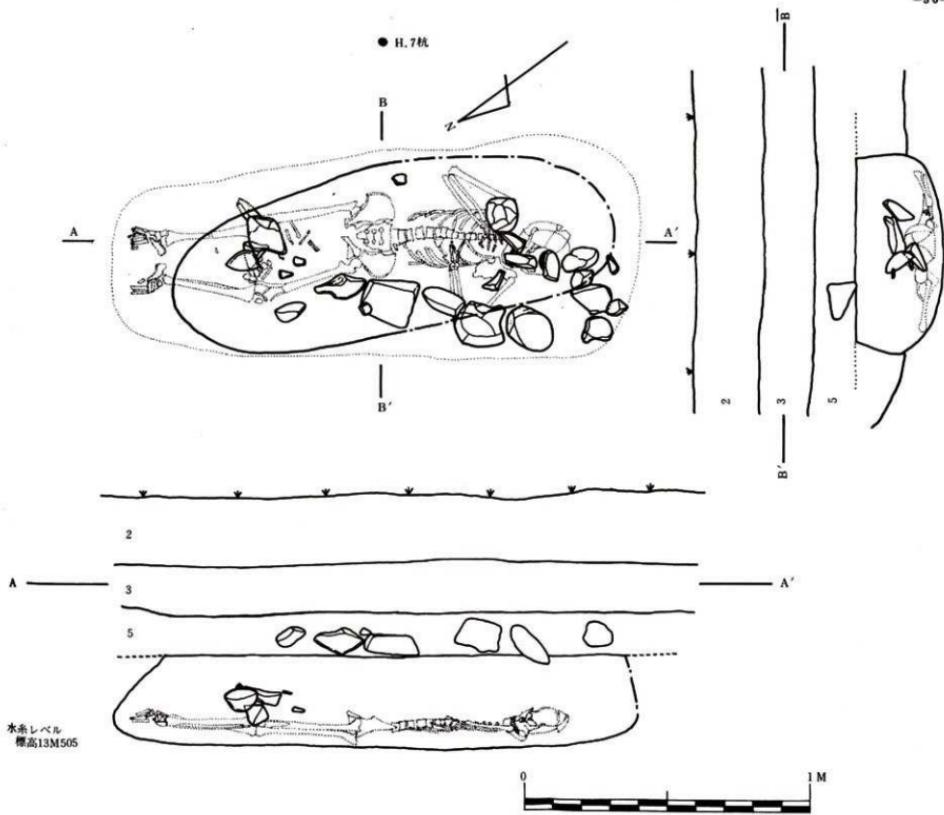
(7) 墓葬遺構

土塗

宇宿貝塚では、かって県道工事中壺を抱いた様な恰好で人骨が発掘されたといわれているが、⁽¹⁾発掘調査によって埋葬遺構が発見されたのははじめてである。埋葬地点は石組住居址より北西10mのG-7区・G-6区にまたがる区域で、隣接するI-7区においても石組遺構の一部が検出されおり、墓域と生活区域との分離はまだ行なわれていないようである。

埋葬のために構築された土塗は、内部の埋土の暗褐色砂中に、明褐色の砂が一部混じっていたことから、第3層から掘り込まれたものと考えられた。しかし後に、諸資料と発掘経過の検討の結果、土塗の発見は、土塗表面を被覆していた砾群の下底面のレベルであったことが判明した。砾群は第4層の暗褐色砂層中で検出されたものであったから、土塗が掘り込まれた面は、第4層の表面から1.0～1.5m下位であった。埋土中に混じっていた明褐色砂は、埋葬の際に他から運んで来た清浄な砂をバラ撒いたものであろう。土塗内の埋土は殆ど暗褐色砂であって、しばしば土塗壁内外のみわけがつかないほどであった。

埋葬土塗は第4層形成の途中に構築されたものであるが、この区域では他の区域に見られる新期クロスナ層族当層（他区域の第4層）が欠けているから、土塗の属する第4層はM-7区の層序を基準とすれば第5層に当るのである。遺物の出土状況を見ると、G-7区、G-6区では第4層以下は宇宿下層式土器と若干の宇宿上層式のみを出土し、須恵・青瓷等は見られない。したがって第4層は宇宿上層式の時期に該当するものと見られる。



第23図 配石埋葬図

土壇中から出土した遺物には副葬品と埋土中の土器片、埋葬に使用された礫がある。副葬品については後述するのでここでは土器と礫について述べる。埋土から検出された土器片は総計42個あり、内宇宙上層式に属するもの14個、宇宙下層式に属するもの28個で、須恵器、青磁などは含まれていない。一方埋葬に使用された礫は総計23個、そのうち19個は土壇上面を被覆して配置されたもので、いずれも自然礫である。残りの4個は嬰兒の遺体を直接被覆したもので、すり石1個と石皿1個が含まれている。いずれも打削られたものを使用しており、とくに石皿の破片は嬰兒の頭部から胸部へかけて直上に置かれていた。

以上の状況から判断して埋葬の時期は宇宙上層式に属するものと考えられる(第23図)。

土壇は袋状を呈し上面では長径157cm、短径60cm(推定)のやや正な梢円形で、底面では長径185cm、短径は南側(埋葬人骨鼻腔付近)77cm、中央(骨盤付近)71cm、北側(脛骨上部付近)63cmの南に広く、北へ狭い溝まるの長方形となり、深さは37cmである。方向は南西-東北で、底面の長軸はSW35°を示す。

地表より55cmの第4層中より掘り込まれ、底面は第5層に達している。

埋葬

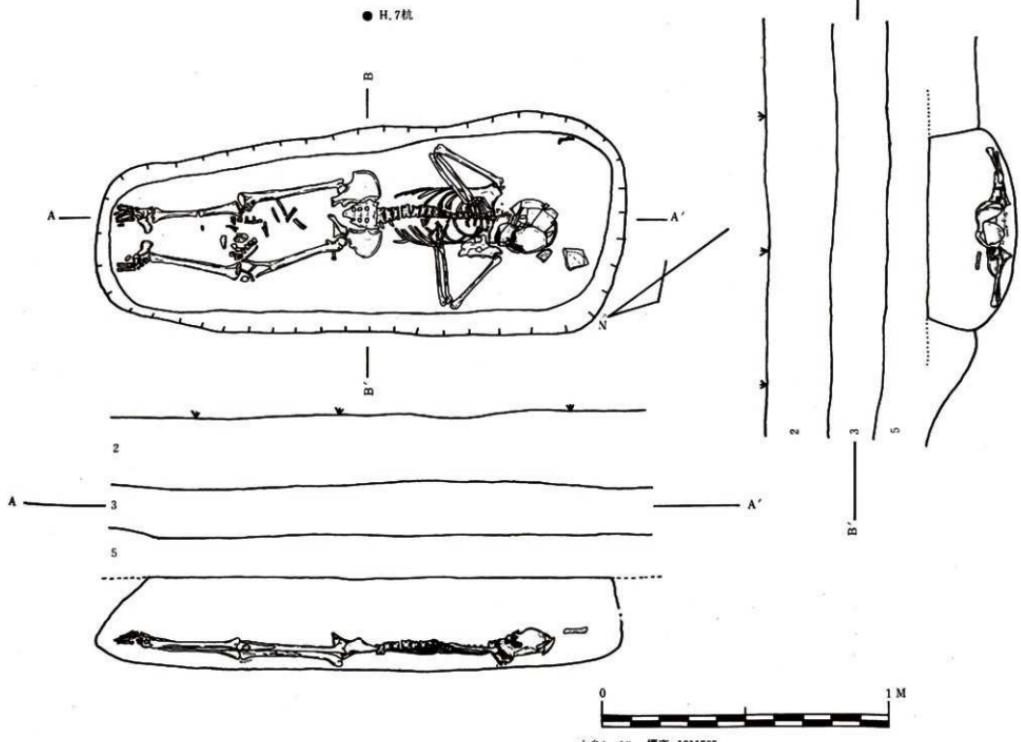
母子と思われる2個の遺体の合葬で、その方法もきわめて特色のあるものであった。

成人の遺体は土壇の中軸に沿って仰臥伸展の形でSW35°の方向に埋葬され、頭面は斜め左向きに位置し、両手は屈折して、右掌は胸部に、左掌は腹部に置き、両脚は伸しているが、左脚は僅かに屈折して膝関節部がやや外方へ移行している状態であった。骨の保存状態は良好で、鎖骨・肩甲骨・肋骨・骨盤・手骨・足骨など残りにくいものまで良く保存されていたが、右半身に比べれば左側はやや保存状態が劣っているのか注意された。

両脚の膝関節部の間には4個の礫と磨製の小形石器が配置され、これ等を除くと直下に嬰兒骨の埋葬が発見された。

成人骨は頭頂骨より腰骨まで、出土現場での計測では145cmで、身長は低いが骨格がきわめて華奢するために長身のような感じを与える。四肢骨の粗面は発達がほとんど見られず、生前労働に従事していないことを示している。年齢は20~25才の女性で、ガラス製丸玉2個、全小玉40個、骨製管玉4個を頸にかけたような状態で、右耳のあたりから後頭部へかけて出土した。

嬰兒骨は成人骨の両脚の間にはさまれて、被覆した4個の礫の直下から発見された。頭部を成人骨の左膝関節に接し、成人骨とは逆方向に脚部を成人骨の右大腿骨の半ばあたりに置き、やや右向きの姿勢で埋葬されていた。頭部から脚部までの長さ30cm、幅15cmの範囲に分布し、頭骨は平坦にひらいてあるが右側面にやや原形をとどめ、左上腕骨・尺骨・桡骨は胸のあたりに、肱の関節で浅く「く」字状に屈折して明瞭に認められ、両脚は大腿骨・脛骨・腓骨が左右ともにそろっており、右脚は上体と直角をなして前方にのばし、左脚は深く屈折してその上に重ねた状態であった。嬰兒骨の直上は4個の礫で、頭部から胸部へかけてすっぽりと覆われ、礫群に沿って長さ4.2cm、幅2.7cm、厚さ0.55cmの二等辺三角形に近い磨製小形石器が副葬されていた。



第24図 埋葬人骨図

水位レベル 標高 13M505

石器は直岩製で、円錐の剣片に加工し、側面を磨いて形をととのえ、両面ともに研磨し、三角形の底辺部分に両刃を付けたものである。一面には原石の球面が研磨後もなお残存して凸面をなすが、他の面は側面を研磨して平坦面を形成したものである。現在は石理に従って平坦面が剝離し凹面となっている。刃部に使用痕が見られる。

嬰兒骨については10カ月くらいの胎兒の可能性もあるとされているが、埋葬の状況から見て分娩後の処置と考えられ、合葬された両者は母子であって分娩によって死亡したものと考えられる。

両遺体は土壤床面に置かれ、嬰兒遺体の頭胸部を疊で被覆した後、主に土壤掘削によって生じた土を埋め戻し、成人遺体の上半身上に疊を配置し、この間に他地点より得た清浄な砂を撒布しているが、一部は土壤外にも及んで、この面が第4層中の土壤掘り込み面であることを証明している。
(骨については長崎大学内藤教授の教示によったが、誤りがあれば筆者の誤認に基づくものである)

葬身具

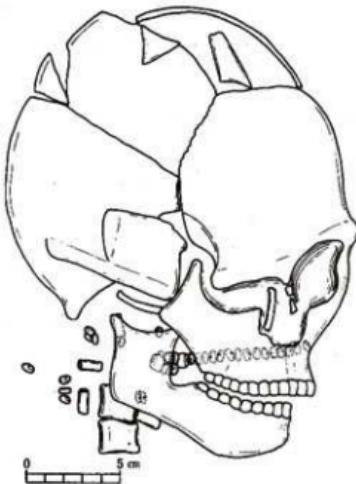
管玉・丸玉・小玉の出土状況

成人女性骨の下頸骨下から管玉1個、右肩甲骨と側頭骨との間に管玉3個と小玉12個が入れ込まれて出土し、内小玉1個は青色を呈した。

頭骨を取り上げた後、頸椎骨の下に丸玉2個と小玉拾数個が一定の配列をもって出土した。その状況は2個の丸玉の間に8個の小玉が4個づつ二列に並び、丸玉より左外側(被葬者の)では小玉が一列となって配列しているのが認められた。更にこの一列に配列した小玉の継続部分が、取り上げた頭骨の左脛部該当部に一列に並んで7個検出された(第25図、図版5左上)

玉類の出土状況は遺骨との関係を遺存した
きわめて稀な例である。腹部右側の小玉と管
玉は埋葬後、縦糸が切れ砂の圧力を受けて原
位置より多少移動しているが配列の推定は可
能である。頭部は原位置から動かなかつたも
のと見られ、腰部背面と左後側面では丸玉と
小玉が原位置をそのまま保っていた。ただ
頭部前面では玉類の発見はなかった。

着装は頸部の背面中央に小玉8個を2列に
分けて連ね、両端にそれぞれ丸玉1個を付け、
その外側では、右側は配列が乱れているが、
管玉と小玉の位置から見て、丸玉に続いて小
玉3個・管玉1個・小玉3個・管玉1個・小
玉4個・管玉1個・小玉2個・管玉1個の順
に交互に連繋して頸にめぐらし顎の下に連し
ていたものと考えられる。一方左側は玉の配



第25図 玉類着装状態図

列がそのまま保存されており、丸玉に統いて小玉のみ20個が連繋して頸にめぐらされているが、頸の下まで達せず、小玉にして5個程度の欠失が考えられる。

着装についての特徴は、2個の丸玉を小玉を挟んで頭部背面に相対して位置させていることである。立岩遺跡28号墳棺内でも丸玉が後頭部に着装されたものと推定され⁽²⁾、いずれも背面に丸玉の位置があるが、丸玉を背面にして着装する習習があったのかもしれない。

玉丸に統い連繋された玉は左右が対称で、右側では小玉と管玉が交互に連なるのに対し、左側は小玉のみを連ねるというきわめて特色のあるものである。

出土の位置から見てこれらの玉類は連繋して環状とし、頸にかけたもので頸飾と考えられる。玉類の出土総数は丸玉2個、小玉40個、管玉4個であるが、これを連繋すると、2列部分の小玉8個の長さを半分として、全長24.4cmとなる。玉の出土状況による推定では、連繋の糸の幅みが玉の全長の1.35倍～1.5倍とみられるから、玉を連繋した長さは33cm～37cmとなる。しかし玉の欠失を考慮すると、頸飾としての当初の長さは36cm～40.5cmであったと考えられ、着装した場合は前端はたれ下がることなく、頸環をはめた状態よりやや緩やかな程度であったろう。管玉の1個が頸の下から出土したことはこれを示すように思われる。

ガラス製丸玉・小玉

成人女性の着装していた丸玉および小玉は風化がはなはだしく、青色の小玉1個を除いて殆ど灰白色を呈し、表面より剥離して原形を失ったものも見られ、小玉は40個出土したが原形をとどめるものは31個であった。

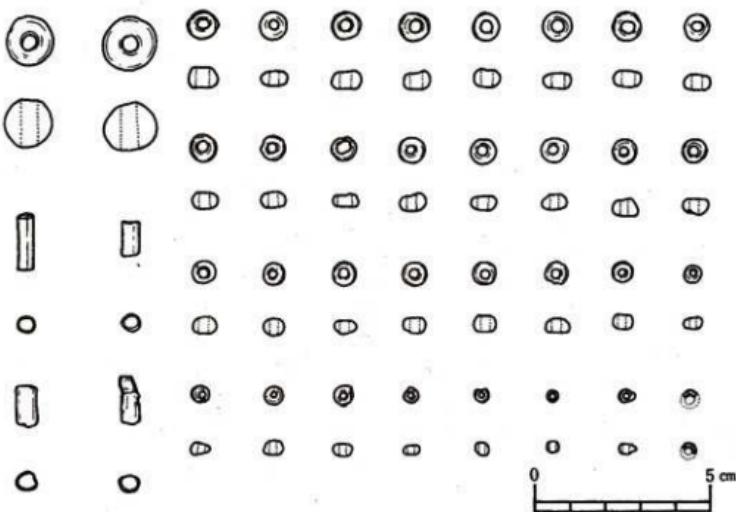
丸玉は径1.5mmと1.37mmで、共に高さ1.25mm、孔径4.25mmである。形は一端はやや平坦近く他端は尖り気味で、孔も平坦な端では橢円形を呈して大きく、尖った端では正円に近く小さい。

小玉の形は臼玉に近く断面は橢円形を呈し、径は8mm台から3mm台まであり、8～7mm台16個、6～5mm台13個、4～3mm台2個で径5mm以上が9.45%をしめている。

青色の1個は径5.75mmあり半透明で、同心円の脈理があり巻痕を示している。脈理にそって気泡が認められ、穿孔の内面には白色の粉末が付着している。

他の丸玉および小玉について見ると、風化して灰白色を呈しているが、心部に薄青色または薄緑色を残すものが数個見られる。粗面の剥離した部分は損傷光沢があり、孔を中心とした脈理を有し巻痕を示している。破損面は膜を重ねた状態を示し、膜状に剥離する。表面には気泡状の小窠が見られる。

丸玉および破損した小玉2点について、東京芸大保存科学部富沢威氏によってX線回折法による分析を行なって頂いた。結果は「鉛ガラス」ということであるが、現在尚分析続行中である。なお小玉の表面風化物について鹿児島大学地学部富田克利氏に分析していただいたところ、炭酸鉛ということであった。鉛ガラスのうちにふくまれている酸化鉛が石灰分の豊富な環境のために炭酸鉛に変化したものであろう。



第26図 人骨着装玉類

第3表 宇宿貝塚出土小玉計測表

番号	径 mm	高さ mm	孔 径 mm	形 状	色	光沢	巻 痕	小 穴	備 考
1	3.5	3.5	2.0		灰白色	鏡面度大	光沢なし	卷痕 同心円 脈理	なし 全周剥離
2	4.5	4.0	2.0		灰白色		光沢なし	卷痕 同心円 脈理	小窓あり 一部剥離
3	5.0	3.5	2.0		灰白色		光沢なし	卷痕	なし $\frac{3}{4}$ 側面 鏡化過む
4	5.0	3.75	2.0		灰白色		光沢ほとんど なし	卷痕 同心円 脈理	小窓なし
5	5.25	3.2	2.0		灰白色		光沢なし	卷痕 同心円 脈理	端から小窓あり 光面無
6	5.6	4.8	2.0		外灰白 内薄緑色	光沢みられず	卷痕あり	端から小窓あり 光面無	
7	5.75	3.75	2.4		青色			孔を中心の同心 脈理無	孔内面に白色粉状付着 気泡あり
8	6.2	4.3	2.25		灰白色		高光沢あり	卷痕 同心円 脈理	小窓あり
9	6.25	4.0	2.0		灰白色 銅鑄面薄 青味あり		光沢なし	卷痕あり 同心円 脈理	端から小窓みと められる
10	6.25	6.7	2.5		銅鑄面薄青味あり 灰白色		高光沢あり	卷痕あり	錐片状剥離小窓
11	6.55	4.9	2.65	横 円	灰白色		高光沢あり	卷痕あり	小窓あり
12	6.6	5.0	3.0		灰白色	高光沢光沢 光沢みわらし	卷痕あり	小窓みられず	
13	6.7	4.1	2.65	横 円	灰白色 一部剥離	高光沢があり	同心円 脈理あり	一部平滑 小窓	
14	6.7	5.25	2.5		黄青味ある白色	高光沢あり	卷痕(時)あり	光面平滑 小窓あり	
15	6.75	4.55	2.55		薄い青味ある乳白色	光沢あり	同心円 脈理あり	此面附か 小窓あり	
16	7.0	4.8	2.4	横 円	灰白色(裏) 青色のぞく(はげた所)	高光沢あり	卷痕あり	平滑 小窓	
17	7.0	4.8	3.0		灰白色 両青味を帶び る	高光沢あり	卷痕あり	平滑 小窓 (気泡感でなければでない)	
18	7.0	5.0	2.65		灰白色 銅鑄面薄青味 あり	高光沢あり	卷痕あり	小窓みられず	
19	7.15	4.55	2.6		灰白色	光沢光沢あり 母地細かげた所あり	同心円 脈理あり	柱状小窓	
20	7.15	4.75	2.75		外灰白色 内薄緑色	光沢あり	同心円 脈理あり	柱状小窓	表面無同心円状に薄度異なる
21	7.3	4.5	3.0	やや 横 円	灰白色	光沢あり	同心円 脈理あり	小窓わずかにあ り 褐斑平滑	
22	7.4	4.0	3.8	横 円	灰白色 銅鑄面薄青色	高光沢あり	卷痕あり	銅鑄面と薄小窓 錐片状剥離	
23	7.5	4.6	3.3		灰白色	光光沢あり	同心円 脈理あり	光面小窓	
24	7.65	5.3	3.5		灰白色	光光沢あり	同心円 脈理あり	光面小窓	
25	7.65	4.65	3.35		灰白色	光光沢あり	同心円 脈理あり	柱状小窓 横溝あり	(孔にも小窓)
26	7.65	5.25	3.5	横 円	灰白色	光光沢あり	同心円 脈理あり	同心円 脈理あり	ごく小窓あり 表面無
27	8.0	3.6	3.0		灰白色	光光沢あり	同心円 脈理あり	無	
28	8.2	4.4	3.6		灰白色	光光沢あり	同心円 脈理あり	無	
29	8.25	5.0	3.5		灰白色	光光沢あり	同心円 脈理あり	表面に柱状小窓 少なし	
30	8.4	5.0	3.6		灰白色	光光沢あり	同心円 脈理あり	表面に柱状 小窓	
31	8.5 ~7.9	5.8	3.5 ~2.8	横 円	灰白色	光光沢あり	同心円 脈理あり	柱状小窓	いちじく形

宇宿貝塚出土七丸玉計測表

1	13.7	12.5	4.25		灰白色	ほげた面 光 光沢あり		気泡状小窓あり	
2	14.8 ~15.0	12.5	4.25		灰白色	光光沢あり		気泡状小窓あり	

ガラス玉の製法には「吹きガラス技法」と「巻きつけ法」の二種類がある。吹きガラス技法は鉄の吹管につけたガラス糊を吹き延ばして棒状の細管を作り、之を截断して適宜の玉にするのである。一方巻きつけ法は細い鉄棒に粘土を塗って乾燥させ、これを回転させながら加熱したガラス棒を巻きつけていくのである。⁽³⁾

吹きガラス法によって作られたガラス玉は、ガラスの中に含まれている気泡が孔と平行に伸びており、巻きつけ法によって作られたガラス玉には、巻き痕が認められ、気泡は孔と直角の向きに伸びている傾向があると言われている。

前記の宇宙出土の玉について見ると、いずれも巻き痕が見られ、青色半透明の小玉には多くの気泡が認められ、孔と直角の向きに伸びていることが確認された。また小玉の穿孔内に付着していた白色の粉末は、小玉を製作する際に、ガラスの固着を防ぐために鉄棒に塗った粘土が、孔の内面に付着残存したものと思われる。したがって宇宙出土のガラス玉は巻きつけ法によって製作されたものと言える。

日本出土のガラス製品では、最も古いものは弥生時代前期で、山口県土井ヶ浜遺跡で石囲中の遺骸が着装していた空色の小玉只一個であるが⁽⁴⁾、主要な出土は弥生時代中期以降に多く見られるようになる。しかし中期においても北部九州から瀬戸内海沿岸に限られる。後期になってようやく分布圏も拡大し、北は岩手県常盤広町遺跡から、南は鹿児島県広田遺跡までガラス製小玉の出土を見るに至り、出土量も飛躍的に増大することになる。このうち濃密な分布を示す地域は、筑紫野平野・畿内の一部・対馬の浅茅湾周辺などで、弥生文化の中核部、あるいは地理的位置の特殊性によるものであろう。

弥生時代中期のガラス製品として注目されるものに、三雲遺跡・須恵岡本遺跡から出土したガラス製壁や、須恵岡本遺跡・立岩遺跡から出土した塞杯状ガラス器がある。いずれも船ガラス製で当時中国で盛行した特殊な器物であって⁽⁵⁾、大陸からの舶載品とされている。中期から後期にかけて見られるガラス製勾玉については、勾玉の鉄型が北部九州・春日一帯・大阪東奈良遺跡などから発見され、福岡県弥水原遺跡出土の勾玉鉄型の付着物から鉛バリウムが検出されたこと、この時代日本以外の土地では勾玉は発見されていないこと、などを理由として、弥生時代中期に大陸から輸入されたバリウムを含む船ガラスを原料として国産されたというのが諸家の一致した考である。

その他の管玉・小玉などについては、どこで作られたかについて説が分かれて一致しない。

小玉について見ると、「東洋古代ガラス」⁽⁶⁾によれば、弥生時代中期段階では北部九州から瀬戸内沿いの範囲に限られ、銅によって着色された青色系統を主体とし、分析によればアルカリ石灰ガラスであるという。

後期になると分布圏が拡大するとともに、北部九州等では色も赤色（塔ノ首2号棺出土小玉）白色（宮ノ前C1号棺出土小玉）など多様化する地域もあるが、やはり銅着色の青色系統が大勢を占め、材質も分析されたものはすべてアルカリ石灰ガラスであるといわれている。

小林行雄博士によれば、弥生時代の小玉はアルカリ石灰ガラス製で、吹きガラス技法による製品であり、この技法が日本に伝來したのは古墳時代であるとし、弥生時代の小玉は大陸よりの舶載品

であるとされている。⁽⁷⁾

管玉については、佐賀県桜馬場遺跡出土のガラス製管玉について杉原莊介博士は「長さ2.2cm、径0.7cm、孔径0.3cm、中央部の怪幅がやや狭い。緑色を呈し、あまり風化していない。腹部に螺旋状の筋が見えるから、心棒にガラス原料を練り巻いていたものと思われる。藤田収人博士によれば、かなり比重が大きいから、船ガラスと断定してよいであろうとのことである。」⁽⁸⁾と述べ、また同遺跡出土の小玉が日本製であるとし、更に「日本製の玉類、ことにガラス製のものが伴っていることは、……」⁽⁹⁾と述べて共に国内で造られたとする意が伺える。

藤田等氏は立岩遺跡出土のガラス製玉類について、ガラス製勾玉の国産を説いた後、弥生中期にバリウムを含む船ガラスが原料として舶載され、再加工によって玉類を含む装飾品が製作されたとし、立岩の管玉は外形・孔の大きさ、貫通の仕方からすると、一応鉄型による製作と考えられる。その際1個ずつ製作されたというより、数個を1単位として製作し切断したのであろう。棗玉・丸玉も輸入原料の再加工という範囲での国産といえるとしている。⁽¹⁰⁾

弥生時代後期にはガラス製小玉の生産が飛躍的に増大し、中でも対馬の浅茅湾周辺では多くの遺跡から大量のガラス製小玉の出土が知られている。塔ノ首遺跡は浅茅湾からやや離れているが、第3号石棺から出土したガラス製小玉は、副葬された銅矛2個、銅劍2個と共に、副葬の小室内に2,859個、棺内に5,027個、半欠品250個総数8,236個の大量におよび、弥生時代のガラス製小玉一括出土数で最高値を示して注意される。これについて藤口健二氏は、「北部九州において後期には確実にガラス製品の生産が確かめられており、塔ノ首第3号石棺出土のガラス小玉は、対馬の他の石棺出土品とともに、逆規定的に北部九州における後期前半期の生産の状況を解明する端緒にもなろう」⁽¹¹⁾と述べて、弥生時代後期前半期に、北九州におけるガラス製小玉国産の活況を示唆している。

以上に述べて来たところによってわかるように、日本においては弥生時代中期に、一部の舶載のガラス器を除き、大陸より輸入された船ガラスを原料として、すでに勾玉・棗玉・管玉・丸玉などのガラス製玉類を国産はじめたと見られる。

ガラスの成形法としては、吹きガラス技法は古墳時代に伝來したとし、巻きつけ法は更に遅れたとする考え方がある一方、弥生時代後期にはすでに巻きつけ法による製造が行なわれたとする説がある。

またガラス製小玉については、材質はアルカリ石灰ガラスであり、吹きガラス技法によって製作されたものが、大陸から舶載されたとする説がある一方、北九州において大量に国産されたとする説がある。

昭和53年9月、岡山市百間川遺跡において、弥生時代中期の三個の土壙から、珪素と酸化アルミニウムを主成分とするソーダガラスの溶融窓が発見された。ガラス工房の関連遺構と推測されている。これによって弥生時代中期の素材が船ガラスだけではなく、すでに硬質ガラスの製造技術が存在していたことを示している。アルカリ石灰ガラスによる小玉の製作も国内で行なわれたと見てよいのではなかろうか。弥生時代後期に増大したガラス製小玉の説明も、国内産と見た方がより良く

できるように思われる。

一方桜馬場遺跡における鉛ガラスを素材とした、巻つけ法による管玉の存在から、同じく鉛ガラスを原料とする巻つけ法によって小玉が製作されることもあったと考えられる。

宇宿出土のガラス製小玉は宇宿上層式の時期に属する。宇宿上層式は弥生時代後期に該当するものと考えられるから、弥生時代後期のガラス製小玉の南限は、広田遺跡から更に南に延長されたことになる。

骨製管玉

ガラス製玉類と共に出土したもので、4個検出された。黄褐色または黒褐色を呈する。1本の管状の骨を4個に截断して製作したもので、骨の基部にあたるものから末端にあたるものへ、順に長さは1.1.4.5 mm, 1.1 mm, 1.6.1 mm, 1.6.1 mm, 径は6 mm, 5.5 mm, 5.3 mm, 5.1 mmと基部より末端へ次第に細くなっている。断面は橢円形を呈し一端には溝状のくぼみがあるが、末端部では溝を消失している。管玉に骨を用いたことは地域性のあらわれであろう。

埋葬についての考察

宇宿の埋葬法は配石墓の類に入るものであろう。土墳を袋状に掘っていることは、砂丘地であるだけに奇異の感があるが、袋状の貯蔵穴も何ヶ所か発見されており、旧砂丘上面までであれば、垂直に掘って崩壊することはなかった。おそらく石灰分が凝固するからであろう。

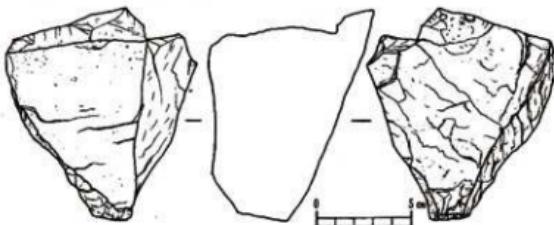
土壤上の配石も不完全なもので、土壤の上面を一列に半周する程度のものであるから、標識としての意味が大きかったかもしれない。

嬰兒については、上半身を四個の縁で直接被覆したのは、如何なる意図であろうか。

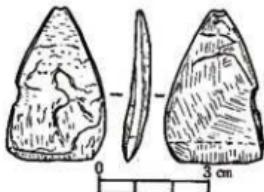
縁を遺物の上に直接置いた例としては、出土貝塚の埋葬例がある。2号・3号・4号人骨は縁によって完全に被覆されており、ことに2号人骨の場合は、除いた縁に骨の一部が付着している状態であった。しかし黒土層まで深く掘って埋葬してあった1号人骨の場合は、縁で遺骸を被覆するなどの処置は全然とられていなかった。⁰⁹

死體の彷徨を恐れて、封じ込めをはかったことを示す適例である。深く埋葬された1号人骨の場合には、埋め土が縁のかわりになると考えられたものであろう。

宇宿の嬰兒の場合は、死體の恐怖から来た処置と見るには疑問が残る。もし死體恐怖の処置ならば、嬰兒にはその必要がなく、むしろ成人女性にこそ、縁による被覆が必要ではな



第27図 婴兒覆石に用いた石皿破片



第28図 磨製小形石器

かたかたか。この場合外に理由がありそうである。

福岡県芦屋町山鹿貝塚の縄文後期の埋葬に、2体並んだ成人女性骨の間に、胸部のあたりに挟まれて乳児骨1体が出土した例がある。成人骨は共に両腕に多数の貝輪をはめ、特に20才そこの女性は、耳飾・大珠・鹿角の垂飾を着装し、特異な身分、職能をもった人と考えられており、しいていえばと併し書きがつくが、乳児の母親と推定されている。¹⁹

この場合、母親の女性は、おそらくその集団の指導者ないし司祭者であったと思われるが、その胸に抱かせるような格好に葬った埋葬者達には、乳児を「保護」する意図があったと思われる。

宇宿の場合も、碟によって被覆したのは「保護」の意図によるものであったろう。嬰児の胸に、石皿破片の磨耗面を接するように置かれていたことが、この事を説明するように思われる。母体の同時に埋葬したこと、同様な意図の現われであろう。同時にこの埋葬状態は出産の形をそのまま残したものとも思われ、成人女性と嬰児が母子であることを推定させる。

嬰児に対する副葬品とした磨製小形石器は、嬰児骨を被覆した碟群の東側7~8cmの地点に、碟群上面のレベルから出土したものである。嬰児の頭部の右側に沿うように置かれたものである。嬰児の遺骸よりやや上位にあるが、副葬品と見られる。

弥生時代のガラス小玉の出土例をひろってみると、福岡県須恵岡本遺跡（弥生中期）の壺棺14号に、青色の小玉38個、佐賀県桜馬場遺跡（弥生後期）の壺棺から藍色の小玉1個、同三津永田遺跡石蓋单棺（弥生後期）から数拾個、岩手県常盤遺跡塗穴（弥生後期）から2個、静岡県登呂遺跡（弥生後期）から計6個、長崎県対馬タカマツノダン遺跡の箱式石棺から200個余り、このうち20個は径1.8~0.4cmでかなり大きなものが出土している。

福岡県三雲遺跡1号壺棺（弥生中期）一括、同二子塚遺跡（弥生後期）39個、佐賀県上峰村（弥生後期）2445個、長崎県対馬塔ノ首遺跡（弥生後期）2号棺1421個、同3号棺8236個、千葉県諸西遺跡2号方形周溝墓（弥生後期）120個、長崎県対馬黒木南鼻遺跡箱式石棺（弥生後期）1047個、同下がヤノキ遺跡E地点石蓋土壙771個、宮崎県大荻遺跡（弥生後期）4号土壙580個、同6号土壙丸玉1個・小玉60個、中央扁平な自然石付近59個などである。後期に著しく増加し、範囲も拡大するが、中核は北九州にあり、中でも対馬にまとめて多く出土するのが目立っている。

ガラス製玉類が、連珠として身体に着装されたことが、確実になるのは弥生時代中期で、福岡県立岩遺跡（弥生中期）28号壺棺からガラス製管玉553個・丸石1個・壺玉1個・壺杯状ガラス器5個が、着装の状態を推定できる連珠のままの形で出土した。²⁰女性の強飾とされている。

弥生時代後期には、着装部位の判明する数も増加している。三津永田遺跡石蓋单棺の遺骸頭部上り小玉數十個、対馬塔ノ首2号棺²¹、ガラス玉類は胸から頭にかけての位置に散乱、福岡市宝満尾遺跡15号土壙墓、頭部位に小玉540個、首にかけたものと推定²²、福岡県門田遺跡辻田地区石蓋土壙墓、頸部付近から180数個の小玉が数条をなし、両耳部付近に数百の泡玉が環状で出土。²³以上

のように着装部位の判明した例は北九州に限られた感があり、ガラス製玉類を着装する慣習が形成されたのもまた北九州地域であったと考えられる。

対馬塔ノ首3号石棺の被葬者は女性であったと推定されている。副葬品には広形銅矛2, 銅劍7, 玉製管玉1, 丹, ガラス製小玉8236, 土器等が出土している。⁽⁴⁾この中、注意されるのは、広形銅矛が副葬品として取扱われていることと、ガラス製小玉が着装の状態でなく、容器に収蔵した状態で副葬されていた事である。

広形銅矛が副葬された例は、長崎県佐賀・クビル 箱式石棺、福岡県岩崎・熊野神社境内 箱式石棺などがあるという。共同体社会の祭器として、公的な器物と考えられた広形銅矛が、個人の副葬品として取扱われたことに驚きを感じるのであるが、これを祭器同様への過程におきた一現象として把握することもできると思うが、この時期は社会自体の内面的変化の激しい時代であり、社会の内部構造の変革推移によっておこった現象とも見られる。端的にいえば被葬者の女性は、新しく生れた共同体社会を象徴する公的身分の人であったろう。そういう意味での司祭者ということができると思われる。したがって、副葬された広形銅矛は祭器であることにかわりはなかったと思われ、壺に入れたガラス小玉も祭器としての性格をもっていたのではなかろうか。

宮崎県大荻遺跡では、土塙墓群のある墓域の中央地点に、縦75cm、横35cm、厚さ10cmの平坦な自然石が配置されており、祭祀場と推定されている。⁽⁵⁾この自然石の付近にガラス製小玉59個が出土している。このガラス製小玉は祭器としての性格をもつものであったと考えられる。

弥生時代の被葬者について見ると、遺骸が残存していて、玉類を連珠の状態で着装したものは殆ど見ることができない。玉類出土の部位によって着装状態を推定するにとどまる。

宇宿貝塚の被葬者は、遺骸の頸にガラス製丸玉、同小玉、骨製管玉を連珠として着装した状態で出土したまれな例である。立岩遺跡28号墳の被葬者、塔ノ首3号石棺の被葬者はいずれも女性であり、その属する共同体社会の指導者あるいは司祭者であったと考えられる。宇宿貝塚の被葬者も、北九州地域に発生した、ガラス製玉類を身体に着装する指導者層の慣習を、導入した指導者であり、その属する共同体社会の司祭者であったと考えられる。(河口)

註

- 三宅宗悦 “南島の先史時代” “人類学先史学講座16” 昭和16年 雄山閣
- 立岩遺跡調査委員会 “立岩遺跡” 1977年 河出書房新社
- 小林行雄 “統古代の技術” 昭和39年 塩書房
- 金関丈夫・坪井清足・金関恕 “山口県土井浜遺跡” “日本農耕文化の生成” 日本考古学協会編 昭和36年
- 東京国立博物館 “東洋古代ガラス” 1978年
- 註5)と同じ
- 註3)と同じ
- 杉原花介・原口正三 “佐賀県桜馬場遺跡” “日本農耕文化の生成” 日本考古学協会

昭和36年

9. 註(8)に同じ

10. 藤田等 “裝身具” “立岩遺跡” 1977年 河出書房新社
11. 藤口健二 “第3号石棺とその遺物” “対馬” 長崎県教育委員会 昭和49年
12. 河口貞徳 “出水貝塚” 鹿児島県文化財調査報告 第5集 昭和33年
13. 国分直一氏教示
14. 河口貞徳 昭和36年発掘
15. 河口貞徳・旭慶男・最所大輔 “下小路遺跡” 鹿児島考古 11号 昭和51年12月
16. 永井昌文他 “山鹿貝塚” 山鹿貝塚調査団 昭和47年3月
17. 註(2)に同じ
18. 金関丈夫・坪井清足・金関恕 “佐賀県三津永田遺跡” “日本農耕文化の生成” 日本考古学協会 昭和36年
19. 真野和夫 “第2号石棺とその遺物” “対馬” 長崎県教育委員会 昭和49年
20. 山崎義治 “宝満尾遺跡” “福岡市埋蔵文化財報告書” 1974年
21. 井上裕弘 “山陽新幹線関係埋蔵文化財調査概報” 福岡県教育委員会 昭和50年
22. 註(1)に同じ
23. 小田富士雄 “対馬” 長崎県教育委員会 昭和49年
24. 田中茂 “第10号土墳墓” “大荻遺跡1” 宮崎県教育委員会 昭和50年3月

2 遺 物

■. 人工遺物

(1) 土 器

第1地点

第1地点は遺跡の中心部を占め調査面積も最も大きく、全調査面積の6.7%に当る。遺物は南島の土器を主とし、縄文式土器・弥生式土器を共伴し、須恵器・青瓷・陶磁器まで出土する。南島土器は宇宙上層式と宇宙下層式に大別されてきたが、更に細分した型式分類が行なわれている。⁽¹⁾ 宇宙上層式と宇宙下層式とは文様の有無・器形などを主として分類の規準とされてきたが、胎土・焼成・調成法などにも明瞭な差異のある事が判明し、従来は文様があるために宇宙下層式に属していた喜念I式なども、胎土・焼成・調成法では宇宙上層式に類し、分類にも問題のあることを示している。

一般的に宇宙上層式土器は胎土が細かく砂粒を混ぜず、なで仕上げでまれに箒削りも見られ、焼成は良くなく、軟弱で器面は粉質を呈し、破損面は磨耗しやすい。土器の質には土師器に似た面が見られる。色調は黄褐色を呈するものが多く、器形は壺形と甕形に分かれ、壺形土器は丸底、甕形土器は平底のようである。口縁は平坦なものと波状のものとがあり、なかには複雑な形の把手を有するものが見られる。

宇宙下層式土器は胎土に砂粒を混ぜ、器面調整に貝殻縁などを使用して条度をのこすものが多く、上層式に比べ焼成も良好である。器形は深鉢形平底であるが、型式によって尖底または丸底をなすものがある。色調は褐色または黒褐色を呈するものが多い。

土器の層位的出土状況を明らかにするために、第4層を欠くX-7区よりJ-7区までの西側部分と、旧砂丘の黄白色砂層に達するV字溝のあるM-8区・M-9区との出土土器を除いた残りの資料を用いて第1表を作った。これによると従来の編年⁽²⁾と、傾向として一致することがわかる。とくに注意される点として、前に述べた胎土・焼成・調成法など製作技術の面で宇宙上層式に近い喜念I式が、層位から見ても近縁関係にあること。弥生式土器が宇宙上層式とある時点で一致することが推定されること。平底は宇宙下層式と宇宙上層式のいずれにも存在すること。宇宙上層式は口縁部の変化によって時期的差異があまりないこと。丸底系統の底部は宇宙上層式に密接な関係をもつていることなどが挙げられる。

土器の編年上、確実な資料として造構に関連して出土した土器が挙げられる。宇宙上層式に関する造構として、I-7区6層の石組造構がある。この造構内から喜念I式(第53図:1・2)と宇宙上層式とが共伴出土しており、M-6区、M-7区6層の石組住居面では宇宙上層式が多く確認されて第6層の時期決定の資料となった。

M-5区7層の敷石状の集石遺構からは市来式土器（第33図：1，第71図：2）と市来式の影響を受けた面縄東周式土器（第34図：3，第71図：1，第30図：復元）とが共伴出土して両者の関係を嘉徳遺跡⁽³⁾に統いて再確認することになった。

更に上記の集石遺構の下部の第8層から、貝縁条痕を有する土器1片と平底片1個（第55図：1～12）が出土して、縄文後期の市来式土器より更に古い時期の土器が、宇宙貝塚に存在することを証明した。

O-7区、P-7区にまたがって第7層に検出された第3号貯藏穴では、上層に凹線文土器（第61図：1～4）を出土し、下層に市来式の影響を受けた面縄東周式（第62図A：1～3）を出土して両者の関係が明らかになった。

本遺跡出土土器の型式分類は「嘉徳遺跡」⁽⁴⁾の分類に依ったが、面縄東周式の中に、市来式の影響を受けていることが明瞭なものが、相当あることが明らかになった。取扱いこの種類の土器を「面縄東周十市来」として分類することにした。この他沈線文を有する土器で、従来の型式のいずれにも該当しないものがあって、しかも一定の規格性がみられず、一つの型式を成すか否かも不明な一群がある。一応これを「線刻文」として一括した。

宇宙上層式土器は口縁部に種々の変化があり、あるいは型式分類の可能性もあると思われたので、その形状に従って、肥厚・三角・肩鉢・舌状・直口・外反・く字の7種類に分類した。これは必ずしも型式を意味するものではない。

嘉徳遺跡出土の土器中に、胎土に滑石を混ぜたものが若干発見されたが、今回の宇宙貝塚調査では、発見数も増加し、滑石混入の割合も多い。しかし滑石を胎土に混ぜることが奄美本来の技法か否かなど検討の要がある。一項としてあげた。

次に土器の型式あるいは便宜上設けた分類に従って述べる。

市来式土器

（第33図：1～3・5～13、第71図：2、第77図：3・17・21）

市来式土器は昭和30年に本貝塚に於て、縄文式土器として最初に発見され、その意義が大いに喧伝された。その後沖縄県那覇市貝塚、鹿児島県嘉徳遺跡でも発見され、後者では面縄東周式との共伴関係が明らかにされた。今回もまたM-5区7層の石組遺構中で共伴出土し、その関係がいよいよ確実なものとなった（第71図：1・2）。今回出土した市来式土器は12片11個体で、第33図：6と9は同一個体である。D-7区～P-7区、M-4区～M-6区で東西16m南北6mの範囲、遺跡の北よりの地域から出土している。器形はいずれも波状口縁である。第33図：2の土器は山形隆起部で裏面にも爪形文を施している。口縁部の三角形に肥厚した文様帶には、三ヶ月状の凹点はじめると太めの浅い凹線を、平行に2条横走させ、上下に爪形連点を施している。凹線間には貝殻縁によく押紋の見られるものが多い。第33図：2・8・10は文様帶外にも施文が見られる。口縁断面は「く」字形を呈し、市来式としては若い部類に属する。胎土は砂粒・雲母を混ぜ、内外面ともに貝殻条痕を有する。南九州よりの移入品であろう。

類市来式土器

(第36図: 1・6~13, 第37図: 1~16, 第41図: 9~14, 第61図: 10)

嘉徳遺跡の報告書では、いわゆる類市来と市来式の影響を受けた面縄東周式を含めて、類市来としている。この両者は時期的にはあまり変わらないと思われるが、成立らがことなるもので、面縄東周十市来は奄美において作られた土器であり、類市来式は南九州に由来するものである。今回の調査によって両者はそれぞれ量も多く出土し、分類すべきものであることが判明した。類市来式は南九州の草野式にも近い要素をもつように思われる。

器形は深鉢または腹部の張った浅鉢で、底部の確認はできていないが、平底に終る器形と考えられる。口縁部は断面が厚い三角形か、口唇部が幅の広い平坦面をなし、あるいは膨隆して舟鉢形をなすもので、文様は口縁部上面又は外面に、太い斜線を刻目のように連続して施すもの、あるいは口唇部にそって太い凹線を1条乃至2条施すもので、これにハイ貝殻の貝殻縁を押圧した文様を加えたものもある。

第41図: 11・13・14は皿形土器である。中空の器台がつくと思われるもので、このような皿形土器は市来式・草野式にも伴うもので、祭器と考えられる。

胎土は砂粒を多く含み、貝殻条痕が土器の内外面に施されている。焼成は良好で色調は黒褐色または黒褐色である。大部分は南九州よりの移入である。

面縄東周式

(第38図: 1~11, 第39図: 1~17, 第40図: 1・11~14・16・20, 第41図: 2, 第46図: 24, 第61図: 12, 第77図: 4・7・13・18, 第29図)

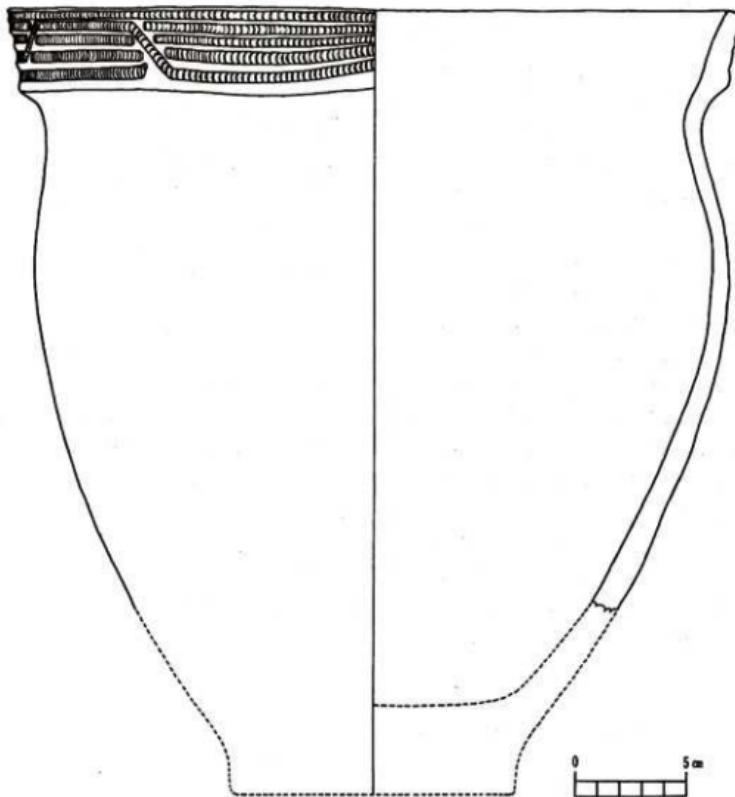
平底深鉢型の器形を主とするが、中空の脚台を有する二重口縁土器⁽⁵⁾もある。脚台付皿形土器の存在することも明らかになった。

口縁部がわずかに肥厚し幅の広い文様帯を形成する。文様は三条一束の凹線を籠編状に組み合せたもので、覚を用いて押し引きにより凹線を施文している(第38図: 1~5, 第39図: 5・6・8~11, 第40図: 1・5・8)。

籠編状の組み合せ文様が直線化したものも見られ(第38図: 6~11, 第40図: 11・12), 器面に粘土紐を籠編状に付着し、その上に押し引き文を施したもの(第39図: 1~4)もあって、文様の起源と定形化の過程をよく表わしている。第39図: 14の土器は文様構成に他の要素がはいったもので、本来の籠編み文様から離脱している。また口唇部に押し引き文を施すものもみられる。同図13・15~17の土器は皿形土器の一部で、脚台の付く器形と思われる。市来式の皿形土器の影響を受けたものと考えられる。第46図24の土器も皿形である。第29図の土器は脚台であるが、粘土紐を組み合せ、その上に押し引き文を施したものである。4ヶ所の透かしを有する



第29図 面縄車洞式脚台



第30図 面縄東洞十市来式（融合型式）

入念なつくりである。底面を有する点は市来式の皿形土器と異なる点である。

第40図：1の土器に継ぎ位の粘土帶貼付が見られるが、同位置の裏面にもあり、土器作成の途中に乾燥の段階でひびわれを生じ、補修したものである。施文した上に粘土帯が付着しているのがわかる。

胎土は砂粒を含み、45片中雲母を含むもの1列を認めた。貝殻による器面調整を行なったものが半数を越えている。焼成は割に良好で、器壁の薄いものが目立つ。色調は灰褐色または黒褐色である。市来式を伴なう。

面縄東洞十市来式（融合型式）

（第30図、第33図：4、第34図：1～9、第35図：1～21、第36図：2～5、第38

図：12・13、第40図：2・3・9・10・15・17、第41図：3・5、第42図：3・4、第44図：1～3、第62図：1～3・7、第66図：25・26・31・32、第67図：8・11～14・17・21、第73図：10、第77図：1・5・6・10・11・12・16）

市来式の器形文様の要素をもつ面繩東洞式である。種々の段階があって、毫美で作られた市来式と呼ぶ方が適切なものから、わずかに市来式の要素を用いたものまで種類が多い。器形は口縁部がやや外反し、頬部でつまり、頬部はわずかに張り平底に終る器形で波状口縁と平坦な口縁とがある（第30図）。口縁断面は三角形を呈し肥厚部が文様帯をなす点は、全く市来式そのままである。器面調整の貝殻条痕をのこし、雲母を胎土に混ぜる等作成の過程まで市来式の手法が取り入れられている。文様では深い凹点にはじまる凹線文（第33図：4、第34図：5・9、第35図：2・11・17、第38図：13、第66図：30、第67図：13、第77図：6）、貝殻压痕文（第34図：1）、山形隆起部の裏面の連点文（第33図：4）など市来式の文様が取り入れられている。一方面繩東洞式の特徴である押し引き文を加えることを忘れない。文様構成の上では籠編の基本的なものは用いず、直線化した段階のものか、市来式の文様構成とミックスしたもののが使用されている。

面繩東洞式では、文様帯の外まで文様を施すことはないが、この型式では、市来式の若い型式と同様に、施文帯の外まで施文したものが見られる。

第44図：1～3の土器は他の要素をもつ土器で異質的であり、注目すべき土器であるが、一応この分類に入れておいた。第36図：17の土器は皿形土器の破片である。

墓術IA式土器

（第42図：1・2・5～19、第43図：1～22、第44図：17・19・20、第47図：12、第66図：28、第69図：1）

面繩東洞式の押し引き文様を縁どりする形で、沈線が施されたものである。基本的な籠編目状の文様は次第に直線化・形式化して、籠編文に類似した沈線文の間に押し引き文が施されたもの（第42図：1、第43図：16～19・22）、平行沈線文に段落ち部によって籠編状文様の名残を有し、この沈線間に押し引き文を施したもの（第43図：1～4・6～15・20・21）、更に上記の文様帶の下に複数の沈線による籠編文を付加したもの（第42図：13・16～18）などがある。これらの文様は、沈線間が間のびして、押し引き文も、凹線内に刻目を画く文様から、凹線が消えて連点状に変化し、基本形の籠編状から次第に遠ざかり、単なる文様と化していくのである。口唇部に押し引きを付したもの（第42図：1・4、第43図：16）裏面に施文したもの（第42図：1）などがある。

器形は深鉢形平底で、口縁部がやや肥厚して文様帯を形成する。波状口縁で、山形隆起の両側に段落ちのあるものもある（第42図：1）。胎土に砂粒を混じ、わずかであるが雲母を混ぜたものもある。まれに貝殻条痕を有するものが見られる。焼成は普通で色調は黒褐色または褐色である。

墓術IB式土器

（第44図：4～16・18）

嘉徳ⅠA式に比べ器壁が厚く、口縁部の文様帶が肥厚して頸部に段をつくるという特徴を失なう。口縁部の山形隆起の段が発達して3個の突起をなすものが多い。文様は横位の平行沈線間に、階段状の縱線を沈刻して、籠編状の名残を示す。平行沈線間に連続して爪形文を施す。下部に鋸齒文を付けることは嘉徳ⅠA式と同様である。口唇部に刻目を施すものもある。深鉢形平底の器形で、胎土は砂粒を含み、焼成は普通である。色調は褐色または黒褐色を呈する。

凹線文土器

(第46図: 1~5・8~11・13~18, 第61図: 1~4・6~8・9, 第62図A: 4~6~8, 第66図: 30, 第78図: 4)

面繩束洞式に類似するもので、押し引き文様を失なったものである。籠編文様を主とし、波紋文の中に押し引きの痕跡を残すもの、口唇部に押し引文を施すもの(第46図: 3, 第78図: 4)など漸移形態がみられ両者の関係を示す。器形も面繩束洞式に類似し、また口縁部断面が三角形を示すもの(第46図: 11~20, 第78図: 4)もあって市来式との関連のあることも認められ、一方、口唇部に刻目を施すもの(第46図: 19)もあって他の要素も加わっていることがわかる。胎土は砂粒を含みまれて雲母を混ずるものもあるが微量である。貝殻条痕もまれに見られる。焼成は普通、色調は黒褐色である。面繩束洞式に近い時期にあることは、O-7区、P-7区にまたがる第3貯蔵穴から上下關係をもって出土したことでもわかる。

嘉徳Ⅱ式土器

(第45図: 1~5・7~22, 第46図: 6~7・12~19~21, 第47図: 1~11・13~17・20~23, 第49図: 19, 第56図: 7, 第66図: 24)

深鉢形平底の土器で波状口縁・平坦な口縁の他、把手状の凸起のあるもの(第47図: 15, 第45図: 21)も見られる。口唇部に連点又は刻目を有するものもある。口縁部がわずかに肥厚して文様帶を形成するものと、文様帶を失なったものとがあり、文様は一般に線が細くなり、細線を施したもの(第47図: 15~17, 第56図: 7)もある。籠編状・波紋状・格子状などの文様を有するが、籠編状では曲線化が目立つ。第45図: 1の土器は器壁の薄く貝殻条痕を有するものであるが、口唇部より1.2cm下位に、径2.6mmの円孔が2.5~2.3cmの間隔で3個穿孔がこころみられ、内左側の2個は貫通し、右側の1個は表面のみで、裏は穿孔をこころみられた部分の粘土が膨隆している。この孔は土器製作中に、文様を施した直後、まだ器壁がかたまらない時に穿孔したもので、嘉徳遺跡出土の土器にも同様の穿孔が認められている。用途は不明である。胎土は砂粒を含み、焼成は普通、色調は黒褐色である。第47図: 8の土器は胎土に滑石を混じている。嘉徳遺跡においても、この型式の土器に滑石を混じたものが発見されている。

縫刻文土器

(第61図: 5~11・13~15~17, 第67図: 4~5~9~10, 第77図: 8~9~

14・19・20、第78図：2・3)

細目直線を沈刻した文様をもつ土器である。いずれの型式に属すか決定しかねるものを集めて記載することにした。胎土・焼成・色調より見て宇宙下層式に属することは明らかである。第1表の層位から見るとかなり古い時期になるようである。今後新しい資料の増加を待って研究すべきものと考える。

面縄西周式土器

(第48図：1～19、第49図：1～6・8・9・12～18・20・21、第47図：2・3・7、第78図：5)

脣の張りが少なく直口の深鉢形平底の土器であるが、口縁部が僅かに内傾するもの、あるいは外反するものもみられ、口縁部の平坦なものと波状口縁がある。口縁部外側と、口縁下に太めの薄鉢形または帯状の凸帯をめぐらし、更に上下の凸帯を縦位の凸帯で4ヶ所結び、その上端を焼成後穿孔したものもある。

凸帯には鋸歯状または櫛形状の平行沈刻線を施し、凸帯には種々の凹点が連続施文されている。口縁上面には沈線を1条めぐらすもの、または連点を施すものがある。

土器面の調整は刷毛状工具を用いるものと、貝殻を用いたものとがあり、胎土には砂粒・雲母等を混ぜたものと、砂粒などを混ぜず粒子の細かな粘土を使用し、宇宙上層式に近いものとがあり、色調にも黒褐色のものと、黄褐色のものとがあり、硬質と軟質の二通りの土器が見られる。

第48図：3の土器は胎土に雲母と滑石を混ぜたもので、嘉德Ⅱ式と共に滑石を土器製作に使用することが行なわれたようである。

面縄前庭式土器

(第45図：6、第50図：1～22)

深鉢形丸底又は尖底で、脣部の張る器形である。口縁部と頸部に刻目を施した細い凸帯をそれ1条めぐらす。凸帯の刻目には2又の半截竹官状の工具を用いて特徴のある文様を施したものもある。上下の凸帯間に縦または斜方向に刻目凸帯を貼付けたもの、口縁部の凸帯を波状に貼付けたものなどがある。上下の凸帯間に数条の沈線を鋸歯状に、凸帯下には同様の沈線を底部近くまで施文している。口唇部に刻目を施したものもある。胎土に砂粒を含むものと、含まないものとがあり。雲母または滑石を混ぜたものもある。器壁の薄いものと普通の厚さのものがあり、一般に胎土の細かなものが薄く仕上げられている。刷毛目仕上げが多いが、中には貝殻条痕を施したものも見られる。焼成は一般に良好で、色調は褐色または灰褐色である。

第50図：3・4は凸帯間の鋸歯状沈線を欠き、器壁も厚い。型式を分けるべきかもしれないが、資料の増加を待ちたい。

喜念I式土器

(第51図: 1~27, 第52図: 1~28, 第53図: 1・2, 第56図: 4・8, 第66図: 22・23・29)

壺形土器と甕形または深鉢形の土器でセトからなる(第53図: 1・2), 口縁部は開鉢形に肥厚し, 口縁直下と頸部に細目の凸帯をめぐらす。凸帯は頸部だけ1条めぐらし, 口縁部との間に縦位の凸帯を貼付したもの(第51図: 1・2), 凸帯を3条めぐらしたもの(第53図: 1)などもある。鉢形土器には口縁部の肥厚しないもの(第51図: 16, 第53図: 2)も見られる。

凸帯には普通の刻目の他, 凸帯の両側に対称的に連点を施文するのが特徴であって, 面縄前庭式の施文法に類似している。このような凸帯の貼付は, 口頸部だけにかぎられず, 腹部に及ぶものも見られる。

頸部には細い斜行文または綾杉文を沈刻し, 腹部にも同様の文様の外, 羽状文など種々の沈線文を施している。

壺形土器は丸底であるが, 鉢形土器は平底と推定され, 第53図: 2のように波状口縁で把手を有するものもある。第52図: 15は頸部に削ったような段落ちが見られ, 同22の土器は複雑な把手の一種と見られる。

胎土は砂粒を含まず, なで仕上げで, 焼成は良くない。色調は黄褐色を呈し軟質の土器で宇宙上層式に類似している。

面縄前庭式からの推移がたどれ, 壺形土器と甕又は鉢形土器に分離するという変革が行なわれ, 次の宇宙上層式へ移行する。

宇宙上層式の概要

宇宙上層式土器は最も大量に出土した土器である。器形においても喜念I式に統いて壺形土器と甕形土器の二種類になり, 背景をなす社会の推移を現わしているようである。市来式土器との共伴によって縄文式土器文化との接点が見出されたが, これによって宇宙上層式まで規定することは出来ない。その時期については種々検索されて来たが確定的なことはわからないのが現状である。これについて, 今回は第3地点Cトレーニングに於て, 宇宙上層式土器と弥生式土器との共伴関係が発見され, また第1表によれば, 宇宙上層式土器と弥生式土器とが共に第6層に重点があることが判明し, また石組住居より弥生後期の土器片が発見されるなど, 一応宇宙上層式の時期が弥生時代と接点をもつことが判明し, それも後期と関連があるらしいことが推定された。

土器の器形については, 壺形土器と甕形土器とがあることは明らかで, 壺形土器には丸底がつくらしい事が喜念貝塚出土の小形壺形土器⁽⁶⁾によってわかっていたが, 宇宙上層式土器に平底がつくか否かはあまり追求されていなかった。しかし第1表によると, 明らかに平底を有することがわかった。土器の質においても宇宙上層式と同質の平底の底部が相当量発見されている。おそらく甕形土器の底部が平底であったと思われる。

壺形土器にはあまり見られないが, 甕形土器には波状口縁が見られ, 縦位の把手状凸帯がつくも

のもある。

胎土は粒子が細かで砂粒を混ぜない。焼成は良くなく、黄褐色を呈するものが多く軟質である。風蝕を受けやすく殆ど器面が荒れ、破損面は磨耗して丸味を帯びる。

口縁部が肥厚しその断面形には多くの種類がある。帶状に厚いものを肥厚、断面三角形のものを三角、丸味を帯びたものを蘆鉢、薄く舌を連想させるものを舌状、直口のもの、外反するもの、く字形に屈曲するものをそれぞれ、直口、外反、く字として7つに分類し、層位の比較をこころみたが、結果は第1表に見る如くいずれも第6層に属することが判明した。細かな変化があるように思われるが、造構において共伴関係を追求する外はないようである。

從来宇宙上層式をa・bの二種類に分類して来たが、變形土器において口縁部の平坦であるか波状であるか、あるいは把手があるか否かで分類をすることが正しいか否かは、今俄かに決定しがたいが、從来もその意味もあって、型式名の後にa・bを付けて来た。今回も一応a・bに分けて記載する。

宇宙上層式a 土器

(第57図: 1~22, 第58図: 1~4・6~24, 第59図: 45~81, 第60図: 1~82: 129~132・134~154, 第65図: 1~26, 第66図: 1~21)

壺形、甕形の2種類がある。口縁部が肥厚して、その断面形には多種類の形態があるが、型式分類の要素となるか否かは将来の研究に待たなければならない。この時期のものは、器面に刻線文を有するものはない。

宇宙上層式b 土器

(第56図: 1~3・5~6・9~19, 第59図: 1~44, 第60図: 128・133)

宇宙上層式のうちで、口縁部の肥厚部分に縱刻線を有するもの、波状口縁のもの、縱形の把手状凸唇を有するものをbとした。このうち刻線を有するものは、喜窓I式に後続するもので、aより先行するものと考えられる。

縄文式晚期の土器

(第54図: 14~16)

3片である。胎土は精良な粘土を用い、焼成は良好である。本来器面は研磨されていたと考えられるが、風蝕のために磨耗し、破損面も角がつぶれている。いずれも小形の浅鉢形土器の断片である。第54図: 15の土器は黒川式の浅鉢口縁部で、内外面に四線が施されている。他の2片も同時期頃と考えられる。出土層は14・16は第6層、15は第5層であるが、磨耗度その他から考えて本来の層位とは考えられない。もちろん宇宙上層式の時期を縄文晚期とする資料とはなり得ないものである。

弥生式土器

(第54図：17～20、第65図：22・26、第70図：57～62)

三角形の凸帯を貼付けた破片3個、沈線文を有する壺形土器片1個、三津式壺形土器口縁部破片1個、小形手捏土器1個、充実した脚2個、上底脚台4個である。出土層位は6層を中心としている。

第54図：17の土器は前期壺形土器の鋸齒文の一部と考えられる。胎土・焼成・色影・器壁の厚さなども符合している。同図18～20の土器片は胎土に砂粒を含み、ナデ仕上げで、焼成は良く、硬くやきしめられた後期の壺形土器片と考えられる。第70図：59の土器片は胎土に僅かに雲母を含むもので、焼成良好、褐色を呈する。口縁は内外に張り出し、上面に平坦面をつくる。肩部の張る器形である。三津式系統の壺形土器の口縁部破片である。住居址面の出土で、宇宿上層式との共伴関係が確実な資料である。同図62は小形手捏の土器で後期に属するものと考えられる。第6層の出土である。同図57・60の土器は胎土に砂粒を含み焼成は良好で色影は褐色である。充実した壺形土器の脚台である。共にやや上げ底となっている。南九州の弥生式中期中葉の時期と考えられる。第56図：22・26、第70図：58・61の土器は上げ底の壺形土器の脚台である。後期に属するものと考えられ、とくに58・61の土器は胎土に砂粒を混じ、焼成良好で、色影は紅褐色を呈する。南九州より移入されたものと考えられる。

その他の土器

(第41図：1・4・6～8、第46図：22・23、第47図：18・19・21・22、第49図：7・10・11・15、第61図：7・18、第66図：27・33、第67図：1・6・15・16・18～20、第77図：2・15)

前項までの分類以外の土器について、図集別に記述する。

第41図：1・4の土器は貝殻条痕を施し、焼成の良好なもので、1は口唇部に凹刻線と貝殻圧痕文を有し、4は口唇器面ともに貝殻圧痕文で飾っている。草野式と考えられ、市来式に続く型式である。移入土器である。

6・7・8は奄美の土器かとも思われるが、8は貝殻条痕を施し繩文式の影響を受けている。

第46図：22・23の土器は共に焼成が良く、口縁部は肥厚し、箇による連点又は沈刻線を施文する。波状口縁で、山形隆起部に把手状の凸起貼付け、あるいは作り出している。一型式をなすものかもしれない。

第47図：18・19・21・22、18は断面三角形で貝殻による器面調整が行なわれ焼成は良好である。19は喜念I式に近いもの、21は内外とともに貝殻条痕を有し、口唇部には刻目を施している。色調は黒色、硬く焼き上げられている。繩文式土器であろう。22は宇宿上層式と考えられるが、箇削りの跡を残すものである。

第49図：7・10・11・15、7は外反する深鉢形土器の口縁部である。口縁部は肥厚し、口唇部、肥厚帶および頸部に、2叉に分れる施文具を用いて、斜めに押し引き文を施している。焼成は良好で、胎土に滑石を混ぜている。10の土器は宇宿上層式に類する胎土、焼成である。面輪

西周式くらいの時期であろうか。11・15は面縄西洞式に類するものであろう。

第61図：7・18，O-7区・P-7区にまたがるNo.3貯藏穴より出土したもので、面縄東洞式に平行する時期と考えられる。7の土器は、口唇部の内傾した深鉢形土器の口縁部破片である。口唇部には斜めにするどい窓による刻線を施し、口縁外面には浅い平行沈線文を帯状に施文し、その間に窓による刻目が施されたものである。器面調整の条痕が著しく目立つ。18の土器は、内外共に条痕を有し、焼成は良好で、輪積み面から削離したもので、縄文式土器の破片である。

第36図：6・15・16・18～20、6の土器は器壁が薄く、胎土は細かで、滑石を少量混ぜている。器面は美しく内外面ともに研磨され、色調は紅褐色で、焼成はきわめて良い。僅かに2条の刻線の端が見える。6は口唇部に粘土帯を貼付けた土器、口唇と口縁外面に範刻み文を施す。15は丸く膨脹した口唇部に刺尖文を施す。16・18は口唇部に連点文または斜行凹線文を施す。19は口唇部より裏面へかけて綾杉文・貝殻圧痕文を施す。20は口唇部に連点文、口縁外面に沈線文を施すものである。

第77図：2・15、P-7区9層出土の土器である。2の土器は外反する深鉢形土器の口縁部破片である。器面は貝殻縁で調整され、焼成はきわめて良好である。口縁端には粘土紐を燃り合わせた形で貼り付け刻目を施したものである。15の土器は口縁部が僅かに外反する深鉢形土器の口縁部破片である。内外面ともに貝殻縁による器面調整が行なわれている。口唇部には刺突続文を施す、焼成は前者と同様きわめて良く、色調は動褐色である。共に本遺跡では最も古い時期の土器と推定される。

第66図：27・33、27は胎土に雲母を含む土器である。押し引き手法による格子文を施文している。33は断面三角形の口縁部を有し、文様帯には範描きの沈線文を施す。内外面ともに貝殻条痕を有する土器である。

第53図：3～25、いずれも今まであまり知られていないもので、古い部類に入るものと思われる。3・4・12は範描きの直線文を施したもので、山形隆起、口唇部に貼り付けた凸起又は2叉になったつくりだしを有するものである。5・6・7は連点文様を有し、5・7は貼り付け凸帯を有するものである。13～16は第29図：7と同型式である。18～24は細い曲線文を施したもので、貝殻条痕の有るものもみられ、23の土器は注意を要する。8・9・17の土器は粒子の細かな粘土を使用しているが、焼成は良く、9は滑石を少量混ぜている。10・25は宇宙上層式に類似した胎土であるが、焼成は割に良い。25は把手の一部と考えられるが、複雑な器形で原形の推定が困難である。

第54図：1～13、第6層ないし第5層出土の土器である。2～5・7・8の土器は8を除いていずれも宇宙上層式土器の破片である。8は質は宇宙上層式に近いが、焼成がよく硬質である。これらの土器は、まるい棒状の物を磨いたために生じたと思われる、磨耗痕がある。破片を別の用

途に使用したものであろう。1・6も宇宙上層式土器と同質であるが、斜線をやゝ不規則に施文したものである。喜念I式と関連があるかもしれない。9～13は宇宙下層式の部類に入ると思われるが、類形が発見されていない。

第78図：6～12、喜徳IA式・喜徳IB式・喜徳II式のいずれにも、この文様がつくので、型式名は決定できない。

以上その他の土器について述べたが、このうち特に注意すべきものとして、第21図の5、第47図の2・15があげられる。南九州において、縄文式土器で中期末から、後期初頭にかけて凸帯貼付文を有する土器が見られる。未だ型式名は付いていないが、出水貝塚・麦ノ浦貝塚・石郷遺跡・春日遺跡・飛鶴遺跡等で発見されている。前記の宇宙貝塚の土器はこれと関連のあるものであろう。移入土器と考えられる。

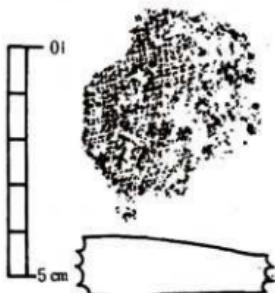
今一つ注意されるのは、第53図の13～16の土器で、一型式をなすものと考えられる。又同図の23の土器も貝殻条痕を有する土器の中で注意すべきものと考える。

布目痕土器

(第31図)

M-10区5層出土の土器である。縦5.3cm、横3.3cm、厚さ中心部1.3cm、周辺部0.9cm、底部破片である。内部には指先でなでたと思われる凹凸があり、底面に平織の布目痕が印されている。底部周辺は1.5cm幅に器面が剥げ落ちて布痕を失っているが、紅褐色を呈しているところから、火熱による剝離と考えられる。内面にもこげつき痕と見られる灰褐色のしみ付きが見られ、壺形土器の底部と推定される。

胎土には石英・雲母等を混ぜ、焼成は良好である。九州では縄文時代晩期に組織痕土器を伴ない、布目痕を有するものもあるが、土器の質が、この土器とは異なるようである。



第31図 布目痕土器

弥生式土器では、中期より底部に布痕を有するものがあるが、南九州ではその出土例があまり知られていない。ただ後期の土器の凸帯の刻目に布痕を印すものがある。この破片は弥生式土器の底部と考えられるが、移入品であるのか、奄美で作られたか今のところ不明である。サウチ遺跡では、弥生前期の層から紡錘車が発見されている⁽⁷⁾から、布の生産は行なわれたと考えられるので、後者の可能性もある。

土器底部

(第55図：12、第61図：20・21、第65図：12～21・23～25、第67図：22、第68図：1

～62、第69図：1～54、第70図：1～56、第77図：22～24・26、第78図：13）

第1地点において出土した底部の総数196個（弥生式土器を加えず）内平底98個、丸底98個で同数である。

底部を、平底・張出し平底・上げ底・丸平底・丸底・貼付丸底の6つに分類し、風蝕によって第4層を欠く地点および、溝の入り込みのある地点をさけて、層位別出土数を出した結果が第1表であるが、丸底系統は第6層に重点があり、宇宿上層式と密接な関係があることが判明した。平底系統は第6層に重点があるが、第7層、第8層にも相当出土していて、宇宿下層式、上層式のいずれにも平底はつく事が判明した。宇宿下層式としたものでは、面縄前庭式と喜念Iに丸底がつく他はすべて平底である。

底部で特殊なものとしては第68図：53の土器がある。木葉を敷いて土器を作製したもので、兼久式土器の底部と考えられる。

第69図：54の土器は小さな平底で、丸底に近い形態であるが、文様を底部付近まで施文しためずらしい例であるが、喜念I式であろう。

土器の条痕

（第55図：1～11、第62図A：9～12、第63図：1～12、第64図：1～10、第62図B：1～4）

貝殻縁による器面調整が行なわれるのは、宇宿下層式に限られる。第55図の土器片はすべてM-5区第8層の土器である。第7層との境には石組遺構があって、第7層の遺物との混交を起し得ない条件となっている。M-5区の7層の石組遺構からは、市来式と面縄東洞十市来式の土器が共伴出しているから、第8層の土器は更に古いものと考えられる。

第62図A：9～12の土器は第7層出土の土器で、12だけが第6層出土である。第63図：1～12の土器は発掘時は第9層としたものも含まれ、第7層を主とし、Y-7区・D-7区等では第4層となっているが、風蝕によって第4層を欠く区域であるから、深い層に該当する。第64図、第62図Bの土器も第7層を主としている。第2表によれば条痕文土器は第7層および第8層に出土する外、第6層以下には出土がみられない。

滑石入り土器

（図版21の下）

型式分類の中でも滑石の混ざった土器があったが、ここでは無文のもので、滑石を多く胎土に含む土器を挙げた。普通、褐色を呈しているが、多量に滑石を含むために灰白色を呈するものもある。ほとんど第4層出土である。